



新宿占術師アキラとレヴィン

橋本昂祈

目次

琉球王国に眠りし姫	1
827 と素数の謎を追いかけて	8
ティンバ～凄い技を持つ一匹狼～	12
ミッドナイトウィング	16
DNA に刻まれた謎とマスカケ線	18
占術の開発者家元とアイドル占術師 KAKO	21
真夜中の恋の記憶	30
ピンクタイガーアイとゴールドルチル	34
昼下がりの国際通りにて	38
占術師・絢香～琉球と台湾の DNA を持つお姫様～	41
絢香の手の温もりと緑色が奇跡を生んだ過去の記憶。	44
絢香のパーソナル『智』とアキラのパーソナル『公』	49
人気運命線とバイオリズム	54
龍神天珠に矢が刺さるスピリチャル現象	58
提婆達多の成仏と福沢諭吉	62
DNA とミラーニューロン	66
世界で一番美しいサンセット	70
夢から醒めないままあなたと。	73
3時 26 分の記憶とラッキーナンバー 1	80
感傷的なアキラのリラクゼーション術	84
夢の中で逢えたら	87
未知の道をゆくための羅針盤	90
現代建築と風水と数字に隠されたシークレット	94
ソアラとレヴィン	99
もしも昔のポエムを見られたら。	104
琉球王国で観る夢とソウルメイト	109
マジカルカラーの魔力	114
古代史に隠されたシークレット	119
占術師だって素敵な恋愛がしたい	124
羽衣伝説と琉球に眠りし姫	128
G 線上のエリア	131
台風の来る頃には	135

琉球王族の DNA	138
禁断の果实	141
マトリックスと成功の法則	145
仮想現実と神々の演劇	149
宮沢賢治と秋の修羅	153
色気の星と人気商売	156
哀愁の帝国ホテル	160
星崎詩音とラッキーセブン	164
琉球王国への旅立ちと終わらない夢	168

琉球王国に眠りし姫

-8月26日-

橙色したお月様が夜闇の中で凍えているように観えた。
G線上のアリアのせいだ。

母親のお腹の中にいた微かな記憶が蘇ってくる。
赤ちゃんの頃のような純粋な気持ちで人の幸福を願うことは僕にはもうできない。

air on the G string.

ピアノ弾きは技を磨き続けた。
彼女は言った。
「太陽はあまり好きではない」と。
冷たい雨に射たれることも。凍えるような雪が降ろうとも。
ひとり寒風に晒されて、。
悲劇のヒロインを演じているのだろうか。
天空を駆ける使徒たちの物語が幾千にも綴られては消されていく定め。
聖なる母マリア様へ。

by Aki- ra

僕は詩的な日記を書き終わるとコンビニへ向かった。頭がだいぶ痛むけれど今日は週刊スピリチュアルの発売日だから仕方ない。行くしかない。

月下の棋士の世界観に影響を受けた僕は将棋そのものの興味より《月灯りの道》が似合う人になりたいと思うように変わっていった。

将棋の世界を極めたら「俺の人生を例えるなら銀だ。」と語れるようになるらしいけど「一生涯、歩兵の精神で生きる。」という人もいて、人間の考えていることや行動パターンは僕にはいまいちよくわからない。

月灯りが似合う人に憧れている僕は陰を微塵も感じさせることなく生きてきたはずだ。友人達の前では奇妙にも明るく振る舞うことや話しを合わせることを覚えてばかり。

友人たちのバンド活動に加わろうとして通販でエレキベースを買ってみた。今みたいにインターネットでワンクリックで注文できる時代ではなく、わざわざ店に直接電話して「〇〇マガジン何月号の〇〇ページに掲載されている〇〇〇番のベースセットまだ在庫ありますか？ 色は黒が良いです。」と丁寧に説明しなければうまく伝わらない。

後はオリジナルのフォーマットをコピーしてFAXで送る方法もある。が、届くまでお互い余計な手間がかかってしまうのだ。しかも僕はコミュ障で普段から無口だったから3歳歳上の姉に聴いてからメモ用紙に原稿を書いてそれをチェックしてもらわないとダメなのだ。

そうまでなってしまったのは、僕が子供のころから姉に何気なく心配をかけるような行動をとってしまうおっちょこちょいな性格に原因がある。

まだ幼稚園にも通っていない幼い僕は、姉の勉強机の上に可愛い消防車のマグネットを見つけた。そのマグネットの四角いフチが僕にはどうしても息苦しく思っていたのだ。ハサミでマグネットのフチを切っておいたら喜んでくれるのか、マグネット自体は「カッコよくきって欲しい」と言っているよう思う。お母さんがいないからおばあちゃんに聴いてみよう、と隣の和室へと。祖母は言う。「オネエちゃんがとても大切にしているものだからむやみに触ったら傷つくかもしれないよ。必要ならオネエちゃんが自分でハサミできるから。そっとしておいてあげて。」とアドバイスを受けたのであった。

祖母からのアドバイスをすっかり忘れた僕はその30分後には消防車のマグネットをカッコよくしてあげよう！とハサミでチョキチョキやりはじめた。しばらくして祖母の言葉を思い出し顔色が急に悪くなり血の気がひいていく。

姉が激しくカミナリを落とす顔と歓喜に沸く顔の2パターンが浮かびあがり、気が気ではなくなって、祖母の部屋でゴロゴロしながら忘れようと心みたり「さっきからどうしたの？ 少し顔色悪いんじゃない？」と言われその優しさが神様の仕業に思えて僕はぶるぶると身体を震わせながら姉の帰宅を待っていた。

明るく元気よく「ごめん！ ハサミで切っちゃった！ 本当にごめん。しばらく何でも言うこと聞くから許してください。」と言うべきか、ただただ、悲壮感を漂わせて電気を消

した暗い部屋でメソメソとして反省の態度を示した方が伝わるのか幼き僕は必死に考えていた。

しかしながら、その日の姉は、心なしか鼻歌まじりで機嫌よく帰ってきたのである。パターン2の暗い部屋で待機していた僕は、すぐさま作戦を諦めて全力で素直に謝ることにした。

この頃からなんとなく女性の方が本当は強いんじゃないか？そして本気で怒らせると地震カミナリ火事オヤジの父親よりも姉の方が怖いのではないだろうかと思いはじめていた。終戦直後に生まれた僕の父親は家庭内では亭主関白というタイプに属しているらしい。一言で言えば「黙って俺の後ろについてこい！」と偉そうに言う人間を日本ではそう呼ぶ。

普段は優しいのだが、一度怒らせると、ファミコンを子供たちからとりあげベランダに叩きつけて壊したり、プロレスのパワーボムという大技を仕掛けられて僕は逆さつりのままベランダから投げられそうになったほどだ。

しばらくは父親と口をきけなくなったのだが、ほどなくして父親には逆らうことをやめ勉強を頑張ることにした。父親が壊れてしまったファミコンを何度も修理にチャレンジしている姿を見てしまったからだ。彼がファミコンをばらしてハンダゴテで作業してたので、気になってしまい「その煙出る機械なに？」と質問してしまい父親との無言の冷戦は終わりを告げた。

こんな調子だから僕は小学校でもロクな友達付き合いができずにいて、たまたま低学年の時に、「アキラは男子からいじめられるタイプ。だから俺が守ってあげる。」と幼稚園の頃からの友人がそう言ってきたのだ。奇妙な友達付き合いは6年間にも渡った。その孤独な少年と行動を共にすることになりすぐに彼は女性から人気が出るタイプであることがわかった。彼はジャニーズ系の可愛い顔たちをしてるので放ってても女性の方からすり寄ってくるのだ。その少年は学校でも明るくて面白くて雰囲気盛り上げてくれると言う。

彼の後にくっついていくと公園で学校の友達と必ず出逢う。カラーボールとバットを持ち寄って野球をしたり鬼ごっこの最新版ケイドロという遊びに興じているのが夕暮れまでの日常風景だ。

彼が孤独になるのは夕暮れを過ぎてからのこと。

ひとり寂しそうにコンビニエンスストアへいき
「うちは夕飯が遅いから。」とよく解らない理由をみんなに告げ、おでんや肉まんを買って団地の下のホールで時間を潰しているのだ。
その様子が気になったのかひとつ歳上の先輩たちが彼のことを気にかけて話しかけるのである。
夕方過ぎにホールの下に野球道具を持ち寄り集まってくるのが日常の風景へと変わっていった。

僕の家はあいにくルールがうるさい。
「5時の鐘がなったら必ず帰ってこい。
どんなに遅くても6時までには帰って来なければ夕飯は食べさせない。他所のお宅と違ってうちにはおばあちゃんもいるんだ。小学生のおまえでも言ってる意味は解るだろ。」
という意味が僕にはわかるはずがない。
父親の喋り方はだいたいいつも説明不足なのだ。

気のいい友達たちは夕ごはんを食べたら出てくればいいと言う。「ソフトボールの夜の練習に行く。」と親に言えば絶対に大丈夫だ！と誰がきいてるわけでもないのに野球グラブで口元を隠しながら密談を交わす。

密かに気になっているのは孤独な少年と反りが合わないで仲間からはじかれた色黒のサーフ少年のこと。

朝の通学はその日焼けした少年ととぼとぼ歩きながら学校へ行くのだが、僕が元来の無口の上に学校の先生のことをニックネームで呼ぶことについて「アキラはみんなの真似をしない方がいい。黙ってれば女子から人気が出るよ。けっこう長いこと一緒に通学してて学校でも時たま様子みていて最近ようやく気づいた。アキラは口で失敗するタイプだと思う。」

大人びたサーフ少年は学校では憎まれ役だ。
が、どうせ大人の綺麗な女性たちに囲まれて僕たちにはよっぽどそっちの方が羨ましいのに。
そのことを素直に言うと
「アホか！俺らが20歳になった時には彼女たちいくつだと思ってるんだ。母ちゃん相手に恋愛しろというのか。」

「母ちゃんと結婚するって未だに言ってる人もいるじゃん。女性には歳は関係ないと言わないと。うちの母ちゃんに怒られる。」

「アキラ。そういう話しじゃないんだよ。
良いかい？ 馬鹿にして言ってる訳じゃないから少し落ちついて聞いてくれよな。
女子に興味があるってのは人間としてあたり前の感情なんだ。それに俺が大人の女性たちに遊んでもらってるのは仕方ないことなんだ。親父が波乗りやってるから俺は生まれた時から海にいるのが当たり前で育ったんだ。
ハワイではナイスバディの金髪のおねえさんがたくさんいるし海にいくとギャル風のおねえさんしかいないから悪いけど恋愛対象ではないんだ。人間って不思議と見慣れてくると飽きちゃう生き物なんだ。将来はわからないけれどさ。清楚な子とか森にいそうな子の方が可愛くみえてしまうよ。アキラはどうなんだ？」

「その気持ち。わからなくもない。
まあ、僕はみんなが可愛いっていうから一番人気ある子に投票して口裏を合わせてるけどさ。
人はたまに、嘘をつく。今の僕みたいに。
ところで、月曜日の夜にやってるドラマのヒロインの人ですら歳をとるとダメってことなのかい？
僕は母親の言うことを全て信じている訳ではないけれど容姿や声が美しいキミのお母さんとだって恋愛できそうさ。誤解しないで欲しいのは、単純なる憧れ。綺麗な人は綺麗なままであって欲しい。」

「人ん家の母ちゃんが好きとかいきなり気持ち悪いこと言うなよな。まあ、つまりそういうことか。なんとなく解った。アキラって興味あることと一対一ならけっこう喋るんだな。
サーフショップに出入りしてる女子高生の人ならひとりいるけど学校帰りに寄って行くか？
でもあまり期待しない方が今後のためだぞ。」

「うーん。
そろそろ勉強のために寄っていきたいけれどソフトボールの絡みもあるし。いきなりはレベル高くて無理だ。」

このような調子で家族や兄弟、友達たちなどの話しを傷つけないように振る舞うことを、いつしか

『カメレオン人間』になるぞと彼は警告を鳴らした。

「うちの親父が言った。みんなに話しを合わせているうちに自分が何者とか忘れて、何が大好きとか言えず。そのうちに本気で自分自身を見失ってしまう人を多くみてきたらしい。アキラは根が優しいからみんな心配だ。俺は友達からはぶかれたり孤独とかにはけっこう慣れてる。本当に心通わせた友達は遠くに住んでいて中々会えないだけ。海へ行けばすぐまた逢える。同じ歳でついつい生意気なこと言ったけどさ。

おまえ良い奴だから嫌われなくなかった。

けど今日は本音を言わせてもらったよ。悪く思わないでくれよな。お互いちょっとだけ大人になった時にまた会おう。」

これは彼が僕に言った最後の言葉だったかもしれない。

大人になり色黒のサーフ少年はハワイ出身の白人とユニットを結成し、彼らはインディーズながら数百万枚のセールスを記録するほどに、音楽業界の常識をことごとく覆して躍進し続けたのだ。

僕が趣味ではじめた宿曜占星術で色黒のサーフ少年と白人の相性を観たら榮親(えいしん)という最高の相性であることが解り、逆に、幼き頃に、色黒のサーフ少年をいじめていた孤独な少年と彼の相性を調べて観ると安壊(あんかい)という最悪な相性であることが判明した。

色黒のサーフ少年の誕生日は8月28日で、僕の誕生日は8月27日、たった一日違いの誕生日なのに、こんなにも大きな差をつけられてしまったことに対して、西洋占星術や東洋占星術だけでは読み解けない不思議な運気の流れの謎を知りたかった。

今は音楽雑誌やテレビの向こう、CD屋さんで彼の姿を見かける度に、遠目から見ていて気がつくことなのだ。彼の周囲には不思議と『榮親』の関係が集まってくる。

かくいう僕も、3000人を目の前にして活動報告をした時には、僕の活動を心身共に支えていてくれた大切な仲間たちがことごとく『榮親』という最高の相性と出て、仏法の神秘を痛感したのであった。

幼馴染のサーフ少年とは違い、僕にはピアノを弾くような素養もないし、詩を綴る感性も弱いと思っている。いざ物語を描こうと奮起して原稿用紙とエンピツを買ってきても、ついでに買っておいた夜食のサンドイッチの方が気になってしまう。

そういう信念なき男なのだ。

食べたらアイスコーヒを飲んでテレビ観ながらまったりして。嫌なことすべて忘れて赤ちゃんのように寝ることを幸福と呼んだ。

ゆるくまったりと生きる人間とはいえ、リアルな人間付き合いは相変わらず苦手だ。そろそろ人間関係にもほとんど疲れてきていた 20 代最後の年に月をベースにした星占いを趣味として学びはじめたのである。

入門セットのエレキベースはいつしかエレキギターへ変わり、最終的にはアコースティックギター 1 本と安いエレキが 1 本だけあればいいとなった。

リリック歴は長いようで浅く、寝てる時間にさえ神がかり的なインスピレーションが降りてくることを密かに期待しているタイプだ。一流を目指していたつもりが目指すジャンルがある日突然変わってしまい、子供向けの可愛い詩しか書けなくなるなどして、成長の遅い僕でも、どうにか、ブログに記事を書くことを覚えたのだ。

早熟と晩成運。

この違いはどこで生まれるのかをはじめの課題に設定して星占いの世界での遊学が始まっていったのである。

827 と素数の謎を追いかけて

— 静かなる誕生祭 —

夜来、夢の中でも優しい香りに包まれた。
台湾から琉球に伝わるほんのり甘くてスパイシーな香り。

色と数字の織りなす星語り。
あなたも琉球占星術を試してみませんか？

— 占術師アキラ —

2015年8月27日、銀座にある隠れ家的なカフェテラスにて僕はパソコンを開いて黙々と作業をしていた。

琉球占術とは、東洋占星術と数秘術、古典風水に加えて心理学をベースにつくられた沖縄発祥のオリジナルの占いだ。と、同時に高級な天然石の販売も手掛けているので、店舗に立つ時はハイブランドのお洒落な服を着て出なければいけない。

ただし、インターネット店においては、ダイレクトレスポンスマーケティングといって、お問い合わせがきてから幾つかのステップを踏んで顧客とのリアルセッションがはじまるので、普段は、ヨレヨレのTシャツを着ている方が作業しやすい。最悪は急なセッションが決まった時にデパートでハイブランドの服を店員さんにセレクトしてもらってから試着して購入し、ヨレヨレのTシャツは「捨てて下さい」という臨機応変に動ける人材でなければ、ネットのスピード感についていけない。インターネット店は誰しもができるわけではない。

だから、発送作業がメインのリアル店舗よりもインターネット店はうちの会社において花形部署なのだ。

東京にて一人インターネットをメインに活動している僕は、沖縄で活動する占術の開発者である家元や家元の一番弟子である佳子先生たちとは主にLINEでやり取りをしている。

本店は沖縄県の国際通り沿いにあり、沖縄県はもともとは琉球王国という独立した国家であった。

僕の母親が沖縄出身ということもあるのだが、僕や家元、佳子先生は、沖縄県は日本ではないという認識を持っている。江戸時代に琉球王国が薩摩藩からの侵略を受けて、その後、琉球藩という名で日本に帰属することになったのだが、もともとは琉球王国は、中国との関わり合いが深く、東南アジア全域の国と貿易をして栄えた歴史があるので、沖縄県となった今でも、琉球民族であることに誇りを感じている人が多い。ていんさぐぬ花という沖縄民謡に代表されるように、琉球言葉は日本語とも中国語とも違う不思議なイントネーションで伸ばす音が特徴的なのだ。

コピーライティングやインターネットマーケティングのノウハウを教えて貰ったばかりの僕は、アメブロとFACEBOOKの記事に加えて、無料メール鑑定をこなしている。記事を5記事書き終えた僕は琉球ガラスのカップに注がれた冷たいコーヒーを飲みほした。

実は、8月27日は僕の誕生日だったのだが、宮沢賢治の誕生日も8月27日であることにご縁を感じていて、占い師というよりは、未来、小説家になるのが夢でこの世界に入ってきた。

しかし、普段ろくに本も読んでこなかった自分は、短い文章を書くことでも精いっぱい。もともと無い頭をフルに使って記事を書いているのだし、せっかくの誕生日なのだから、たまには仕事から離れてご褒美に甘いケーキでも食べたいところだ。

FACEBOOK記事はタイムライン上に消えていく性質の宣伝だから、読んでもらえるのにも一苦労する。僕はさっき書き上げたばかりの記事を読み直した。

スパシーな香りと星語りをかけて韻を踏んでみたのだが、3行広告は詩的なセンスがあるので、昔、アマチュアのバンド活動で歌詞を書き続けていたことが、家元や佳子先生に評価され始めていたことに対してとても嬉しくやりがいを感じていたのだ。

僕はカフェテラスの窓際の席から外を眺めた。

夕暮れの景色を観ながら歩くことが大好きな僕は仕事道具のパソコンとスマホ、ノートレザのビジネスバッグにしまい帰り支度をはじめた。

そういえば今日は、幸運を運ぶ星とされる木星が乙女座にピタリと重なる日。そろそろ満月も近い。

喫茶店をでると、お洒落でセレブなお嬢様たちと何度もすれ違って、彼女たちを眺めて

いるとなぜか無性にタバコが吸いたくなるのだ。有楽町駅周辺で唯一タバコが吸えるのはパチンコ屋か少し離れたところにある公園だけだ。

柳が揺れる公園へたどり着くとポケットから煙草を取り出して一服していた。すると、どこからともなく人が集まりだして休憩中の調理師の人や仕事をおえたばかりのサラリーマンもニコチン切れの症状を埋めるために、今日も一仕事やり終えた満足感と言った表情でタバコの煙が消えていく空を見上げて安堵の表情を浮かべるのであった。

今日は幸いにも、メール鑑定の依頼が少なかったので、せっかくの誕生日を一人お祝いすることにしよう。さて、これから何処へ出掛けようか。

大田区の蒲田に住んでいる僕は京浜東北線の一本道でだいたい横浜か有楽町しか行かないワンパターン人間。しかしながら、だいたい夜の7時から深夜までにお問い合わせの電話やメールが殺到するケースがあるので、スマホのバッテリー節約のため、あまり遠くへは行けない。

僕は遠出することを諦めておとなしく蒲田に帰ることにした。

京浜東北線に揺られて蒲田駅ビルに着くと、駅ビルの1階にあるケーキ屋さんで苺のショートケーキとチョコレートケーキを買った。

リスペクトする宮沢賢治のバースデーだから静かにひっそりと銀河鉄道の夜でも読もうと思う。

ただでさえ小説が嫌いなのに児童向けの本ですら読み解きに時間がかかってしまう。

つい勢いで「賢治研究こそ我が人生！」と友人に宣言してしまったから余計に話しがおかしくなってしまった。黙々と勉強をはじめなければならない。

大好きだった映画の影響で、G線上のエリアを聴きながら、読書をするのが最近のマイブームだ。

家に帰ると僕はおもむろに制服を脱ぎ捨てて、シャワーを浴びていた。

上司であるティンバからの着信に気が付いたのは、僕がご褒美の誕生日ケーキを食べようとした瞬間だった。留守電を再生するとティンバからの伝言が入っていた。

「もしもし、橋本さんですか？ お疲れ様です。ティンバです。実は沖縄から出張で東京に来ています。もし今日か明日、お時間ありましたら、ぜひ、銀座でお逢いしましょう！」

マジカルカラー黄色を持つ、ティンバは時々、こういうサプライズをすることが大好きだ。

しかしながら、さっき銀座から帰ってきたばかりの僕は「明日にしてくれ」とティンバにLINEで送ると「明日の7時、東銀座の駅前についたら電話してください。」とすぐに返事が来て

「了解です」と適当に短く返事をしてダメ押しのLINEスタンプをぽぽんぽん、と3つ4つ送り付けて(誕生日だから邪魔するな!)と無言のアピールをしたのである。

翌日、ティンバに逢いにいつもの青い京浜東北線ではなく京急電鉄の赤い電車に乗って東銀座へと向かった。赤は僕のラッキーカラーだし、京急蒲田駅出発であるならば都営浅草線の東銀座駅へも乗り換えなしでいけるからだ。

ティンバ～凄い技を持つ一匹狼～

東銀座へ着くと、たまたまタイミング良くティンバからのメールが届いた。歌舞伎座のあたりで待機しているというメールを確認した僕は、方向音痴であるがゆえに、いまいち歌舞伎座への行き方を忘れてしまい、グーグルマップで位置検索をしながら、南の方向へと歩きだした。

人気フルーツパーラー店である不二家レストランの前を通り過ぎる時、不覚にも、昔、付き合っていた彼女のことを思い出してしまった。彼女は東銀座の新築マンションに住んでいたのだから、銀座の街は僕にとって青春の思い出深き土地だった。

良く遊んだり外食したり、彼女の部屋で手料理をご馳走になった記憶は、30歳も半ばに差し掛かると、恋愛感情もわからずに一人でいることに慣れきってしまい、仕事や趣味であるバンド仲間と過ごす時間にこそ最大の生きがいを感じていた。

このまま「結婚は一生しないかもしれない」と友人にため息交じりの愚痴を漏らすと「女からモテるのにもったいない！」と、口を揃えて言われることにも慣れていてた。

しかし、占い師になる前職のセラピスト業界でも、女性が9割以上を占める職場だったので、女性と一緒に行動することは、単純に友達や同僚としてしかみれずに、年々、浅い付き合いだけの女友達が増えては、結婚して離れていき、また出逢う、というだけの話なのだ。

ティンバは琉球占術に出会う前は、システムエンジニアをしていて、投資に興味を持ち始めたことがきっかけで数秘術(すうひじゅつ)を使い投資の時期やタイミングなどを予測していたらしい。

やはり、この世の中には、人智では計り知れない大いなる宇宙の法則によって動かされている。

できるならば、神の作り上げた設計図の一部分でも良いから知りたい！とこの世界の人間はみなそう願ってスピリチャルな世界への遊学を始めるのだ。

僕は源氏物語の影響を受けて、月の暦をベースとした宿曜占星術(しゆくようせんせうじゅつ)を趣味ではじめたことがきっかけで、琉球占術の門を叩いた。宿曜占星術は個人

の特徴を観るのに的中率の高い占術として広くビジネスマンの間で知られている。なぜならばビジネスで組む相手との相性を観ることに長けているのが宿曜占星術だからだ。

宿曜占星術は長い間権力者たちしか使えない占術だったし、そもそも、唐に渡った空海の時代に仏典を装って日本に入ってきた歴史があるので、仏教徒であることが宿曜を使いこなす大前提としてあるのだ。

しかしながら、書籍などによって一般公開され広く知れ渡るようになった現在となつては、宿曜経を使いこなせるだけの器量なき人が営利目的だけで突っ走り、相性が悪いと出た相手を片っ端から断捨離していったり、もっと重症の人になると、日の吉凶で悪い日という結果が出た時には一切外出もできない、という可哀そうな人もたくさん見てきた。

琉球占術の凄いところは、一切の妥協をせずに、クライアントさんにとってのカウンセラーであり、プロファイラーとして、科学的根拠を示していることにあるのだ。

実は、宿曜占術でひも解くと、ティンバと僕は相性が悪い。深い付き合いにはならないだろうとは自覚しながら、適切な距離感を持ってして楽しく付き合っているのだ。

歌舞伎座の近くの交差点でティンバを発見した僕は、おない年であるにも関わらず、妙に老け年老いて観えるティンバのことを一瞬、哀れに感じてしまった。びしっとしたスーツ姿でビジネスカバンを持ち眼鏡をかけているティンバは遠目から観るとスタイリッシュで知的に観えるのだが、髪の毛を黄色に染めていることが残念に思える。

しかしながら、この人口の多い東京においては、待ち人を探すのも大変な時があるのに、金髪のスーツ姿のティンバは銀座にはいないタイプの属性なので、よく目立つ。人込みの中で迷わずにティンバを見つけられたことに幸運を感じ、マジカルカラーに感謝するのだった。

「アキラさん！ お疲れ様です！」

と、挨拶したティンバは、額に若干汗を浮かべていて、システム開発部の多忙な身の同士、心から「お疲れ様です！ 今日貴重な時間を頂いてありがとうございます」と、僕は言った。

銀座の街並みを歩きながら話していると、ティンバのスマホは1分おきにピコピコと通知を知らせているので気になってしまい「沖繩からのパワーストーンセレクト依頼ですか？」と尋ねると

「アキラさんすみません！ ちょっと本店に電話します」と言いティンバは本店へ電話をかけた。

ティンバは少しイライラした様子で「クライアントさんの5シークレットを教えて！」と、告げると、眉間にしわを寄せて、真剣な眼差しで「この場合は、クライアントさんの押しが必要だからガーネットをお勧めしたい。あとナンバーを入れるかは好みがあるからそっちで聴いて。」と言い電話を切ろうとしたが、思い出したように「在庫がなかったら、また連絡して！ ヨロピコー」とユーモアたっぷりのセリフを吐き通話を終わらせた。

「沖縄からですか？」

「ええ。さっきも言った通り最近からパワーストーンのセレクトもやらさせて貰ってるので。頭が爆発しそうですけど、奥が深くて楽しいです。」

「ガーネットは、恋愛の石ですか？」

「ガーネットだから恋愛とか一概には言えないけれど、一応恋愛成就のストーンとしてお出ししています。」

黒い石に観えるけどワインのような深みのある紅い石がガーネット。光に照らすと中心部には葡萄酒を凍らせて砕いた様な味わい深い模様が観える。恋愛において後一步の勇気が必要な時にこそ持って貰いたい石のようだ。

「アキラさんは宮沢賢治がお好きだったと聴きましたが、僕も子供の頃に銀河鉄道の夜を観て影響を受けました。大人になってから気づいただけですけど。まあ、僕はFF7のせいでクリスタルが大好きになってしまい、気づいたら占い師になってた感じです。」

人は同じような体験談を聞くと親近感が沸き、徐々に好きになっていく。

アキラはティンバとの間にあった距離感が少しだけ溶けた気がした。ティンバは熊野古道、高野山、空海の伝説の謎を探求するスピリチュアルツアーが開催されていることを紹介してくれた。密教系のスピリチュアルツアーは少しだけ怖い気もするけど機会があれば全国のパワースポット巡りをしてみたいものだ。

「もしも、宮沢賢治の世界観を深めたいならば、沖縄県に行ってみるのもお勧めですよ！」
子供のような瞳でワクワクした体験談を語るティンバ。

そのしわくしゃにしたティンバの笑顔はアキラにとってとても可愛らしく観えて、愛されキャラのパーソナル匠(たくみ)とアメリカンジョークを飛ばすノリの良さに、黄色のエネルギーを感じた。

3世代前のルーツを遡って探求してみることが自分自身を知るヒントになることと、全ての夢に繋がっている、というティンバの主張を聞いてアキラはこの人だったら間違いない、と沖縄行きを決めた。

なぜならば、アキラの母親の故郷は、琉球に眠りし姫の伝説があり、もしも、マスカケ線を持つ自分自身の強運が真実であるとするならば、宮沢賢治の持つ『827』と『法華経』の謎を解き明かせるヒントがあるはずだ！とやがてくるかもしれないソウルメイトとの大恋愛に心を熱くした。

ティンバとの夜は短い時間だったしすぐにクライアントさんの待ち合わせ場所であるアイリッシュパブへと消えていったが、アキラにとっては言葉にはできないほどのドキドキ感を覚えたのである。

ミッドナイトウィング

銀座でのティンパとのセッションの翌日、僕は東京羽田空港の発着ロビーにて沖縄行きの航空チケットのキャンセルを待っていた。8月の終わりとはいえまだまだ沖縄は観光シーズン。

僕は第二の故郷である母親の故郷・沖縄の浦添市へ先祖参りする時だって、シーズンオフの2月を狙って、往復2万円の格安チケットを買って里帰りすることにしていた。8月の沖縄の殺人級の灼けるようなヤバい暑さにはほとんど参る。

同じ大田区の蒲田から羽田空港へ向かう交通経路は京急線のエアポート急行を使うユーザーが多いけれど、地元民はタクシーを使うことの方が多い。沖縄旅行はバックパッカーのように安い旅をする場所ではなく、ある程度計画を練ってレンタカーを借りて観光することをおススメする。スキューバダイビングや世界遺産巡り、北谷のアメリカンビレッジ、中部に位置する名護のラグジュアリーホテル、南部へ行けば最高聖地である久高島を一望できる最高のパワースポットへも行ける。

世界で一番美しいサンセットと言われるのは、宜野湾にあるサンセットビーチだけでなく、隠れ家的なエスニックレストランの庭で童話に出てきそうなブランコに乗りながら恋人とサンセットを眺めながら語り合うのもお洒落でもある。たった一回や2回の沖縄旅行では、この島の持つ魅力は味わえない。

なぜならば、沖縄本島だけでなく、小さな離島に建てられた古来琉球の自然美をもとに設計されたリゾートホテルのプライベートビーチで過ごす沖縄時間が極上の癒しであるし、那覇の国際通りから少し車を走らせればハワイを感じれる場所などたくさんありすぎて、初めてきた友達にはどこへ連れていこうか本当に迷うほど魅力溢れる島なのだ。

夕刻7時を過ぎてスマホアプリを見ると羽田-那覇のキャンセルがちらほらと出始めている。

しかも、座席のナンバーが『55』番で、昭和55年生まれの僕は迷うことなくこの座席で沖縄へ向かうことに決めた。神の思しべし、といえはスピリチュアルファンならば理解してくれることだろう。

青年時代の修行の期間を過ぎた30も半ばに差し掛かると、もはや、運命のスピードの速さに判断を迷うことが少なくなる。誰だって、普段は多く語らないだけであって、誰しものが、神の存在やキセキを信じはじめた時から、数字に隠された謎や自身のルーツを求めて、遊学を開始する。自分はなんてちっぽけな存在だったのだろうか？と、夜闇に打ちひしがれた夜もある。闇が深ければ深いほど、放つ輝きが大きいことを仏教の始祖である釈迦が説いている。万人の無限なる可能性に気づくことを悟ったのだ。

僕は亡き兄貴がずっと使用していたスーツケースとアコースティックギターを預けて、手荷物検査とボディチェックを終えると、最後のタバコを吹かしに喫煙所へ向かった。灰皿が置かれたステンレス製の台の向かい側、どこかで見かけたことのあるような顔。(ああ、テレビに出演している女優の人か。)

幼馴染が音楽家ユニットとして人気があるせいか？ 人からはよく「羨ましい！」と興奮気味に言われるけれど、普段はばっちりメイクしている彼女たちだって、テレビを離れれば一人の人間である。タバコくらい吸っててもおかしくはないだろう。

しかしながら、こんな満月の日にわざわざ羽田で会ったのも何かの縁。僕はスマホのブラウザから彼女の生年月日を調べ、新しいタブを展開し、27宿曜占術で相性を調べてみた。(なるほど、ソウルメイトか。一期一会とはいえ、どこかでもう一度会うような気がしてならないな。)

夜闇の静寂を切り裂いて飛行機のジェットエンジンが金属音と油が入り混じったような独特のうねり声をあげはじめると、あきらかにお嬢様育ちと思われる品行方正で端正な顔立ちの美人スチュワーデスがアナウンスをはじめ、僕はそれを聴きながら、それぞれの想いを馳せて南国沖縄へと旅立つ見知らぬ人たちとの無事を、密かに心の中で祈った。

僕たちを乗せた飛行機が、雲を突き抜ける瞬間には、宇宙の神秘を感じ、そして、空から地上を見渡せば、人間の力が及ばないと思えるほどの、大海原や大自然が色とりどりのカーペットのように映り、人の夢や希望が混ざり合う街は、漆黒に染まっていく中で、月明かりだけが唯一の希望であるかのように思えるのである。ライト兄弟が飛行機を発明してからずっと100年。いまだ科学では証明できていない、古代文明の知恵と現代科学でも勝てないギザの大ピラミッド建設のシークレット。

古代文明の人たちは、現代科学よりも優れた飛行船を持っていて、神に近づきすぎたゆえ、滅びたのであろうか？ 子供の頃によく読んだ、宮沢賢治の銀河鉄道の夜の世界観は、僕にインスピレーションや想像力を与えてくれた。こんな感動的な素晴らしい夜には人間を詩人へ変えてしまう。

僕たちは一体どこからきて、どこへ向かって歩いていくのだろうか？

その答えを僕たちはまだ知らない。

DNA に刻まれた謎とマスカケ線

占術師ティンバの勤めるがまま、宮沢賢治と同じ誕生日の 827 の謎、そして、本名と手相に隠された強運の謎を追い求めて、僕は単身那覇空港へと降り立った。

那覇空港に到着したのは PM10 時過ぎで、僕は疲れた頭を冷やしにブラックコーヒーとタバコを求めてすぐさま売店へ行き飲み物と沖縄菓子のチンスーコーを購入して、喫煙所へ向かった。

少し前に、占術の開発者である家元から「到着したら電話をください」と短いメールが来ていたのだが、羽田ー那覇の 2 時間弱のフライト中に書き上げた『気づき』を読み返してチェックしてから電話することにした。

ーアキラの気づきー

DNA に秘められたルーツを探るには、3 世代前まで遡って探求してみることに。

例えば、お墓参りにいきお寺の住職に父親の性に秘められた歴史と教えて貰ったり、親族とあって職業を尋ねてみたりしているうちに、橋本家の特色がだんだんと解ってきた。上皇后美智子様と僕の祖母は正田という性だったことや橋本家は江戸時代に紀伊國屋という屋号で浅草界隈でお商売をしていた旧家であったこと、母親の実家は落ち目だった橋本家とは違っても裕福な家系なのだが、母方のご先祖様は琉球王朝時代に大臣として王家に仕えた名家の血が流れていることを知った。

遠い昔の話とはいえ、琉球王族の血筋が流れていることと、僕の掌に刻まれている天下取りの手相が手相家から言わせれば完全にリンクしているというのだ。

マスカケ線を専門家に見せた時には

「記憶力が良く器用になんでもこなせてしまうほど才能があるので、何をやってもうまくいくが、刺激やトキメキを求めていく相が出ているため、飽き性で仕事が続かないのが問題だ。

適職は 40 歳前後で独立できるような仕事、例えばインスピレーションや他の人が経験できない体験をもとに執筆をしてみてはどうだろうか？

柄にもなく褒めちぎってしまったけれど、マスカケ線は本当に天才型な上に強運を持っているので、仮に失敗したとしても幾らでもリカバリーがききます。ぜひチャレンジしてみてください。

あなたの適職は小説家です。もっと言うならば占いの小説で成功します。」と鑑定士からはっきり言われてしまった。

瀬戸内寂聴（せとうちじゃくちょう）の書籍で、『文学においては落ち目の旧家の出の人ほど才能があって成功しやすいのだ』との趣旨のエッセイが書かれていたのだが、確かに昔から意味もなく文章は長くなっていく傾向にあり、放っておけば一日中メールを綴っていることもあった。

はじめて自叙伝を書いた時にも、たった7日間で111枚の原稿を書き上げてしまったのだが、スピリチュアル世界において『111』というナンバーは特別な意味を持っていて、心の赴くままに書き連ねただけなのに原稿用紙が『111枚』になってしまったことに『神の意図』を痛感したのであった。

鎌倉時代に法華経を流布した日蓮聖人の経典には次のように説かれている。

釈尊滅後700年は正法時代（しょうほうじだい）といって釈迦の教えが通用する時代。正法時代から700年後は像法時代（ぞうほうじだい）、釈迦の教えを信じる気持ちがまだ残っているが、像法時代から700年後は末法時代（まっぽうじだい）に突入する。末法とは釈迦の教えを信じる衆生が少なくなり民衆の心が乱れ争いごとが絶えない時代の事だ。奇しくも日蓮聖人は僕たちの故郷である大田区の池上宗仲低（いけがみむねなかてい）でご入滅されているのだが、地涌（じゆ）の菩薩（ぼさつ）のリーダーたちがここ大田区の地から泥の中から地湧きいずる如く立ち上がって、法華経を広めていくことになるだろう、という一聴すると不可思議にも思えるそのストーリーを法華経の熱心な行者である親友から教えて貰った時には、まさきに宮沢賢治のエピソードを思い返して、思索する日々を過ごすことになった。

宮沢賢治は亡くなる最後の瞬間まで『銀河鉄道の夜』の執筆をしていた。

最後には自分亡きあとは『法華経を1000部刷って配るように』と父親に手紙を書き、命だけでなく全てをなげうって法華経の信仰を全うしてこの世をさっていった。

これまでのルーツを探っていくと、どうやら僕自身も法華経からは逃げられそうにない、そう腹を括って書き上げたのが『111』枚に及ぶ自叙伝だったのだ。

宮沢賢治とは違い、僕はいつ死んでも後悔はないところか、早く死にたくて死にたくて仕方なかった。

こんなにも人々の心が穢れた時代に生まれただけでも不運だと思っていたのに、正義を貫く法華経を流布し続けるなど意味のないことのように思えた。だから、僕は本物の仲間しか信じてはいない。

誰に何を言われようとも掴み取った実感と感覚だけは間違いない。時が来れば全てお話できるだろう。

ーアキラの気づき・琉球初日目・那覇空港にてー

僕は占術の家元の連絡から5分ほど日記のチェックをしていて気づかなかったのだが、グループの会長である家元がなぜわざわざ那覇空港まで迎えに来てくれたのか？ という幸運に気づけずにいた。

なんの計画も立てずに沖縄へ来たから、沖縄滞在中に家元が僕のことが必要なのであればタクシーを使ってこちらから出向くのだし、やはり成功者は時間にきっちりしているだけでなくこのようなサプライズをして人を喜ばせるのが好きなのだろう、と簡単に考えていて、この先に待ち受ける急転直下のストーリーを僕は全く予測できずにいた。

占術の開発者家元とアイドル占術師 KAKO

那覇空港のロビーを抜けて外へ出ると、僕は家元へ電話した。

しばらくして那覇空港近くで待機していたであろう銀色の可愛いコンパクトカーが、僕の目の前で止まると、首にオレンジ色のスカーフを巻いた一人の女性が車から出てきた。

「はじめまして！ アキラさんですよね？」

「はい！ アキラです。もしかして KAKO さんですか？」

「はい！ 私のこと知っているのですか？」

「はい。インターネット勤務ですので FACEBOOK やインスタで KAKO さんの活躍はいつも拝見させてもらっています！ しかし、実際にお逢いすると、とてもお綺麗な方なので人違いかと思いましたよ。」

「えー！ 綺麗だなんて。アキラさんは褒め上手ですね！ あ、今日は私の車で来ています。中に家元も乗って待ってらっしゃいますので、どうぞ車へお乗り下さい。」

アキラはアイドル占術師の KAKO とは初体面。

帝国ホテルで面接してもらったトップ鑑定師の佳子(よしこ)先生から今一番人気がある占術師として KAKO の話題を聴いていたのだが、実際にお逢いしてみると人を魅了してしまうパーソナル『公』を持っていることがすぐに理解できた。KAKO の育ちの良さを感じさせる上品かつ妖艶な立ち振る舞いに、ずっと忘れかけていた女性へのドキメキを感じてしまったのである。

占術の開発者でありミラクルスポットグループの会長である家元とも初顔合わせだった。KAKO の車に乗り込むと家元は「アキラ君！ 今日はラッキーだったね。アキラ君を迎えに他の鑑定師を向かわせようとしたら、出張だの広島店へ出向中だったので、メインメンバーがすべていなくて。

会社のトップである僕がこうして迎えに来るということは他の上級鑑定師ではありえない。」

KAKOの運転する助手席のミラー越しから家元は言った。

「わざわざ那覇空港まで迎えに来てくれて光栄です。ところで今日はどちらへいくのですか？」

「アキラ君はまだ夕飯これからでしょ？ 東京とは違い沖縄は飲食店が閉まるのが早いからこの時間からだどファミレスくらいしかないけれどいいかな？ KAKOちゃんにも新しい情報を教えてあげたいから今日は経営者であり神様を信じていなかった僕が、なぜ非科学的な占術を開発したのかを講義してあげるよ！」

家元の発言を受けて「やったー！ これでまた占術のシークレットがきけるのですね！ ラッキー！」運転しながら家元とアキラに占術の話題を振っていたKAKOは芸能人ばりのテンションの高さでワクワクを抑えきれないといった様子で一人はしゃいでいた。

那覇国際通りから少し離れた場所にある真夜中過ぎのファミレスでの家元・KAKO・アキラによるセッション会がはじまった。

家元はカレーを注文すると食べ物よりも早く占術とパワーストーンのシークレット講義を聞きたかったKAKOとアキラは、時間短縮のため家元と同じカレーライスを注文した。

ドリンクバーでKAKOと二人っきりになったアキラは、和気あいあいとしながらサラダバーで3人分のサラダを盛り付けていると、遊び心満載のKAKOは「私のはピカチュウ風に盛り付けて下さいね！」とわがままなことを言って少し頬を赤きらめて僕に甘えた表情をみせた。

初対面であるアキラとKAKOはすでに旧知の仲のように打ち砕けて、僕は真夜中のセミナーに期待とワクワクで胸がいっぱいになった。

注文した料理が届くまでの間、軽い自己紹介がはじまった。

KAKOは家政婦として雇われて沖縄に来たのだが、家元と佳子から、鑑定師に向いていると言われて、沖縄を拠点とした鑑定師活動をするようになったらしい。家元のリアルセッションは400万円払ってトップ鑑定師になってもなかなか聴く機会がないというのに、KAKOはラッキーだなと僕は思った。

「アキラ君はなぜ沖縄へ来たの？」と家元が僕に訊ねてくると
「自分の持つ天職を知りたかったのと、強運の秘密、あとは DNA のルーツに秘められた謎を解明したくて母親の故郷である沖縄に来ました。」と僕は答えた。

「アキラさんのお母様って沖縄なんですか？ 私は広島県出身で第二次世界大戦では原爆を落とされましたよね。佳子先生は同じく原爆を落とされた長崎県出身だし、沖縄も最後の地上戦やひめゆりの塔などの悲惨な歴史がありますしね。アキラさんとは前世でも深い縁で結ばれて意味があって沖縄で出会った気がします。」

僕は家元と向かいの席にいてきずかなかったのだが、僕の隣に座っている KAKO は左手に眩いばかりに光輝く『7A ゴールドルチル』を身に付けていて、僕は自分自身の事よりも KAKO のことが気になって仕方なかった。

「KAKO さんが着けているストーンって 7A のゴールドルチルですよ？」

「はい！ 7A ゴールドルチルです！ 私は占術に興味があって沖縄へきたからパワーストーンとか全く信じていなかったんですけど、あまりにも不思議な現象ばかり起きるので徐々にパワーストーンに興味を持ち始めてしまい。信じられないかもしれませんが、この 7A ゴールドルチルを身に着けた瞬間から一気に灰色になってしまったんですよ！ 高かったのにえー！ ショックってしばらくは立ち直れないなと思っていたんです。けれど、佳子先生がゴールドルチルは自分で勝手に浄化してくれるストーンだから大丈夫！

一週間もすればまた元の輝きに戻るよ！」と言われて。

あんなに綺麗だったゴールドルチルが一瞬で灰色になってしまったことについて、私、そんなにドロドロしたものを持っていたんだーと。衝撃を受けました。

ストーンもマジカルカラーもはじめは信じていなかったのですが、沖縄へ来てからは言葉では言い表せられない不思議なスピリチャルな体験ばかり続くので毎日が楽しいです！」

KAKO の発言を受けて家元は

「KAKO ちゃんはパワーストーンを信じていないところかマジカルカラーのお洋服を勧めても、私、茶系しか似合わないからオレンジは着ません。とって、頑なにマジカルカラーを拒否しているんだよ。マジカルカラーを信じていないなら、じゃあなんでわざわざ沖縄に来たのってこっちが聴きたいくらい頑固な性質を持っているんだよ」と困惑の表情でそう吐露した。

「マジカルカラー身に着けているじゃないですかー！ このオレンジ色のスカーフちゃん
とみて下さいよ！」

「スカーフだけでなく、一応うちの会社は高級なパワーストーンを扱っているんだから、
ユニフォームなんだと思ってオレンジ色のお洒落な服を着てよ！ 絶対に運気が良くな
って成功へと導かれていくから。」家元はオレンジジュースを飲みながら深層心理に宙
を持つ KAKO に忠告をした。

深夜のファミレスでの講義は深夜1時を過ぎると徐々にパワーストーンのシークレット
へと話しが発展していった、僕を含めた三人は、疲れるところかむしろ講義が進むにつれ
て、このまま朝まででも聴いていたいというワクワクな好奇心で未来の夢を語り合った。

「アキラ君はさっき、海外へ行ってみたいと言っていたよね。それはなんでなの？」

「もともとは JAZZ が好きでエレキギターをやっていたのです。
海外へ行ってみたいのは単純なる憧れなのですが、ある事情があって本当にやりたかつ
たエレキギターではなく小説を書いています、佳子先生からは小説家になりたいの
だったら、読書だけでなく、アウトプットのためにブログ記事と FACEBOOK の記事
を書いてみてごらん。アキラ君の自叙伝は電子書籍サイトで見せてもらったけれど、名
は体を表すと言われる通り、きらりとひかる文才を持っていると、私はあなたの文章力
を高く評価しているのです。
だから今は、キャパシティと見聞を高めるためにメール鑑定を任せてみたいと思っ
ています。と言われて、佳子先生からミラクルスポットの広告やメール鑑定のお仕事を任
されて東京で活動しています。

もともとは世界平和を叶えるのが夢と思って活動していたのですが、佳子先生が言うに
はみんなメディアに踊らされているだけで、もともと日本ほど平和な国はないのよ、と
言われて衝撃を受けました。

確かに、日本も貧富の差は激しいとは思っていましたが、つまるところ、どんなに困難
だったとしてもチャレンジし続けて学び続けた人たちがお金持ちになっているだけの話
で、日本ではどんなに貧乏だったとしても、食べていけば最低限の権利として

認められている。確かに、平和な国ですよ。

しかし、今まで僕は世界平和を目指していると周囲に公言しながらも、自分の事は後回してボランティア活動をしてきたのです。それに、自分の家族を後回しにしてきた結果、実の兄貴の異変に気づけずに兄貴の自殺を止められなかったことを死ぬほど後悔して自暴自棄になっていた時、占術にであったのです。この占術だったら自殺企図している方がたの最後の相談役として死を食い止めることができるはずだと考えています。

それに、今、お金がなくて困っている人たちだってそれぞれに専門家がいるんだから、必要以上に絶対的正義を振りかざす宗教の人たちと関わっていくのはリスクだと感じはじめてきたのです。

自分自身のやりたい時間も削って命を懸けて戦ってきたのに、兄貴の死に対してもそっけない対応をされて、宗教に無関心な人たちからは馬鹿にされて、何一つ良いことはありませんでした。

だから、そろそろ自己犠牲に生きるのはやめて、本当に自分自身の夢を叶えるために、佳子先生に師事することを決心したのです。

佳子先生は僕にアドバイスしてくれました。

もしも、お金の苦労から解放されて、時間も自由に使えたとしたら、アキラ君は何をしますか？ と。

僕はこう答えました。

もしも経済的自由、時間的自由、精神的自由を手に入れたとするならば、小説を書きながら夢だった音楽活動をしたいです！ と。

しかも、世界を舞台にして輝けるアーティストになりたいです。

そのために、過去、英会話スクールで覚えた英語力や人を癒すセラピスト業界に携わってきた経験を活かして、一番自分自身が才能を発揮できる物書きの適正を伸ばして小説家として生きていくことに決めました。占術を学んでいるのも小説を書くための知識や経験を短期間でマスターするためです。」

家元と KAKO はアキラが占術を学ぶきっかけを聴いて、特に KAKO はアキラの壮大なる夢の大きさに衝撃を覚えたような表情浮かべて、家元の返答を固唾を飲んで待ちわびていた。

しかし、そのアキラの夢は決して絵空事ではないことを家元は理論的に説明した後に、「バイオリズムから観ても 5 シークレットから観ても十分に実現可能だ」とアドバイス

した上でさらにストーンを持つことの必要性を説いた。

「小説家になるのは本当に難しい。出版不況で本は売れない時代に突入しているし、しかも小説は書く労力に比べて、自費出版にかかる費用を考慮すると仮に10万部売れて1000万円を手にしても次回作が出なければすぐに忘れ去られてしまうし、占術のビジネスとは全く違って、本はだしてみないと結果が解らない厳しい世界だ。一部の人気作家しか本業にできていない。

けれども、本当に書くことが大好きならば諦めてはいけない。

アキラ君の鑑定を観させてもらったけれど、キーワードとして『宗教』と『険しき道』という天命がでてきた。僕はこの占術との出逢いによって、一気に成功の道へと導かれていったし、占術を開発して世の中にだした後に、お客様たちからの奇跡の声や体験談、そして感謝のメッセージが連日のように届く。その体験談をもとにして、占術の精度も年々飛躍的に向上している。

FACEBOOKの投稿やコメントブログも少し拝見させてもらったけれど、間違いなく、文章力においてはアキラ君がうちの会社ではダントツに輝いている。アキラ君が書いた記事からレスポンスが上がり続けていて、お陰様で新規のファンも増え、協会員も爆発的に増えていった。

アキラ君の天命である『宗教』というキーワード、占術の創始者の立場から言わせてもらおうとするならば、眼には見えない不思議な力を信じて活動するのが宗教家の役割だから、アキラ君は占術師に凄く向いていると思う。

これは占いはおろかパワーストーンみたいな非科学的に思えるモノなど全く信じていなかった過去の僕の経験から言わせてもらうけれど、アキラ君が今必要な経験をするためにおススメしたいとっておきのストーンがある。

アキラ君も知っての通り、うちは天珠というチベットの王族しか持てなかった希少価値の高いパワーストーンを扱っていて、天珠の売り上げは世界でナンバーワンなんだ。その意味することは、リピーターが多いということなのだけれど、奇跡を起こしたいならば、卍一眼天珠をお勧めする。

実は、9眼天珠が最強の天珠として世の中に知られているし、うちのお客さんにも9眼天

珠が最強と言って販売しているのだけれども、多くのパワーストーンを扱ってきた僕だから言わせてもらえば、本当は卍一眼が最強の天珠だ。

KAKO ちゃんには器を広げてもらうために大人天珠を持ってもらっているけれど、一心に叶えたい夢があるときには、一眼天珠、それも卍のマークが描かれた卍一眼こそアキラ君にぜひ持ってもらいたいストーンだ。

今すぐには無理かもしれないが、もしもアキラ君の状況や環境がよくなった後に、特別な卍一眼をお譲りしてあげるよ。

僕はもうストーンのセレクトはティンバと佳子先生に任せてあるから、ストーンセレクトの第一線からは身をひいているので、久しぶりにワクワクする夢の話をお話させてもらってついついセレクトさせてもらった。自分がはじめて卍一眼天珠を持ち始めた時の奇跡的な体験も思い出すことができたよ！ ありがとう！ 機会があればまたお話しさせてもらうよ！」

通常は会うことすら難しい家元の講義を生で聴けたことを他の鑑定師にお話しすれば嫉妬されることだろう。KAKO とこうして逢えたことだって、上級鑑定師のアキラより KAKO はもっと上の立場である理事長という役職をもっているのだからなおさらだ。

家元は九州出身で、沖縄移住したのはずっと憧れていた沖縄でくらししてみたかったからだ、と話してくれた。そして、沖縄の地でビジネスをしているうちに、占術と出逢い、その後、占術の権利を持つ占い師が借金を背負って困り果てていた時に台湾人の占い師から占術の著作権を買取したという。

もともとの中率の高い占術として、一部の経営者たちの間では知られていた占いだっただけなのだが、占術の権利を買取したときには A4 の紙 2 枚ほどの計算式しか送られて来ずに、ほとんどが開発者である家元が 2 年間自宅に引きこもりっきりで寝る間も惜しんで占術の解明に取り組んだという。

沖縄の北谷に小さな占いのショップを立ち上げた時、あまりにもあたりすぎるという口コミだけでお客さんが増えていき、逆にお客さんの方からパワーストーンを求められたことがきっかけで占術師のグループだったミラクルスポットは、新規参入しても成功しないと言われている厳しい時期にパワーストーンの販売をすることになった。

独自の結界を張るブレスレットを開発したことがきっかけで、結界ブレスはミラクルスポットの看板商品として広く世の中の人たちに知られることとなっていった。

結界ブレスのキセキを体験した2万人にも及ぶユーザーの中でも、ひと際、ミラクルを起こした体験談がある。

潰れかけの中華料理屋のおかみさんがこのままでは会社が倒産して一家が路頭に迷ってしまうという危機に直面した。貯金も底をつきかけ10万円しかない時に、全財産である10万円を全てパワーストーンを購入する費用にあてたのだ。

不思議なことにパワーストーンを持ち始めたその日のうちに店はじまって以来の貸し切り予約が入ってきた。その後、店は人気店となり、アルバイトを雇う余裕もできたので、中華料理屋のおかみだった初級鑑定師はパワーストーン屋さんとして念願だった店舗を持つようになり、お金の苦勞から解放されて、女社長として活躍していくことになった。

信じる人にだけキセキは起きる、という体験談は瞬く間に、全国へ広がっていき、経済苦、恋愛の悩み、離婚問題、病気、才能の開花、投資のタイミングなど様々な相談が寄せられるようになった。

家元の講義は深夜過ぎまで行われて、僕はKAKOが運転する車で那覇の国際通り入り口付近にあるビジネスホテルまで送ってもらった。

運転手のKAKOは「アキラさん、今日は家元の講義ワクワクしましたね！またこちらからご連絡しますね！」とテンション高くそう言った。

興奮冷めやらないまま「家元、KAKOさん、今日はありがとうございました！僕は佳子先生からのお仕事をする以外はフリーですから、また講義聞かせて下さい！」というの家元が

「佳子先生は東京に出張だったね。明後日には沖縄に戻ると思うから、今日は仮眠として15時くらいにまたこちらから連絡します。今日は疲れただろうから、少し休んで、お仕事頑張ってるね！」と言った。

ビジネスホテルの玄関をすり抜け、受付を済ませると、ウェルカムドリンクのコーヒーとオレンジジュースを持って、マジカルナンバーの5階まで上がり、部屋へ入った瞬間、疲れがどっと噴き出てきた。けれどこのまま寝るわけにはいかない。佳子先生からサイトのカスタマイズを任されているからだ。熱いシャワーを浴びれば復活するはずだから、と自分に言い聞かせて僕はお風呂のお湯がたまるまでのしばしの間、ベッドに横たわってKAKOの事を考えていた。

30も半ばになると純粋なる恋愛感情など湧かないと思っていた。

でもそれは間違いだった。

今日はじめて逢った占術師 KAKO の魅せるプライベートでの可愛らしい一面に、どうやら過去の恋愛の記憶と重ね合わせて、青春時代へとタイムスリップしたような錯覚に陥ってしまったのだ。

僕よりも4つ年上の佳子先生も魅力的な人だったし、東京銀座店の占術師であり先輩の村田智子も人妻でなければ電話番号の一つでも交換して、親密な交際をしてみたかった。一体、なぜ、うちの占術師は美人ところが集まってくるのだろうか？

女性が9割を占めていた前職のセラピスト業でも、こんなに魅力的な女性に囲まれることはなかったはずだ。一体、俺はどうしてしまったというのだろうか？

琉球に眠りし姫の伝説を信じていた僕は、ピュアな気持ちでソウルメイトを探していたことも事実だ。しかしながら、一般の会社であるならばオフィスラブなどご法度であるし、うちの会社だってきっと同じことだ。夢と現実の恋愛と天秤にかけて、また僕は夢を選ぶだけ。

僕はしばらく、ベッドの上で空想に耽ったのち、シャワーを浴びて、今度は佳子先生の事を想っていた。すると、突然スマホから電話の着信音が聴こえた。

ー AM 3. 33 ー 佳子先生からの着信だった。

(佳子先生からの電話？ 長いことお付き合いしているけど電話ははじめてだな。)

(シンクロシティ)

思っていることはすばやく現実になる。

運命が動き出す時の止められないスピード感。

「はい。アキラです。」

「アキラ君。深夜にごめんね。家元とはちゃんと逢えた？」

電話越しに聴こえる佳子先生の普段とは違う甘い声質に、うっとりしてしまい、まだ洗い立てでアロマの香りがする素肌に柔らかなバスローブに身を包んだまま、上司からの電話に出ることになってしまった自分自身のことを古き良き時代の映画のワンシーンを演じているかのような錯覚に陥って、主人公気分になったまま、佳子からの電話に耳を傾けたのであった。

真夜中の恋の記憶

僕はシャワーを浴びたばかりの裸のまま、コットン製の柔らかなバスローブに身を包まれて、アロマのふんわりとしたラベンダーの香りが部屋中に漂う空間に酔いしれながら、東京に出張中の佳子先生からの電話に出た。

「アキラ君、家元とはどんな話ができたの？」

「海外への憧れや出版への夢を語ったら、卍一眼天珠を勧められました。」

「家元から直接セレクトして貰えたなんてラッキーじゃない！」

そして、卍一眼かぁ。確かに、一心に叶えたい大きな夢があるときは一眼天珠がおススメよ。

家元もこの占術を広めていく、と決意したときに持っていたのが卍一眼天珠だったの。」

「え？ 家元も卍一眼で奇跡を起こしたのですか？」

「ええ。彼は昔からの経営者仲間ですピリチャルなどの非科学的なことは、一切信じない理系の人だったの。でもね、事業拡大を目指して中国へ進出したときに大失敗したの。その時に、国宝級のゴールドルチルクォーツと出逢うのだけれど、先輩から勧められるがまま渋々買ったこのゴールドルチルが、その後、事業の大成功に導かれるきっかけになったのよ。」

「ゴールドルチルですか？ そういえば、中国本土を離れて海を渡りお商売する華僑たちも、7世代先までの家宝としてゴールドルチルを持つことが伝統らしいですね。」

「そうそう。華僑はもともと海を渡った中国人だから、現地に根づいて成功するまでは本土へは帰らない覚悟を決めて東南アジアへ渡ったからね。実は、パワーストーンを加工する工場は中国が9割を占めているので、世界中で採れた天然石の原石は一旦、中国に集まってくるの。」

「中国ですか？ それは初めて知りました。だから、中国との関わり合いが深い琉球王国にはたくさんパワーストーン屋さんがあるんですね？」

「そうなのよ。琉球王国は一万年の貿易で栄えた歴史がある、と首里城で発見したんだけど、中国や日本、そして東南アジア諸国とのハブとして大変有利な場所にあるから。日本の教科書とは矛盾した歴史よね。

けれど、一万年前に琉球王国と秋田や新潟と貿易していた証拠として、その当時日本には作れなかったはずの土器などが発見されているの。世界の人からしたら沖縄県は日本という認識はなくて、やはり琉球王国なのよ。」

「琉球王国、貿易で栄えた一万年の歴史。日本人としては知られたくない歴史でしょうね。」

「まあ、権力者の立場からしたら、消し去りたい歴史でしょうね。
明後日、沖縄へ帰るから詳しい話は家元のマンションでお話しますね。
ところで、明日から那覇新都心店の絢香(あやか)にアキラ君の身の回りのお世話をするように頼んであるのね。アキラ君は沖縄ではうちの会社のトップである家元のお仕事を最優先してもらうから、何かあったら、絢香に相談して。」

「絢香さんって、マジカルカラー緑の方ですよ？ 那覇新都心店の？」

「そう。アキラ君は東京出身だから電車移動が主だったと思うけれど、沖縄は車がないときついから絢香にお願いしてあります。絢香は台湾と琉球のハーフだけど沖縄育ちだから、アキラ君のDNAの謎を知るにも、どんどん質問してみてください。

アキラ君にはインターネットをお休みして貰って、店舗の経験を積んでもらいたいと家元をお願いしておきました。たぶん、少し仮眠をとって夕刻すぎから国際通り店と那覇新都心店の見学をして、同じく国際通り沿いのショッピングモールにある本店では鑑定というよりもストーンの知識を深めてもらうためにセレクトやデザインを手伝ってもらうことになると思います。」

「了解しました。色々手回しをしてありがとうございます。
ところで、東京はどうですか？」

「やっぱり東京は最高だね～。

長いこと沖縄にいと琉球タイムでそれはそれでまったりとしてロケーションも最高で楽しいんだけど、仕事となるとやっぱり東京は優秀な方が多いので、仕事一番のパーソナル『長』の私としては嬉しいです。

いずれは、うちの会社も占術の協会も東京に拠点を置くのが家元と私の夢です。

ですから、東京出身の占術師はアキラ君と指で数えるくらいしかいないから沖縄と東京の懸け橋となることを期待しています。」

「チャンスを頂き光栄です！ ありがとうございます！」

「いえいえ、深夜に電話してごめんね。

仕事は充実してるんだけど、東京には誰もいないから淋しくなっちゃってさ。」

「え。先生でも淋しいという感情あるのですね。」

「普段はないんだけど、帝国ホテルでアキラ君とはじめて逢った時のこと思い出しちゃてね。

あの時、帝国ホテルに宿泊していた私は、遅れてカフェテラスに向かったの。

その時、アキラ君はわざわざ席を立てて私をエスコートしてくれたこと、とても嬉しかったです。」

真夜中も過ぎて、

突然の佳子先生からの突然の電話は、過去の恋愛の記憶を蘇らせた。

昔、愛していた人から2年越しで『一人になった』との告白、真夜中過ぎの電話。

JAZZの流れるコンポが置かれた本棚と流線型のテーブル、コカ・コーラしか入っていない空っぽの冷蔵庫、エレキギターしかない無機質な部屋で、

黒のレザーのソファに寝転がりながら、僕は彼女との空白の2年間を思い返しなが、もう愛していたことも思い出せないほど、長い月日がたった現在でも、好きだった記憶は色あせない。

「あなたのことが好きだった。」と僕が言えば、しばらくの沈黙が訪れ、

「でも、彼女いるんでしょ？」と彼女が言えば

なんて運命の残酷さ、あんなにも人を愛していたことはなかった。

神様の悪戯か、お互いに彼氏彼女と別れたと言って一番辛い時期に、連絡先を好感した時のトキメキ。

彼女と明け方まで、電話して、君が「このまま寝ずに始発をまって新宿へ行く」と言えば、僕も「新宿へ行く」と返事をして、Tシャツにエメラルドグリーン色したサマーカーディガンだけを羽織って家を飛び出した。

まだひともまばらな始発電車のガタンゴトンという夏の響きに、恋の予感が走った。
またしても運命の悪戯、別れたばかりの彼女と別れ話を切り出された新宿のファースト
フード店が待ち合わせ場所だったよね。お互いに好意があることにも気づけずに、無言
のまま、無目的に街を歩けば、不眠症だった君は寝ずに電話してきたものだから、代々
木公園のベンチで可愛い寝息をして寝てしまった。
あんなにも大好きだった君のこと。なぜ、好きですとその場で言えなかったのか。
ある日、突然連絡が途絶えて、しばらくして風の噂で彼氏がをできたことを知った。
2年も経ってから、こうして電話してくるなんて、もう遅すぎるよ。
でも、純粋に人を愛することができなくなった35歳になっても、まだこうして、あなた
の影を探している。新しい運命の出逢いを信じている。

ピンクタイガーアイとゴールドルチル

佳子先生から電話があった深夜過ぎ、いつの間にか僕は寝ていたようだ。

夢から覚めた僕はベッドから時計に眼をやる。11時11分。

『1111』というぞろ目のナンバーを引き寄せてしまったようだ。

沖縄は不思議な島だ。仕事運、金運を司るルチルクォーツとピンクタイガーアイを持ったのは今から数年前の話になるけれど、腕に着けた瞬間から起きたキセキは今でも鮮明に覚えている。

それは2年前の事。個人事業主として大手リラクゼーションの会社にセラピスト登録していた僕は、時間単価こそ高かったものの、なかなか収入が安定しない不安定な生活を送っていた。

リラクゼーションの仕事がない時には知り合いの社長から現場作業のアルバイトを貰うこともあった。ルチルクォーツは個人事業主の人が持つといきなり一日の単価があがるような金運を引き寄せることがある、とパワーストーン辞典でみていたので、ルチルを持つことはずっと憧れていたのだ。

ルチルとの出逢いは突然だった。

沖縄の親族が亡くなったので葬儀に出席するために家族と共に、国際通り沿いのビジネスホテルに宿泊していたのだが、法事が終わると特別やることもなく、タクシーで行けるところも限られているので、僕はおよそ1.6キロメートルにわたる国際通りの一本道を、夕刻すぎ一人で歩いていた。

国際通りはステーキ屋さんか民芸店かパワーストーン屋さんくらいしかない通りだということに気づいたのは、国際通り入り口から中ほどにある沖縄県内にはじめてできたドンキホーテまで歩いてきた時だった。

国際通りから裏道に入ってみると、中々抜け出せない迷路のように入り組んだ道沿いに、琉球ガラスの専門店や沖縄版戦隊ヒーローのフィギアなどのおもちゃ屋さんに出逢い、異国情緒たっぷりなのに、なぜか昭和の古き良き時代にタイムトリップしてしまったような錯覚に陥ってしまった。

シルバーアクセサリーの店では、店員さんが店の外に出てチラシを下ったり威勢の良い声をかけている。店員さんが言うには、元・総理大臣の安倍首相の第一次政権が終わった

時に、彼は沖縄に来て聖地巡りをしていて、うちの店でご家族にお土産を買っていったという。その時に元・首相と店員全員で撮ったという記念写真には、袈裟姿で杖を持って満面の笑顔を浮かべる安倍首相のプライベートでみせるお茶目な一面が写しだされていた。

僕は政治の世界には無関心なのだが、なぜか心温まる気持ちになったのだ。

その後、安倍さんは首相の座に帰り咲いて第二次安倍内閣の長期政権を樹立したのだが、『陰徳あれば陽報あり』の言葉通り、島全体がパワースポット呼ばれる沖縄県の聖地巡りが彼にもう一度首相に返り咲くパワーを与えたこと。誰も観ていないところでの地道な活動を神様はちゃんと観ていたのだろう。スピリチュアルファンの僕たちにしてみれば嬉しい体験談だ。

国際通りには、僕が大好きなパワーストーン屋さんが数えきれないほど軒を連ねている。しかも、無料で占いをしてくれて、パワーストーンをセレクトしてくれるのだ。

無料の占いは九星気学。生年月日さえあればすぐにラッキーカラーが解るというアルバイトでもできるような子供だましの占いだっただが、東京では見かけることのない『ピンク色のタイガーアイ』を見つけてしまったので、友人への沖縄土産として購入することにしたのだ。

そして、これだけパワーストーンの流通量が多い沖縄だからこそ『ゴールドルチルクォーツ』が2000円台から選びたい放題だったのだ。東京ではどんなにランクの低いルチルクォーツでも最低1万円はするはずだ。僕はためらうことなくピンクタイガーと自分用のルチルクォーツを買って、ホテルへと戻り、初めて持つゴールドルチルの可愛さに酔いしれていた。

その矢先、知り合いの社長から連絡があり、今仕事が忙しいから手伝って欲しいと言われて、アルバイト料は『15000円』でいいか？と。僕はこの手の肉体労働系のアルバイトをする時は日当『9000円』が相場だと思っていたので、パワーストーンを持ち始めた瞬間からの約6000円もの単価アップに衝撃を覚えたのである。その夜、久しぶりに電話をくれた友人から飲み会に誘われたり、ブログのアクセス数が飛躍的にアップしたりと、不思議な体験談を重ねてパワーストーンの神秘に魅了されつつあったのだ。

東京へ帰ってから友人に勝負運を司るピンクタイガーアイをプレゼントしたのだが、その後、5号機のAタイプと呼ばれるギャンブル性の低いタイプのパチスロで勝負をしていて、通常ではありえないほどの連チャンを引き続けたという報告を受けた。Aタイプのパチスロ台は通常では2万円勝てれば高設定だというのに、ピンクタイガーアイをプレゼントしたその友人は、1000円の投資で『10万円』を手にしたという。

あまりにも、不思議な勝ち方だったので、お寿司をご馳走になり、ピンクタイガーアイを貰ったお礼と言われて『1万円』をくれたのだが、実は、ピンクタイガーアイ自体は2000円で購入しもののだということを友人には内緒にしていた。

台風の日とは知らずガーデンクォーツを求めて蒲田の隣町である神奈川県の川崎へ出かけた日は、ぎりぎりまで、ピンからキリまで数本あるパワーストーンのチョイスに迷っていて、スピリチャル好きの店員さんと一時間以上、パワーストーン談義で盛り上がってしまった。

あまりにも可愛いパワーストーンが低価格で売られていたので決めきれずにいた僕に店長さんから「そういえば今日は台風が来るらしいですよ」と思い出したように言われて、僕は水晶の中に箱庭をインクルージョンした可愛いガーデンクォーツを購入して、袋には入れずに、そのまま左腕に着けて帰ることにした。

パワーストーン屋さんが入っているショッピングモールをでると、南の空がスモッグかかったような雷を伴う雲に覆われて、台風の影響による強風により、仕事を中途退社して駅へと急ぐサラリーマンの姿を多数目にした。もしも、南の方面へと向かっていたら、僕たちは台風の影響で電車が止まってしまい帰れなかったかもしれないほどの大型台風だった。

しかしながら、ラッキーカラーの赤い電車の先頭車両に乗り込むと、京急川崎から友人宅の大森海岸駅へ北へ北へと向かう電車は、台風から逃げるようにして、一つ駅を通過することに徐々に光が差し込み、目的地である大森海岸駅に着いた時には、東西南北、全て雷雲に覆われてぴかっという雷鳴が轟く音が遠くから聞こえてきたのに、不思議と大森海岸の上空だけは夏の日の晴れやかな青い空から一筋の光が友人の住むマンションを照らしていたのだった。

すっかりパワーストーンのキセキに魅了されてしまった僕たちは、スピリチャルブームに乗って、琉球占術の初級鑑定師として猛勉強をした。お客さんが付かないうちは修行と思い家族や友人たちの鑑定を無料で観て、鑑定数を重ねていくことに占術の的中率の高さと人間関係を良好に保つための学びである事にきがついたのだった。

友人たちは僕の身の回りに起きるキセキを目の当たりにして徐々に占術とパワーストーンに興味を持ち始めていき、有料の鑑定や高級パワーストーンを購入してくれたのだった。

ストーンの後押しで結婚できた友人や、ギャンブル運が上がった友人、長いうつ病生活から見事に蘇生して社会復帰した友人たち、たくさんの感謝の声を頂けるようになり、この占術は単なる占いではなく『科学』であり『宇宙の法則』に照らし合わせても疑う余地がないほど、キセキを起こし続けるのであった。

僕は琉球入りした初日目に聞いた KAKO の体験談を思い出していた。

彼女が持つ 7A のゴールドルチルの事が気になっているのは、もはや宝石といってよいほどクォリティーが高いパワーストーンの相場の高さを知っているからだ。KAKO の持つゴールドルチルを観ていると僕が国際通りで買った 2000 円のルチルなど子供のオモチャのように霞んで観えてしまうのだ。

東京中を練り歩いて気づいたこと。

それは、沖縄でしか本物のクォリティーの高いパワーストーンには出逢えない、という事実だったかもしれない。KAKO は 7A ゴールドルチルに恥じないほどの出世をした。

インスピレーションが沸き、人気運があがり、そして仕事運に結びつく。

東洋一お金儲けが上手いといわれる華僑たちがこぞって質の良いゴールドルチルを求めて旅をし、始祖亡きあとは家宝として代々に継承していく、まさにゴールドルチルは金運アップのストーンの最高峰として神格化される運命にあるのであった。

昼下がりの国際通りにて

家元との約束の時間はだいたい 15 時に電話する約束だっただろうか。

なんの目的もなく沖縄に来た僕は、沖縄の親族への挨拶まわりに出かける時間の余裕もなく、昼下がりの国際通りを一人つまらなく歩いていた。

国際通り沿いには占いと天然石のお店ミラクルスポットが 2 店舗あるはずなのだが、グーグルマップで調べてもいまいち場所が解らない。インターネット勤務の僕は、リアル店舗での研修をせずに、すぐさま会社のナンバー 2 である佳子先生から文章力を買われて、『東京銀座店』と『東京新宿店』のサイト運営と広報企画部に配属された。

とはいえ、実際のリアル店舗が新宿や渋谷にあるわけではない。

鑑定師でありパワーストーンのセレクターである鑑定師が東京に住んでいて、鑑定のセッション依頼がくれば、日比谷の帝国ホテルや新宿のパークハイアットなどの一流ホテルへ出向き、JAZZ やクラシックが流れるお洒落なレストランや BAR カウンターへ出張して鑑定をするだけの話なのだ。

究極を目指す思考の持ち主と知られるパーソナル匠（たくみ）のティンバは、もともとは東京の銀座でシステムエンジニアをしていた実績を買われて沖縄での修行を重ねていたのだが、あいにく、東京進出の足がかりとして期待して雇われたはずの彼は、インターネットが不得意だったことが発覚してしまい、リアル店舗に回されてしまったのだ。

僕はティンバの天運鑑定を受けた事がきっかけで、初級鑑定師になることを決めたのだが、30 歳もゆうに過ぎて若いうちから結婚を考えていた割には一向に運命の人に出逢えないことを彼に相談したのだった。

彼は僕に占い師になることを勧めてきた。

バイオリズムと呼ばれる数値化された波線グラフを観て、僕の運氣レベルが人並はずれて高いことに気づいたらしい。しかも、だいたいはバイオリズムに浮き沈みがあるのが通常なのに、僕の場合は高い運氣レベルのまま安定しているから苦労しなくても成功するのだ、と彼は言う。

もしも、運命の人に出逢いたいならば、占い師として数多くの女性の鑑定を観て、ソウルメイトという結果がでた女性と結婚すればいいというのが彼の主張だ。

確かに、夢ばかり追いかけてきた僕は、現実世界よりも精神世界を追い求めてパワーストーンの世界にどっぷり浸かる生活をしてきたから、浅いお付き合いの女性友達だけが増えていくことにも慣れっこになってしまい、それでも、『琉球に眠りし姫』の伝説だけを心の糧として運命を信じ生きてきた。

琉球に眠りし姫の伝説とは、簡単に言ってしまうえば銘苺子（めかるしー）といわれる沖縄版の『羽衣伝説』のことだ。正確に言えば、羽衣伝説に登場する天女の生まれ変わりを信じている僕の母親から聞かされた口伝として伝わる都市伝説のようなストーリーなのだ。

幼き日に、羽衣伝説を母親から聞かされていた僕は、どういうわけだか、本家の羽衣伝説の生まれ変わりを信じるようになっていき『もっともっと！ 違うお話をきかせて！』と駄々をこねる僕の期待に応えるように、母親が苦心して創りあげたストーリーが『琉球に眠りし姫』の伝説なのだ。

しかしながら、思春期の頃、気づいてしまった。

母親の故郷・浦添市と羽衣伝説の舞台が同じということ。母親の旧姓銘苺（めかる）が、どうやら、羽衣伝説の銘苺子（めかるしー）とは完全にリンクしているという事実。

母親が沖縄出身とはいえ、昔は航空券も高かったのでそうそう旅行にいけるはずもなく、母親が法事などで沖縄県浦添市に帰省する時には、長男である兄貴か長女の姉を連れていくことが定番だった。

最後に家族みんなで沖縄旅行したのは、僕が小学校低学年の頃のお話だったので、37歳の若さで兄貴が亡くなった後の沖縄への先祖参りでは、満天の星空だった沖縄の夜空が見る影もなく、ひどく寂れた町に思えたのだった。

佳子先生が言うには、沖縄県民よりも、成功者の方が沖縄の魅力に気づいている。

誰だって、お気に入りの場所は教えたくないもの。成功者たちだけが知る、沖縄の秘密の場所。

そして、どこへ行くのか、よりも、誰といくのかによって、観る景色が180度違うのだ、と言う。

正直に言って、国際通りを歩いていると、だらだらと長く続く道に、同じようなものしか売ってないお店しかなくて飽きてくる。

僕は家元と KAKO に早く逢いたくて仕方なかった。

密かに気に成っているのは、那覇新都心だ。どうやら、アメリカ軍基地が撤退した広大な跡地を再開発して街づくりがされたため、国際通りなんか非にならないくらいにアメリカンでお洒落なお店がたくさんあるらしい。DFS という免税店やハイブランドだけしか取り扱っていないショッピングモール、その向かいには TUTAYA やジョナサン。数十台止められる TUTAYA のパーキングとショッピングモールの道沿いにピンク色にカスタマイズされたワゴン車が一台あって、それがミラクルスポットの那覇新都心店らしい。

僕は国際通りの退屈さに耐え切れなくなり、タクシーを使って那覇新都心店へ向かうことにした。

一昨日、那覇空港に到着してから、家元と KAKO に出逢い、深夜までの講義を聴いた後には、ホテルにて佳子先生から電話があり、僕の運命の歯車はどんどん加速度をあげるようにして、もはや昨日の事ですら思い出せないほど、この先に待ち受ける出逢いに胸を焦がし続けていた。

占術師・絢香 ～ 琉球と台湾の DNA を持つお姫様～

タクシーを使って那覇新都心へと向かう道中、頼みもしないのに、生粋の沖縄県民であろうタクシーの運転手が、首里城の秘密を教えてくれた。彼が言うには、第二次世界戦時中、日本軍の総司令本部は『首里城』の地下に置かれていたというのだ。

第 32 軍司令部壕、首里城から南西に 300 メートル下った森の中に、約 75 年間ほとんど人目に触れることなく眠り続ける戦跡がある。

首里城の高台に降り注いだ雨が琉球石灰岩の地層を通り抜けて漆黒の地下壕の奥から出口に向けて、滾々と小川のように流れ続けている。3 月 26 日にアメリカ軍が沖縄へ上陸し攻撃を開始すると、総司令本部が置かれていた首里城は瞬く間に見る影もなく焼失してしまったのだという。

2000 年 7 月 21 日には、九州・沖縄サミットが沖縄で開催された。

キーワードとして『一層の繁栄』『心の安寧』及び『世界の安定』があげられ、紛争予防をはじめ、IT 革命、感染症対策、貿易問題、国際犯罪や薬物対策、生命科学および環境問題などの重要な討議が行われた。サミットを記念して首里城が描かれた 2000 円札が発行されたことも今となっては懐かしい思い出だ。

僕は淡々と沖縄の歴史を語るタクシーの運転手の話に耳を傾けていた。時計に目をやると時刻は 12 時 16 分。東京で仕事をしていると時間などあっという間に過ぎていくのに、なぜか沖縄にいと時の流れが遅く感じてしまうのだ。リゾートホテルにでも泊まっている時ならばいざ知らず、まるで人気アニメの『精神と時の部屋』にでも入って修行しているかのように、現実世界と精神世界での流れる時のスピード感の違いに、圧倒的な情報量や経験を積み重ねてきたように感じるのだった。

僕が沖縄入りしてたったの 2 日目だというのに『気づき』をまとめた日記用のブログはすでに 11 記事にも膨れ上がっていた。目にはみえない力に気づくことは、それだけで、成長なのかもしれない。

国際通りからタクシーにて移動をし、しばらくはつまらない街並みをぼんやりと眺めていたのだが、気が付けば、沖縄県とは思えないほどの都会に来ていた。

バックミラー越しにタクシーの運転手が「お客さん。もう那覇新都心ですけど、どのあたりで止めればいいですか？」と尋ねてきた。那覇新都心上を走るモノレールを目で追いかけていた僕は、「レンタルビデオ屋の TUTAYA とジョナサンがある通り沿いで止めて下さい。」と伝えた。

紫色したレザー製の肩掛けバックから財布を取り出して、お会計をすませ、車から出ると、真夏の沖縄の照り付けるような暑さに、喉の渇きを覚えた。

まだ人もまばらな那覇新都心通り沿いにはピンク色のワゴン車が一台止まっている。

(占術師・絢香先生か。)

FACEBOOK でしか見たことがないその姿だったが、マジカルカラーが緑色だという情報を得ていた。

僕は、てっきり絢香先生は、アーティストの夏川りみのような背の小さくて癒し系の琉球顔をしている人をイメージしていた。佳子先生が言うには、琉球と台湾のハーフだという。

僕は昔から、台湾と日本人のハーフであるアーティストの一青窈さんのような、異国情緒に溢れていてミステリアス、かつ、月明かりが似合う美しくて大人な女性タイプだった。

一青窈さんの唄の物語に登場するような、名家のお嬢様の言葉遊びにも似た、独特のリリックに強い憧れを抱いていたのだ。

視界の先、ピンクのワゴン車が止まっているあたりまで、あと数十メートルまで差し掛かった頃、強い喉の渇きを脳が認識してしまい偶然見かけた自動販売機の前で足を止めてしまった。思えば、沖縄の夏に慣れていない僕は、真夏の炎天下、国際通りの長い距離を歩いている時ですら、ビル陰に護られて涼し気な顔をして歩いていたというのに、那覇新都心に到着してから、海風が吹きぬけていく様子もなく、ただただ灼けるほどのアスファルトの照り返しに東京でアルバイトした引っ越し作業のことを思い出してしまった。

引っ越しのアルバイトは、水を飲めば飲んだだけ汗をかくと解っているけれど、やはり、真夏の繁忙期になると、一日に3件の引っ越し作業に加えて隙間時間には別現場へ応援に行かなければならないほど、忙しくて、スポーツドリンクを飲んで、ミネラルやカリウム、塩分を補給しなければ、すぐに熱中症になって倒れてしまうのだ。

真夏の暑さは東京よりも沖縄の方が断然ヤバい。歩いているだけなのに、サウナにでも入っているかのような息苦しさ、肌を焼いたようなヒリヒリ感、そして、日中は観光客以外を除いては滅多に歩いている人を見かけない。沖縄の人はどんなに近くにあるコンビニでも冷房が効いた車で移動する人が多いのだ。

僕は耐え切れずに、自動販売機でペットボトルのコカ・コーラを買い、すぐさま蓋を開けて、グビグビと喉に流し込んだ。爽やかな香りが鼻の奥にスーッと抜けていく独特の味。僕はそのまま力なく街路樹のヤシの樹にもたれて、土の上でも気にせず座り込んでしまった。土の湿った匂いとヤシの樹からマイナスイオンの霧が神の僕と呼ばれる属性『緑樹』の僕の頭上から優しく降り注いだ。

僕は東京にいる頃から絢香先生に早く逢いたくてお話ししたくて仕方なかった。彼女はマジカルカラーが僕と同じ『緑』なので、優しく癒し系の雰囲気を持っていることはすぐに解った。しかしながら、SNS上でやり取りをするうちに、独学で手相を勉強していることを教えてくれたりお互いの鑑定を観ながら勉強を教えてくれたのだ。彼女はパーソナル『智』の性質上、こうでなければならないという、既成概念は一切通用しない。幸いにも僕のパーソナル『公』は、どんなひととでも話を合わせることができる。むしろ、絢香先生の独特な知識、知恵に対して、一種の憧れを抱くようになっていった。

リアルでの顔合わせももうすぐ、あと、数十メートルもあるけば、ピンクのワゴン車にたどり着き、絢香先生が営業をしているのだろう。そう思うと、自分でも良くわからない強い胸の高鳴りを感じ、ひょっとして、琉球に眠りし姫とは絢香先生の事ではないだろうか？ と、琉球王国のヤシの樹の下で一人、空想に耽るのであった。

絢香の手の温もりと緑色が奇跡を生んだ過去の記憶。

絢香との出逢いを待ち焦がれていた僕は、琉球王国の大きなヤシの樹の下で、雲を目で追いかけていた。それはまるで焼き焦がれつつあるホットケーキのように甘くてスウィーティな雲とマンゴーを添えたような幻想的な太陽の日差しに包まれて、このまま眠り姫のように古代琉球王国の物語の世界へとタイムトリップしてしまいそうだった。

4分の3ほど残っているペットボトルのコカ・コーラから伝わってくる生ぬるい温度、右手から伝わってくる、その異物にも思える機械的な形状、自然ではないその無機質な温もりだけが、僕を現実世界へと繋ぎ留めているのである。

時計に目をやる。12時27分（ああこれは、仏教を信仰している友人の誕生日のナンバーかもしれない）家元との約束の時間は15時。この永遠に続くと思えるゆるくまったりとした沖縄時間、今はまだ夢の中で遊ぶ少年のように、この永い歴史あるアジアの神秘をそっと箱庭に詰めたような琉球王国にて、僕はただただ無限にも思える残された時間の事を思うと、1日でも早くソウルメイトと出逢える事を一心に願い祈った。

ヤシの樹のもたれて眠りに落ちつつあるその時、閉ざした心を解きほどこれるような優しき声が遠くの方で微かに聴こえた様な気がして、僕はぱっと目を見開いた。緑色の鮮やかなドレスの裾が海風に揺らめいて、ひらひらと蝶が舞うかのように、一人の女性のシルエットが視界に飛び込んできた。

まだ寝ぼけまなこの僕は、辺りに立ち込めるフランキンセンスとホワイトセージをMIXさせたエスニックな香りに忘れかけていた野生の本能が目覚めつつあるのを感じてしまった。

「占いいかがですか？」

ガジュマルの樹の下に宿る妖精のような小さくて可愛らしい女の子がそう声を掛けてきたのであった。

突然のその声掛けにびっくりしてしまった僕は、自分が占術師であることも忘れて、彼女への誘いに言葉を失い沈黙した。

諦める様子もなくその少女は、樹の下でうずくまる僕に1枚の紙きれを差し出した。

「はじめまして。琉球占術の絢香ともうします。この占術は東洋占星術と数秘術と古典風水をベースにして心理学の要素を取り入れた世界でも唯一の占いです。沖縄では口コミで凄く良く当たると評判の占いですし、300円から占えるので、沖縄旅行の土産話としてぜひ占いを受けてみませんか？」

(まさかっ?! 絢香先生?!)

こんなにも琉球に眠りし姫のヒロイン像にそっくりな女性を初めて目の当たりにした。またしても恋の予感が走る。

それは15歳の夏、渋谷区の表参道に出掛けた時のことだった。

人気サッカーチームの緑色のユニフォームを求めて僕は、生まれて初めて蒲田という小さな田舎町を離れて、一人で渋谷駅へと降り立ったのだった。雑誌で観たうろ覚えの地図、そして手書きで写したノートにもオフィシャルサポーターショップの住所が書かれていた。その住所だけを頼りに僕は一人渋谷の街をフラフラとさまよっていた。

辺りを見渡せば、ファッション雑誌からそのまま飛び出してきたような、色とりどりでオシャレな大人のカップルたちが楽し気に会話をしながら、15歳の小さな体つきの僕の横を通り過ぎて行った。

もう気が付けば夕暮れ時。

街はオレンジ色に染まりつつあり、田舎町から飛び出してきた僕は、自分の着ている洋服のセンスのなさ、冷やかな視線が僕に向けられている事に気づき、逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。けれども、夢見るサッカー少年だった僕は、どうしても憧れの冴えるような緑色のユニフォームを着て、国立代々木競技場へと応援に行くこと、それだけがまだ女心のいろはも知らない初心な少年だった僕の最大の憧れであり夢だった。

渋谷とは大人な街で田舎モノの少年が一人で行く場所ではないと、僕の6個年上の兄貴から小ばかにされて笑われた事を思い出し、尚更心細い気持ちでいたのだが、外見で判断するような心のちっぽけな日本人とは違い、ラテン系の外国人たちが太鼓を叩きながら踊っている姿を見かけた時に、僕の心の中で何かが壊れてはじけ飛んだ気がした。

そして幸運なことに、大好きな色であるエメラルドグリーン色したサマーカーディガン羽織って、黒いロングヘアを風になびかせながら歩く女性の凛々しき後ろ姿に勇気もらった。その女性の5メートル後ろに付き、僕も歩みを進めることにした。ふと、車の通る上の方に表参道という標識を見つけて、自分が歩いて来た道程が間違えてはいなかったことに神様の導きを感じて、夢中になってエメラルドグリーンの女性を追いかけに行った。

5メートル先を歩くエメラルドグリーンの女性は偶然にも鮮やかなグリーン色の旗が掲

げられたサッカーショップへと入っていった。その時、僕の身体に電撃が走った。
まさか同じ目的地だったとは。

遅れて店に入った僕はすぐさまエメラルドグリーンの女性の姿を探した。
彼女は黄色の中に黒いグッドマークが描かれたTシャツを眺めていた。黒いロングヘ
アの横顔から少しだけ、輪郭がはっきりしたその顔に、少し日焼けした黄金色の健康
的な肌が見え隠れした。

憧れのサッカーショップで、憧れていたカッコいい大人な女性と同じ空間に居る。
どうしようもない胸の高鳴りに夏の響き、色、そして未来を指し示す魔法の数字。

しばらくは女性がまだ店内にいることを予感した僕は、ずっと憧れだった背番号『11』番
のユニフォームを必死に探した。レジェンドと呼ばれた背番号『11』番の、その後ろ姿を
応援席ですっと眺めては、華やかなトリックプレーやブラジル仕込みのダンスパフォー
マンスに魅了されて、いつかは同ピッチ立ってプレーしてみたいと夢見るようになった
のだ。

隠れるようにして、グッズやTシャツが所狭しと置かれた店内で、エメラルドグリーンの
女性がこちらに振り返るのを待っていたのだが、女性は長い迷いから何かを決めたか
のように、僕と同じ『11』番のユニフォームを手にして、店の入り口付近にあるレジへ
と向かい歩いていった。僕は迷うことなく女性の後を追ってレジへと並んだ。一目でも正
面からその美しい健康的な肌色した女性の顔を観たいと思って神様に祈るような気持ち
で待っていた。

女性がお会計をしている間、女性はレジ係の店員さんと楽し気に談笑していた。
店員さんが「カズさんのファンなんですか？」と尋ねると「いいえ、私は背番号10番
のラテン系の外国人選手の方が好きです。この11番のユニフォームは私の弟への誕生
日プレゼントにする予定です。」
女性と店員さんのすぐ脇に居て、その会話を聞いていた僕は、こんな素敵女性弟さ
んの事が羨ましくてたまらなかった。

店員さんがユニフォームなどを丁寧にたたみ、袋に包んでいるその間、エメラルドグリー
ンの女性はなんと横にいる僕の方に視線を向けた。そして、僕に声を掛けてきた。

「カズさんのファンなんですか？」

その突然の問いかけにびっくりした僕は、モデルのリカコさんのような日本人離れた美しいその顔を観て今まで我慢してきたすべての感情が一気に噴き出した。

「カズさんは僕の全てです」と柄にもなく大人びたセリフを吐いてしまったのである。

もっとお話したいと思ったその矢先、店員のお姉さんがお会計の値段を女性に伝えた。財布からお金を取り出しておつりを貰うまでの間、女性と店員は「次はスタジアムで会えるといいですね！」と嬉しそうに言って、商品が入った袋を受け渡した。エメラルドグリーンの女性は店を出る前、何かを思い出したように振り返って僕にこう言った。

「今日は突然話しかけちゃってごめんね！私たちのチームは優勝争いの2位のポジションにいるけれど、私は彼らがセカンドステージでのリーグ優勝をして、日本一を決めるファイナルステージでも必ず勝つと信じてるの。だから、つつい応援に熱が入っちゃって、隣に君のような可愛い男の子がいたから嬉しくなっちゃってさ。ねえ、君は私たちのチームが優勝すると思う？」

「未来の事はまだ解りませんが、僕は今シーズンこそ絶対に優勝すると信じて応援しています！

僕の方こそ、はじめて地元から離れて表参道に来て心細かったのも、こんなに綺麗で素敵な女性と会話できてめちゃくちゃ嬉しかったです。」

「ありがとう！綺麗だなんて久しぶりに言われたから嬉しいわ。一人で表参道に来る少年なんて滅多にいないから渋谷周辺は変な人たちがたくさんいて怖かったでしょう。なんだか、君は将来大物になる気がするわ。」

エメラルドグリーンの女性は「今度はスタジアムで会いましょう。」と言って店を出ていった。

15歳の小さな胸にどうしようもなく大人な女性への憧れを植え付けられた日でもあった。買い物を終えて無事に家に帰ってきた僕は『11』番のユニフォームを着てスタジアムへ応援に行く日を待ち遠しく感じ、もしも神様がいるとするならば、あの表参道でお逢いした憧れの女性ともう一度逢わせて下さい、と祈りながら眠りについた。

その後、女性が予言したとおりに、僕たちが応援していた緑色のチームは、ホームグラウンドの国立競技場でリーグ優勝をし、さらにファイナルステージでは広島チームに勝って、1969年の創立以来はじめてJリーグでの日本一の栄冠を手にしたのであった。

僕は幸運に恵まれて優勝を決めたその2試合を一枚1000円のジュニアチケットで観ることができたのだったが、あの表参道で出会ったエメラルドグリーンの女性より素敵な人とは、ついに逢うことなく大人になっていった。

占術師絢香との出逢いは、僕の過去の恋愛を呼び覚まして、なんだかわからなくなって

「占いなんかよりも、あなたのことが好きだ。」

チラシを差し出した絢香の右腕を愛おしく思い、僕は無意識のうちに絢香の右腕を握りしめて「あなたのことが好きだ。」とそう言った。

絢香のパーソナル『智』とアキラのパーソナル『公』

無意識のうち絢香の右腕を掴んでいた僕は、絢香の腕の柔らかさに性的な興奮ではなく、アルファ波がそのまま手から手へと伝わってくるような今までに体験したこのない癒しを感じていた。

絢香は「こんな場所で眠っていると風邪をひいてしまいますよ。」と言って、僕の手を優しく振りほどいてから「あなたは沖縄のひとではないようですね。どちらからいらしたんですか？」と尋ねてきた。

ヤシの樹からゆっくりと身体を起こし、彼女が右腕に持っていたチラシに視線を下げて、琉球占術の占術師絢香であることを再確認した。

「いきなり腕を掴んでしまって申し訳ありませんでした。僕は東京からやってきた占術師のアキラです。

絢香先生ですよ？」

このまま絢香を連れ去りたいくらいの衝動を覚えた僕は、あんなにも楽しみにしていた家元との約束の時間を気にすることもなく、現在、目の前にいる琉球に眠りし姫の伝説の世界から飛び出してきたような、絢香の大きくて少し潤んでいる瞳を見つめてそう言った。

「東京のアキラさんなのですね。リアルでは初めましてですね。

インターネットではいつもお世話になっています。占術師の絢香です。」

彼女の緑色のドレスからこぼれだしそうな胸の奥、無数の天珠を連ねたネックレスがマンゴー色に染まるヤシの樹の木漏れ日の中でひと際輝いて観えた。

「無事に逢えて良かった。これから家元とお会いする約束なのですが、その前にどうしても絢香先生にお逢いたくて。お忍びで那覇新都心に遊びに来てしまいました。」

さっきまで眠りに落ちそうだった僕は、鮮やかな緑色のドレスに身を包んでいる絢香のピンと背筋が伸びた折り目正しきその立ち姿と、琉球訛りの不思議なイントネーションに、さっきふいに感じてしまった恋心にも似た「あなたのことが好きだ」という切なさの残る自分が発したセリフの事をはぐらかされたような気がして、それでも、マジカルカラー『緑色』が持つ癒し系の雰囲気と曖昧さを感じるセリフに焦らされる思いがして、綾香からの返事を待たずにこちらの方から質問を続けた。

「絢香先生は、手相も観れるんですね。もしよかったら、僕の手相を観て貰えませんか？」

絢香が琉球占術に繋げるための誘導として無料で手相を観ている素人なのは知っている。アイドル占術師である KAKO とは違い同じ琉球にルーツを持つ絢香に対してはなぜか甘えてしまうようだ。彼女は突然の鑑定依頼にも嫌な顔一つ見せることなく快く承諾してくれた。

「手相をみるなら少しだけ待ってもらえますか？
今日は本当は 15 時からの営業の予定だったのですが、店舗のストーンの補充のために来ています。
看板をしまえばすぐにフリーになりますから、少しだけ待っていて下さい。」

絢香と共に那覇新都心を歩いていると身長が 167 センチしかない小柄な僕なのに、絢香はたぶん身長 150 センチもないほど小柄な女性なので、自分の身長が突然伸びたかのような錯覚を覚える。
ピンク色のワゴン車のトランクには折り畳み式のテーブルや椅子などが綺麗に整理されたまま置かれていて、店の看板商品であるパワーストーンや天珠などは鍵付きの桐の宝箱に厳重に管理されていた。
絢香はストーンの在庫をみながら本店から持ち出した天珠を一つ一つ丁寧に振り分けて桐の箱を閉じた。

「私は沖縄県民なので、お昼でもステーキを食べて精をつけています。この近くには少し歩けば色んな飲食店があるのですが、アキラさんはお昼はもうたべましたか？」

「ステーキいいですね！ 僕の母親も沖縄出身なので、沖縄のサーロインステーキは僕の好物です。
もしよければ TUTAYA の 2 階にあるファミレスへいきませんか？ 僕は手相だけでなく

色んなお話しがしたいので、ドリンクバーがある方が嬉しいです。」

「ええ、わたしもお昼休憩は店舗から一番近いジョナサンを利用しています。では、ジョナサンへ行きましょう。でもその前にパワーストーンのチューニングをするのでアキラさんは横から観て下さい。不思議なことが起こりますよ！」

海風になびくように彼女の耳に着けられているイヤリングがキラリと太陽の光を反射して、艶やかな黒髪の子セミショートヘアに文学少女特有の色気を感じてしまった。

絢香のパーソナルは『智』。このパーソナルとは大人になってくると一番表にでてくる性格のことで、主に、仕事の適正をみることに長けている。『智』は、研究者タイプで芸医術的な分野にも強い。けれども、パーソナル『智』の人は俗に言う『人が見ないような盲点となるべき事象』スコトーマとも呼ばれる独特な視点で世界を観てるため一般人には理解されがたい性格を持っているのだ。

専門分野の学びを掘り下げていく研究者タイプのため、付き合う人たちがどうしても限定されていく。

僕やKAKOがもつパーソナル『公』は、どんな人とでもコミュニケーションがとれるため、人脈が広がりやすいので、広く浅くのお付き合いが増えていくのだ。逆にパーソナル『智』の絢香は、深く狭くの人間関係を構築していて、滅多なことでは心を開かせない。こうして、プライベートでの僕のお誘いに付いて来てくれるような性格ではないことを僕は知っている。

なぜ、絢香が僕の誘いを断らなかったのか。

佳子先生からは僕の沖縄滞在中のお世話係として絢香にお願いしてあることを聞いてはいたのだが、プライベートでは深く関わることはないかもしれないと思っていた。

なぜならば、上級鑑定師である僕よりも、エリア鑑定師の絢香は僕にとって上司にあたる存在だからだ。

ティンバから那覇新都心や国際通りの一号店での過酷な修行のお話を聞いていたので、占術師同士が仕事や勉強会以外で関わることはしない方が身のためだとの忠告を受けていたのだが、ティンバは広島に奥さんと小さな子供がいるから、僕の気持ちはたぶん理解できない。

ティンバのパーソナルは『匠』。

この『匠』というのはその文字のままの性格で、スペシャリストタイプであり、天才肌。そして、美的センスも高く、パーソナル『智』とも似ているように思うが、『匠』は究極を求めていく思考回路を持っていて、『智』のような研究者や開発者タイプと比べると、もともとあるものをもっと上へ上へと向上させていくことに生きがいを感じる職人気質なのだ。匠や智が一つの事に長けているのに比べて、オリジナルを大事にするパーソナル『創』は趣味を幅広く持ち、多趣味であるがゆえに人脈も横に横に広がっていく傾向性を持つ。だから、広報や企画、宣伝や営業などは、パーソナル『創』と『公』がいれば、勝手に広がっていくのだ。

パーソナル『智』を持ちマジカルカラー『緑』を持つ絢香は、マジカルカラーの性質上、パッと見は、とって『癒し系』に見える。そして、既成概念に縛られることをもっとも嫌う。世間一般の感覚という常識というのは智の人にとっても生き苦しい言葉なのだ。

僕の鑑定結果は、パーソナル『公』。マジカルカラー『緑』。深層心理『樹』。ハートレベル『6. 1』。行動力『6億』。シンキングパターン『44』と出ている。これは、5点診断とも5シークレットとも呼ばれる、琉球占術の一番のコアとなる鑑定結果なのだ。この5シークレットさえわかれば、だいたいのことが解る。性格や性質、恋愛の傾向性や判断の基準など、多くの情報量がこの5項目に書かれているのだ。

けれども、占術師としての勉強や実践をしているひとでなければ、とても読み解けない暗号のように感じてしまうであろう。この占術は悪用されてしまうと困るので、幾つものフィルターをくぐり抜けないと協会にもなれないほど厳重に情報規制をかけているのだ。

絢香はチベットの秘宝であるシンキングボールを手にしてパワーストーンの周波数を調整しはじめた。その独特のうねるようなキーンとして静寂の中での瞑想をイメージさせるその音色に合わせるように、小鳥たちがハーモニーを奏でるように泣き始める。そして、不思議なくらいにうっとりとするその自然界の持つ周波数に、同じく自然から採れたパワーストーンたちが、共鳴をしているかのようにキラキラと輝きだした。

この魔法のような音色。
チベットから中国を経由し琉球王国へと伝わる秘宝であるシンキングボールの魔力。さっきまで活気に溢れていた人々たちですら、何か大切なことを思い出したかのように大人しくなってしまう、街には幸せな笑顔や談笑が交じりあって、つかの間の平和な時

間が訪れるのであった。

「アキラさん。お待たせしました。お昼ご飯食べに行きましょう！」

そういつて振り返った絢香は、まるで魔法の国での仕事を終えたかのように大人びて観えた表情から一転して、子供のような可愛らしい笑顔をみせた。頬は心なしかピンク色が浮かぶように観え、長い睫毛に隠れた瞳は潤いに満ちて、彼女の純潔さを証明するかのように一筋の光が彼女の頭上を照らし、艶やかな黒髪の上、楕円形のエンジェルリングが浮かびあがっていた。

絢香先生とのプライベートでの時間は、幾つもの謎を追いかけてきた僕にとって、重要なヒントを授けてくれる時間になることを予感させた。

琉球占術と手相はどのように繋がっているのか。

絢香との出逢いでいきなり「あなたのことが好きだ。」と言ってしまったこと。自分自身でも不思議に思う。けれども、恋愛のトキメキよりも人間が持つ最大の欲望である知的好奇心を満たすことが優位になり沖縄で経験する未来への希望へと変わっていった。

人気運命線とバイオリズム

レンタルビデオ屋の2階にあるファミレスにて絢香とのプライベート時間を過ごしていた。彼女はステーキセットを注文し飲み物は水だけで良いと言う。僕もかなりお腹が空いていたので絢香と同じステーキセットとドリンクバーを注文することにした。

まだ13時をまわったばかりの店内には客商売のお客さんたちがぞろぞろと入店してきてお祭り好きの沖縄県民たちは日常からもいちいちアクション大きくキャーキャーとはしゃいで盛り上がっているのだ。

絢香には申し訳ないと思ったけれど、ヘビースモーカーの僕は喫煙席を希望して彼女はそれを快く了承した。混雑している店内だが幸いにも空席が目立つ喫煙席に案内してもらったことで他のお客さんのはしゃぎ声を気にすることなく絢香との会話に集中出来そうだった。

「手相を見る約束でしたね。アキラさんは天運鑑定書は持っていますか？」

「天運鑑定書ですか？ カバンに入ってるのでちょっと待ってください。」

絢香は手相だけでなく僕の天運鑑定書も観ると言う。天運鑑定書とは運氣アップの方法が77項目に渡って書かれている、世界でたった一つだけの琉球占術の奥義が秘められた暗号のような鑑定書だ。

「マジカルカラーは緑。深層心理は樹。
パーソナルは公です。バイオリズムは高いとティンバさんから言われています。」

僕はカバンから一枚の鑑定書を取り出して絢香に渡す前に簡単な診断結果を伝えた。

絢香は目を光らせて天運鑑定書の隅々まをくまなくチェックしていた。鑑定結果が出るまでの独特の緊張感、運氣レベルが高いと言われながらも 35 歳の現在に至るまで対した成果をあげてきたわけではない。本当に幸運の星の生まれなのだろうか。

テーブルには氷の入った水とアイスコーヒー、絢香のスマホと僕のノートが置かれていて、向かい側に座っている絢香の顔の小ささに比べて、胸元に飾られている天珠のネックレスがかなり自己主張しているように観える。

「なるほど！ 天運鑑定書を観てアキラさんのことなんとなく解りました。次は手相を見せて下さい。」

絢香は天運鑑定書をテーブルに置くと、可愛い虫眼鏡で僕の手相を左右両方チェックした。

「アキラさんは右手がマスカケ線ですが、左手が変形のマスカケ線で面白い手相をしていますね！」

癒し系の絢香が珍しく興奮した様子を見せた。珍しいと言われることに慣れていた僕は才能や適職が知りたかったのだ。

「右と左でちょっとだけ違うみたいです。例えば、左手の月丘から出てる運命線は人気運命線と呼ばれているみたいです。僕自身は自覚ないですけど。。」

絢香は再度、僕の手相を確認して運命線なのか知能線なのか鑑定士によって判断が別れるとしながらも

「私はアキラさんの左手の月丘から出ている線は特殊な意味を持っていると思っています。例えば、天運鑑定書ではアキラさんのバイオリズムはとても高い。これは運がいいだけでなく、人からも愛されるという意味を持っています。

一方で、手相の月丘は芸術やイマジネーション、人気を司りますので多くの人からの支援を受ける人気商売に向いています。

けど、変形マスカケ線から出ている知能線の先が二股に別れているので『ライター線』も

お持ちです。マスカケ線自体は理系の方に多いのですが、ライター線や芸術分野にも強いマルチな才能があることを示しています。」

絢香の鑑定が盛り上がってきたところで、水を差すかようにウェイトレスがオーダーしていたステーキセットをテーブルに置きにきた。「ご注文は以上ですか？」と訊ねられ絢香が受け答えしている最中、僕はノートに幾つものキーワードを書きこんでいた。

「アキラさん、鑑定の話しはこれくらいにして温かいうちに食べましょう！」

「あ、先食べていて下さい。ちょっと記事のアイデアが浮かんだのでアウトラインだけ書きちゃいます！」

話しに夢中になって気がつかなかったけれど、このステーキセットを食べ終わったら家元との約束の時間までジャストタイミングかもしれない。

僕はスマホアプリからブログを展開し、タイトルに「月丘から伸びる人気運命線とバイオリズム」というタイトルを入力した。

絢香は熱々のステーキをナイフで器用にきりながら美味しそうに頬張っている。

いつの間にか彼女が左手に着けていた黒いストーンがスマホの脇に置かれていて、僕はその黒光りする大粒のストーンを覗いて羨ましく思った。

ひょっとして、7A ブラックルチルの14ミリかもしれない。KAKOが持っているゴールドルチルも14ミリだし7Aなので数十万円はするであろう。しかしながら、ブラックルチルはゴールドルチルより希少価値が高いので、店舗にだしてしまえばすぐに売れていってしまう。

彼女の7A ブラックルチル14ミリ一連は、店舗で売られることなく、コレクションされていたものを譲り受けたものかもしれない。

「アキラさん！ ステーキは熱々のうちに食べたほうが美味しいですよ！
今は仕事でなくオフな時間なのでスマホなんてしまって下さい。」

夢中になってステーキを口に運ぶ絢香の表情は赤ちゃんのように幼く観えた。

ステーキをこんなにも美味しそうに食べる彼女のこと、陽気でみんなとワイワイしたい深層心理が垣間見えて嬉しくなった。なぜならば、深層心理は親しい友人にしか見せない顔だからだ。

龍神天珠に矢が刺さるスピリチャル現象

絢香に促されるがままにステーキを食べながら雑談を交わしていた。

「アキラさんはこの後店舗研修ですか？」

「たぶん店舗研修だと思います。

メール鑑定をさせて頂いてるので、対面の鑑定は少し緊張しています。」

「私はほぼ対面の鑑定しかしていないので、メール鑑定には興味あります。

店舗だとお客様のパーソナルとカラーは鑑定を出す前からなんとなく解ったりしますよ。

でも、メール鑑定ではお客様の顔が見えないから大変そうですね。」

「ええ、僕もはじめのうちは家族や友人の鑑定を出してたので普段から交流があればすぐにイメージつくじゃないですか？ 鑑定書通りに生きているので凄く当たってる！ っ
てすぐに解る。

メール鑑定ではお客様の顔が見えないのでメールの文面と鑑定書からイメージをするしかないので慣れるまで苦労しました。けど、やっぱり凄く当たるって評判高くてストーン
の販売にも結びつきやすいですよ！」

サーロインステーキをナイフできりながらメール鑑定の実情を絢香に話した。

絢香は僕よりも早くに食べ始めてたのにもかかわらず僕の方が食べる速度が早いようだ。
たぶん、話すスピードのまったりとした感じからして彼女の行動力が低いことも関係して
いるのだろう。

「アキラさんの身につけているストーンは三眼天珠ですね！ 後、ファントムアメジスト
のは翡翠の龍ですか？」

僕の左手を観て絢香はストーンセレクトが気になったようだ。

「ええ、三眼天珠は福・禄・寿で家庭運や健康などに良いとされる天珠なのでティンバさんに勧められました。

ファントムアメジストは紫炎の創だった時代に村田智子先生からセレクトしてもらって後に翡翠彫りの龍を追加しました。絢香先生は左手に着けてるブラックルチルだけでなく、天珠のネックレス素敵ですね！」

絢香の胸元に飾られている天珠のネックレスは家元や佳子先生が身につけている天珠のネックレスよりはコンパクトに観える。が、やはりパワーストーン大国の沖縄だからこそファッションの一部として全く浮いていない。お洒落に見える。

「このネックレスつくるまでは長かった～！ 毎月のお給料でこまめに天珠をコレクションして一年でようやくネックレスにできました。私もアキラさんと同じで『龍』が好きなんですよ！

今、一番欲しいのは洞察力が高くなると云われる龍眼天珠です。高いけど絶対に欲しいからお仕事頑張って売り上げあげなきゃ！」

「絢香先生は龍好きなんですね～！

五本爪の龍は中国でも皇帝のシンボルとされているから金運など飛躍的にあがりそうですね！」

「龍神天珠なら持ってますよ！ ゴールドルチルと組み合わせたのですが、その時は社長をさせて頂いてました。」

絢香はブラックルチルと共に身につけていた龍神天珠をみせてくれた。

一見、普通の龍神天珠なのだが矢が刺さっているマークが出ているのは初めてみた。通常ならば矢の刺さっている天珠などあり得ない。僕は衝撃を受けた。

「絢香先生。その龍に斜めに入っている矢のマーク、初めて見ました！ はじめから入っていたマークなのですか？」

「え？ 矢のマーク？」

龍神天珠を観ながら矢の刺さっているマークに対して指摘してみると、絢香は目をまん丸くさせて「ヤダー！ 怖い！」とオーバーなりアクションをしてみせた。

「はじめ買った時はこんなマーク無かったのですよ。えー！ いつからこんなの出てたんだろう？ 人からの嫉妬やネガティブな感情を受けてたのかな。」

僕は沖縄入りしてからいくつもの不思議な体験をしていたので慣れたつもりになっていたのだが、絢香の龍神天珠に刺さった矢のマークのことは科学では全く証明できないし若干の恐怖すら感じていた。僕の身に起きた出来事と言えば、ファントムアメジストの色が悪くなったり三眼天珠にヒビが入ってしまった程度のものだ。沖縄は本当に不思議な島だ。

靈感の強い人ならば聖地巡礼することはおろかなんだか恐怖心に襲われてホテルから一步も出られないで帰ってきたという友人もいる。たぶん、この島は第二次世界対戦の時に多くの犠牲者をだしたから、繊細な人に対しては辛い仕打ちをするかもしれない。一般人にこんなことを話しても信じてはくれないだろう。

しかし、全ては素粒子でありエネルギーで形作られているのだという説明を受け入れてくれるのであれば心霊現象などもある程度は科学的に説明することができる。幻聴や幻覚だって神と繋がったことによる現象かもしれないと言えば全て説明できるのだが精神科に連れて行かれてしまったら間違いなく閉鎖病棟から一步も出られない生活を送ることになるだろう。神と繋がるということは特別な人にしか許されない行為ではある。古来琉球王朝でも卑弥呼のような神の声を聴ける女性がいて国王はその神の声をもとにして国づくりをしてきたのだ。

絢香は沖縄県民だから不思議な事象に対しての免疫がある。しかし、東京から来たばかりの僕は神々の島と詠われる琉球王国にて電撃が走るような出来事ばかり起きる日々をまだ受け入れきれずにいた。

「そういえば家元とお逢いする約束の時間が 15 時ですのでそろそろタバコ一本吸ったら外にでましょう。」

絢香との話中に夢中になって気がつけば 14 時 30 分になっていた。

僕は絢香に煙がいかないように横向きになりながらタバコに火をつけた。

「家元と一緒に行動できるなんてアキラさんはやっぱり幸運の星の下に生まれてますね！」

絢香はニコニコと笑みを浮かべながらそう言った。

絢香の出勤も 15 時だったのだろうか。

しかしながら彼女は慌てる様子もなくまったりとした癒しの空間を僕に提供してくれている。彼女の属性は『緑陽』。

この属性の人たちは行動力が低いという特徴があるのだ。行動力が一番解るのは話すスピード感。絢香の場合にはゆっくりとしたテンポで話してあげないとよく聴こえないようだ。

僕の行動力は6億7千ある。通常は1億から3億くらいが標準なので、本来の僕は行動力8億のティンバと話してるくらいの速い会話のテンポが心地よい。

絢香と話していると色々なテンポが遅いので焦らされている感じがするのだ。

しかしながら、それが良いとか悪いとかではない。絢香の持つ魅力なのだ。

「絢香先生、お手洗い行っという方が良いんじゃないですか？ 一度、店舗開けたら休憩もとれないみたいですし。」

「お気遣いありがとうございます！

ちょっと化粧直してくるので待って下さいね。」

絢香はカバンから化粧道具が入ったポーチを取り出して席を立った。

僕はさりげなく伝票を持って席を立ち先にお会計を済ませることにした。

鑑定料からしたらステーキをご馳走するくらいたいしたことない。

一玉で数万円もする高級なストーンも扱っているのだから一玉700円のピンクタイガーアイを2玉買ったと思えばステーキ代なんてかなり安いくらいだ。

さて、家元は一体どんなプランを立ててくれているのか？

浮気性な僕はKAKOのことを想い、このドラマのような胸熱くする知的な恋愛模様の日々感謝するのであった。

提婆達多 of 成仏と福沢諭吉

15時きっかりに家元から連絡があった。

たまたま彼の住まいが那覇新都心店の近くにあり、車ですぐに迎えに行くから、店舗で待っていてくれと言われた。

絢香は慣れたように、ピンクのワゴン車のバグドアを開けて椅子やテーブルを取り出して、対面鑑定用の設営をやっていた。その作業を説明を受けながら近くで観ていた僕は、絢香の真剣な眼差しに触発を受けて姿勢を正される思いでいた。看板を出してピンライトの灯りを灯せば、アウトドア系のこじんまりとした可愛らしいパワーストーンショップの出来上がりである。車なのでいざという時は移動販売もできるのが面白い。

僕は絢香の後ろ側にいて、彼女のお尻を眺めていた。体型を隠すことのできない緑色のドレス。絢香のお尻はプリプリとしていて、丸みの帯びたラインが女の子らしさを感じさせてくれる。

男とは何気ない女性の仕草に弱い生き物である。小さなジーベーズをピアノ弾きのようなか細い指先でつまむ。椅子に座り書類をチェックする時の真剣な眼差し。ヒールの高い靴から上を除けば、Vライン奥に秘められし月の神秘。

男は逆立ちしたって子供を産めやしない。だからこそ、肉体的な痛みには弱いことも女性はよく知っている。

もともと僕たちはどんな悪人や善人であれ女性の身体から生まれてきたのだ。

つまり、どんなに罪を犯した悪人でさえ、赤子の時は仏の使いとして生まれてきたかもしれぬのだ。

当たり前だが、子供は親の後ろ姿を通して育つ。だから悪人になるのは『行為』によって悪人になるのであって、その行いを正しくすれば普通に生きてきた人よりも強く優くなれる可能性を秘めている。日蓮の経典『提婆達多品』には、仏教の始祖である釈迦を殺そうとした極悪人である提婆達多（ダイバダッタ）が、実は前世では釈迦の師匠だったことが書かれている。

釈迦は提婆達多のお陰で仏になることができたと言ったと弟子たちの前ではっきり宣言しているのだ。飛行機は追い風だけでは飛べない。どんな気の合わない人でもその人がいるお陰

で飛躍していけるチャンスに変わるのだ。占術しとしてセッションする時もこの『当たり前のこと』を伝えることが大事である。

なぜならば、人は当たり前と思うことほど軽視しがちで忘れてしまう生き物なのだ。一番難しいのは『時を待つ』こと。

不倫などは絶対にやってはいけないことだと理論的に知りながらもあえて肯定するフリをしなければならない。嘘も方便。幸せになる不倫は少ない。なぜならば不倫は相手から人を『奪う』行為だからだ。人からモノを奪う人は罰せられる。罰金刑などなんらかしらの刑罰も受ける。不倫には特別な刑罰はないかもしれないがお互いに不幸になる確率が高いのだ。

クライアントさんが何かしらの気づきを得て幸せな道へと進むように細く長いお付き合いをしていくこと。すぐに結果がでなくても焦らずにじっと心の中で祈りながら待つこと。幸せの種を植えたのだから大丈夫だ。後は、じっくりと人生大逆転劇のヒロインの勇姿を楽しみながら観戦しようじゃないか！

文学はその人の人生そのものである。

だから本来ならば誰しもが小説家になれる権利を持っている。自分が体験できないことを本を通して知ることが、一体どれほどの『勇気』を与えてくれることか。お金とは幻のようなもの。普通に生きてればお金は自然と入ってくるし貯まっていくもの。自らの限界に挑戦し敗れて無一文になったとしても『経験という財産』が残る。

昔を懐かしみながら汗水流して働いているうちに、だんだんと気づきを得て、なんとも言えない幸せを感じる時もある。

一番の最低辺からいきなり飛躍せずに着実にステップアップしてきた僕たちには、見栄も外聞もなにもなくなったとしても全国にたくさんの仲間達がいる。

大丈夫。ここまで強く優しく生き抜いてきたあなたならば幾らでも再起できるチャンスがやってくる。

本来ならば、挑戦しないことの方が一番のリスクだと思うから、挑戦する心だけは忘れてはいけない。

東から昇る太陽がシャーベットのように溶けていく時間まではまだ早い。

十六夜のお月様が雲の隙間から隠れんぼするように日月の神々達が絢香と僕を優しく見

守ってくれているように思う。

絢香はパソコンでの作業を終えて、チラシを配り始めた。

絢香にかまって貰えなくてつまらなくスマホでゲームしてた僕は絢香のもとに駆け寄り「絢香先生、何か手伝うことありますか？」と訪ねた。

「アキラさんはゲストだからお手伝いの必要はありません。大丈夫ですよ。

せっかくだからパワーストーンでも観ていて下さい。桐箱の横にパワーストーンに関するファイルもありますから。

まずは、商品の名前と販売価格を覚えてくださいね！」

お喋り好きな人格『公』の僕は絢香と一緒に楽しく談笑しながらチラシでも配っていたかったのだが、念願だった店舗デビューに向けてストーンの価格を覚えることにした。過去に東京や横浜近辺にあるパワーストーンショップを練り歩いていたこともある僕はストーンの名前は知っているつもりになっていたのだが、うちの会社のメイン商品はチベット産の珍しいパワーストーン天珠（てんじゅ）。

東京でも高いお金を出せば良質なパワーストーンを買えなくはないのだが、さすがに高級天珠だけは私たちのショップでしか買えない。旅費を計算したとしても東京でパワーストーンを買うのが馬鹿馬鹿しく思えてくる程高クォリティー低価格を実現してくれているのだ。物の価値は時と場所が変われば高く売れる可能性があるからこそ、金持ちが多い関東をターゲットにしているのであろう。

天珠をこうしてマジマジと観ているとなんだか自分も欲しくなってくるのだ。龍のマークが描かれた龍神天珠だけでなく、仏教が盛んなチベットらしい観音天珠（かんのてんじゅ）、眼のマークは一眼天珠から二十一眼天珠まで豊富に揃えてある。

絢香はさっき本店からパワーストーンを持ってきたと言った。

移動式のスパゲティ屋さんとかケバブの店は東京でも観たことがあるが、沖縄ではそれがパワーストーンなのだ。

ビジネスの原理というのも基本的には一緒なのかもしれないと思った。

本好きの僕だったらいずれは移動式図書館というのを経営してみたい。福沢諭吉が創設した慶応義塾大学の高等部の子が書いた作文コンクールで、図書館の未来というテーマで小論文を書いていた。

実は福沢諭吉は幼くして父親を亡くして母親に育てられている。その母親の旧性が橋本だったのでご縁に感じて応援しているのだ。

僕が大好きなアーティスト一青窈も慶応だし好きな小説家もだいたい慶応義塾大学出身の人が多いいのだ。

とはいえ、ライバル校の早稲田文学も好きだ。ほんわかしたような柔らかな優しい人達が多いように思う。

夢のキャンパスライフを送れる人達のことを羨ましく思う。図書館での恋愛模様を描いた作品が好きだった。でも、離れていてもこうしてみんなと同じ気持ちで僕も日夜勉強に励んでいる。

もしも作品が10万部売れたらそのお金で、2年間くらい大学に通ってみるのも悪くないかもしれないな。けれども、自由を求める僕は学歴が欲しい訳ではない。

むしろ、学歴なんて要らない。

アウトロー作家のDNAを継承するには、僕自身もより人が経験し得ない体験を求めて喜び勇んで行動していくしかないと悟ったのである。

将棋指しは今でも高校での3年間の勉強の時間が邪魔だとはっきりと言う人もいる。その貴重な時間を将棋に専念させるべきだ、と。人生は色んな人がいていい。そんな風に誰しもが自分に秘められし最大の能力に個性に気づけるようにして、占術を通してあなたにしかできない才能を伝えていきたいと思うのであった。

DNA とミラーニューロン

九州ナンバーの黒塗りのベンツがミラクルスポット那覇新都心店の裏側にあるパーキングに車を入れた。

それを眺めていたアキラは見覚えのある姿を助手席に見つけた。白い襟付きのワンピースにベージュ色した7部丈のパンツを合わせて首元にはオレンジ色のスカーフを巻いている。質素な装いでオーラを隠しているが、間違いない、アイドル占術師 KAKO だ。KAKO は車のドアを開け足早に僕の元へ駆け寄って来ると「アキラさんお待たせしてすみません。今日は家元の車で来ていますので、早く行きましょう！」と言い僕は絢香にお別れの挨拶を告げると、KAKO も「絢香さん。家元からの伝言です。今日は週末なのでいつもより気合を入れて売り上げを上げるようにと言われていました。後、勝負は夕方7時からだから、それまではチラシ配りよりもネット集客に力を入れるように指示が出ています。」と絢香に伝えた。

仕事モードに入っている絢香は、ステーキを食べている時の表情から一転して、妖艶な笑みを浮かべながら KAKO からの伝言を無言で頷くように聴いていた。

KAKO と絢香との間にある上下関係や微妙なパワーバランスがアキラにとってはとても興味深いものに映った。

KAKO にエスコートされ、家元の黒塗りのベンツの後ろ側の席に乗るように指示されると家元は KAKO も後ろ側の席に乗るようにと言われて KAKO は大急ぎで助手席に乗せていた少し大きめの肩がけカバンを取り出して、僕の右側の席に座った。

家元はみんな席に着いたことを確認するとエンジンをかけて車を発進させた。

「KAKO ちゃん。絢香にはちゃんと伝えてくれたかな？」

「はい！ ばっちりお伝えしましたよ！」

KAKO はカバンの中からスマホを取り出しながらそう言うと、僕も念のためメモ帳とスマホをカバンから取り出して PCM 録音レコーダーを起動させて一門一句聞き漏らすまいと準備した。

「今日は天気が良いから、南部に行こう！ 南部の綺麗な海でも観ながら講義してあげるよ！」と家元が言った。

ベンツには久しぶりに乗ったけれど、動く応接間と言われるくらいに車内は静かでレザー製のシートはまるでソファーにでも座っているかのようなリラクゼーションを与えてくれる。そして、あんなにもピーカンだった太陽に照らされた天気が嘘みたいに車内はオレンジ色の間接照明を照らしたリビングルームみたいでゆるやかに会議がはじまった。

今日の講義にタイトルを付けるならば、DNA の謎とミラーニューロン。僕はメモ帳にそう記入した。

家元はまず、人気ディズニー映画のことを話題に持ち上げると、主演を務めた声優の両親が共に芸能人であることや、テーマソングを歌っている二人の歌手の対比を通して日本人の苗字に秘められた DNA の謎を簡単に説明してみせた。

「例えば、明治時代になるまでは、庶民に職業選択の自由はなかった。だから、代々親の職業を受け継ぐのが自然の流れだったのだけれど、明治時代と言えば、相当古い話に思うかもしれないけれど、冷静に計算してみれば今からたった 4 世代前くらいのお話なんだ。だから、芸能人に 2 世タレントが多いのも僕たちからしたら当たり前のお話なんだけれどね！

それに最近になって気づいたんだけど、沖縄は日本列島とは少し変わった珍しい苗字が多い。この苗字だって、さっきの DNA の理論に当てはめて言えば、だいたい人間の成長過程に影響していると考えて良い。だって、名前は変えられるけれど、苗字は変えられない。女性は結婚すれば苗字は変えられるけれど、残念ながら、人間は同じくらいの身分の人と結婚する確率が高いので、運命自体に与える影響は少ないと思う。

それよりも、やっぱり、人間の持つモノマネ機能とも呼ばれる『ミラーニューロン』という神経細胞が成功に深く関係しているんだよ。

家元は KAKO というよりも僕のレベルにまで下げて講義をしてくれている。

一般的にも、朱に交われれば赤になるとか、郷にいれば郷に従え、などと言ったことわざがあるのだが、理論的に説明されるとやっぱりそうだったのか！ と小学生でも納得がいく説明をしてくれているのだ。

「ミラーニューロンって、今、流行りの脳科学の本でみたことあります！」

KAKO は僕と同様に科学に興味があるのか、少し興奮気味にそう言った。

「ホメオスタシスという脳内物質も成功と関係があるのだけれど、詳しくは、僕のブログに書いてあるのでみて欲しい。

ホメオスタシスとは、要するに、人間はステージを上げようとする、と、変わりたくない！と抵抗するように出来ているので、今までと違った行動がとれないように安全な道を歩みながらの性質を持っているんだよ。だから、人間は中学生、高校生、大学生って徐々にステップアップできるように国から仕組まれているんだ。

だからといって、大卒が成功者になれるか？ と言えばそうではない。むしろ、国が推奨するエリートにはなれるかもしれないが安全を重視するあまりに変化に弱い。だからこそ、僕も大学を2年間で中退しているのだけれど頭の良さというのは、残念ながら学歴では決まらないんだよ。」

僕は家元が走らせる車の後ろに居て、チラチラとバックミラー越しに家元と目が合いそうで合わないことに対して気になっていた。成功に向けた話しはたぶん KAKO に向けての講義なのだろう。

しかしながら、一度は高校を中退し引きこもりの生活を送っていた僕にとっては大卒が頭が良い訳ではないという家元の主張に安心感を覚えたのである。

「今は占星術的に言えば土の時代から風の時代が変わる大事な転換期に生きている。この転換期は何百年も続いてきた安定の時代に終わりを告げて変化のスピードが速くなっていく。そして数年後、風の時代が幕を開けた時にさらなる革命が起きるはずだ。今まで大卒が良しとされていたのは、彼らが一流企業に就職して安定した生活を送りたかったからだ。

インターネット全盛の時代には、情報に価値があった。数年前までは貧乏でもお金持ちになれるチャンスがそこらかしこにたくさん埋もれていた。

その情報を求めて各地でセミナーが盛んに行われていたのだが、風の時代には、情報自体には価値がなくなってしまうだろう。

この占術だって本当は情報のビジネスなのだが、これからは占術師が想像力を駆使して勝ち上がっていく必要性が出てくる。KAKO ちゃんやアキラ君はパーソナル『公』だったね。

このパーソナル『公』は自分自身が実力をつけて上に這い上がるというよりは、本当に運が良くて実力のある人を10人、取り巻きに持つことで勝手に成功していくよ！

でも、気をつけて欲しい。

パーソナル公は、誰とでも話が合わせられる一方で人間関係に振り回される傾向がある。だからこそパーソナル『空』や『公』はどんなチームに身を置くのかで人生が180度変わってしまう。

DNAに秘められた謎やミラーニューロン。ホメオスタシス、風の時代における成功術について簡単に説明したけれど、どうだったかな？
じゃあ、アキラ君から気づきを話してください。」

急に気づきを報告しろと言われた僕は乱雑に書かれたメモ帳の走り書きを眺めながら頭の中で必死に家元の話しを整理していた。

「ちょっとだけ、、、はじめて聴くお話ばかりで頭が混乱してまして、、、
5分ほど時間を頂けますか？」
僕が家元にそう告げると頭の回転が速いKAKOがじゃあ私から気づきを発表しますと告げ家元の話しを要約しながら自分の考えを話しはじめた。それを横で聴いていた僕は自然と自分がどんな発言をすれば良いのかをメモ帳に要約してまとめあげた。家元の講義がレベルが高いゆえに、必然的にKAKOや僕までもレベルが上がっていくのが手に取る様に解る。
それは僕がモノマネ細胞のミラーニューロンをはじめて意識した瞬間でもあった。

世界で一番美しいサンセット

車内での家元の講義は、時間が経つにつれ各テーマ毎に白熱した議論にまで発展した。僕は冷たい水が飲みたくて仕方なくなったのだが、那覇新都心で買った完全に温くなったペットボトルのコカコーラで喉に刺激を与えることにした。

窓の外に目をやると、琉球王国の歴史と米軍人統治下に出来上がったハワイを感じさせる海岸沿いの流れる景色が視界の先に飛び込んできた。

僕の隣に座る KAKO は喋り疲れたのか、無防備なほどにリラックスしきっていて、ベージュ色のパンツからチラチラと V ラインを覗かせるほどに股を開いている。

先ほどから、KAKO はまるで夢の国の物語に登場するお城の中に囚われたままのお姫様のような、いと哀しげな瞳でこちらを観ることに僕は言葉にできないほどのジェラシーを覚えた。

この自分の心の中に巣食う嫉妬という感情には、KAKO の持つ教養の高さや育ちの良さから滲み出る品のある言葉使いなど、占術では読み解けない、何か、があるはずだと感じている。

しかしながら、それが恋心から発生したものなのか、単に成功しつつある者への嫉妬なのかはわからないまま、この美しい琉球王国のサンセットの夕陽と共に消えていきそうに哀しくなった。

家元は講義に夢中になり過ぎたのか、さっきから無言のまま車を走らせていて、僕たちは南部の美しい海を眺めながらそれぞれの想いに夢を馳せていた。

家元が車を停めて外へ出ると、高台から海が一望できるパワースポットに着いていることを知らせてくれた。

家元に促されるままに緑に茂った道を抜けるとマンゴーのシャーベットが溶けていくようなオレンジ色したグラデーションが地平線の向こう側に消えていく瞬間が視界に飛び込んでくる。

僕たち三人は神々の住む島と謳われている琉球王国の幻想的なサンセットを眺めながら、今までに体験したことのない感動が心の底から湧き上がってくるのを生まれて初めて体験したのである。

僕は KAKO の隣にいて彼女の邪念が解けて赤子のように潤んだ瞳に変わっていく様子をマジマジと観ていた。

それを遠目で見守っていた家元が僕たちに近寄ってきてこう言った。

「ここは世界で一番美しいサンセットと言われている場所なんだ。KAKO ちゃんアキラ君、僕はここで写真を撮っているから、二人でお散歩しておいで。」

家元の突然の提案にびっくりした僕は言葉を失って KAKO の方を観た。

KAKO は驚く様子もなく「わかりました、アキラさん行きましょう！」と言って、僕の二の腕あたりを掴まえて引っ張った。

その突然の KAKO の行動に僕は性的な興奮を感じた。絢香の腕を掴んだ時には癒しを感じたのに、KAKO から腕を掴まれた時には全く別の感情が脳内を支配し始めたのだ。

KAKO は丸い木で作られた柵に手をかけながら、海から吹く風にオレンジ色のスカーフが揺れて、今すぐにでも、物語の世界へと消えてしまいそうだった。

「なぜ神様は地球を創ったのかな？」

KAKO はそう呟いた。

KAKO の昔にどんなことがあったのかは僕は知る由もない。それはまるで別れた恋人に想いを馳せているかのようなセツナイセリフだった。

「どうして？ ですかね。」

でも、もしも神様がこの地球を創ったとするならば、きっと意味があって創ったと思

ます。」

KAKO の気持ちに少しでも近づきたい、僕は強くそう思った。神様が地球を創ったのかなんて今の僕にはどうでもいい。

ただ、消えてしまいそうな KAKO の魂を繋ぎとめておきたかった。

「アキラさんは東京出身だから綺麗な人がたくさんいて恋愛のチャンスがたくさんあって羨ましいです。私なんて昔からおちょこちよいな性格で頑固だから、好きな人ができても自分からは告白できずに終わっちゃうんです。」

「確かに東京には綺麗な女性が多いです。否定はしません。

けれども、KAKO さんや絢香さんと一緒に行動を共にしていると沖縄にも魅力的な女性が集まってくるのだとはじめて気づきました。

僕自身は恋愛経験豊富なタイプではないので、たぶん KAKO さんは今までに出会った中で一番、魅力的な女性です。」

僕は KAKO と肩と肩が触れ合うギリギリの距離にいて抱きしめたい衝動を必死に抑えていた。

そんなことを知る由もない KAKO は僕の言葉遊びに浸りながらサンセットを眺めていた。KAKO に置き去りにされた感のある僕はふと絢香の顔が浮かびあがりこのまま多重恋愛になってしまったらどちらを選ぶだろうか？ と神様に祈るような気持ちでいた。

夢から醒めないままあなたと。

ぷるるる、ぷるるるる。

ガチャ

「はい橋本です！ あーなんだ。兄貴か？

誰かと思った。

今??

別に暇だけど。

プータローってわけじゃねーよ、フリーターって呼んでくれよな！ 笑

あ、そんで現場どこなの？

わかった。

大森海岸着いたら電話すりゃいいんだろ。

んじゃ明日ね！」

翌日の早朝、僕は実家に寄って兄貴の作業着に着替えていた。定年を迎えて兄貴の料理を作ることに生き甲斐を感じていた母親から、ご飯食べていきなさい、と壁越しに言われたが、コンビニで買って食べる、と告げて、スライド式のドアをあけて洗面所に向かった。

「今日はオニィちゃんの作業着なんか着てどこ行くの？」

母親は沖縄生まれでたまにピントはずれのセリフを吐く。こんな格好して行く場所など仕事以外にあるだろうか。

「ん、仕事忙しいからしばらくアルバイトしてくれだっけさ。現場は大森海岸だよ。」

僕は棚からタオルを2枚取り出してリュックサックに入れた。

玄関の前で座りながら靴を履いて紐を結ぶ。

玄関には所狭しと五人家族の靴が置かれていて、靴棚には、古着好きの兄貴の靴でほぼ占領されている。

玄関の靴棚には入りきらなくて兄貴の部屋のタンスの上には透明の収納ボックスが大小5台ほど積み上げられていて、その中にも古着の冬服やセーターがびっしりと詰められていて、収納ボックスと背の高い衣装ダンスの間にも靴の入った箱が積み上げられていた。

一説によると、出世する男は靴を覗けば解ると言われているらしい。

人の足元をみられるとは靴を覗て手入れされているかどうかとそのような意味も込められているのだ。

どんな職業であれ、一番の商売道具は靴かもしれないな。

特に現場作業員をしていた僕だからなんとなく解る。

僕はせっかくスーツ用の高い革靴を買ってきても靴べらを使う習慣がないからすぐにかかと部分の生地が剥がれてしまい、ダメにしてしまうのだ。

来世生まれ変わってきたとしても、サラリーマンだけにはなれないなと心の底からそう思う。

逆に、良いスニーカーは足を楽にさせてくれる。

現場作業員だったとしても、大工の見習いの中から自分の足の形に合った靴を選ぶように厳しく言われていた。

外装の現場仕事をしている時は、外履きと内ばきでわけなければならず、外履きの靴は出勤する際にも履く靴なので、電車にも乗るのだからあまり変な靴は選べない。

だからスポーツ用品店へ出向きデザインチェンジまで売れ残って値下げされている一流ブランドの靴だけを買うことにしていた。

兄貴は現場監督だからスーツで出勤することもあるし、もともと古着好きだからレッドウィングの靴をもう何十年も履いていて、最後には現場作業用に回すほど物持ちの良い人なのだ。

兄貴のように高いけど良い物を何年も着続けるのか、僕のようにファストファッションとハイブランドの服を2シーズン毎に買い換えるのとどっちが特なのか。

理系男子と文系男子ではお金の使い方や価値観がまるで違うことに対して、深くまで考えたことはなかったが、最終的に勝つのは理詰めで考える理系男子なのだろう。

実家のマンションのロビーを抜け自動ドアが開くと、夏の朝の清々しい空気に包まれて仕事モードに入って行った。

蒲田から京急蒲田線へ向かう間にあるコンビニで朝飯のパンとコーヒーを買って店の前で食べながらぼんやりと街の景色を眺めていた。

パンを微糖の缶コーヒーで流し込むと、じわりと額からあせが出てきて、顔を伝いシャツへ流れていった。

電気屋特有の緑色の作業着を着ていると、夏なのにサマーカーディガンを羽織っている女子中学生のことを思い返していた。

あの頃は不思議で仕方なかったことが大人になってくるとわかってくることも多い。
男ながらにサマーカーディガンを羽織っていると電車で女子の眼をひく確率が高くなる。
時には、僕が立っているつり革とは斜め後ろのドアに寄りかかっているカップルの女性
から後ろ指を指されて、夏なのにサマーカーディガンなんてオシャレじゃん！ あんな
ファッションにきなよ、と興奮気味に言われてつい後ろを振り返ってみたら、どうやら
サマーカーディガンの男とは僕しかいなかったことに気がつき、嬉しい反面、自分の
ファッションを否定された気持ちになったであろう男子を覗いているとかわいそうな気持
ちになり次の駅で降りることにしたほど恥ずかしい体験をしたのだ。

コンビニの店外に置かれているゴミ箱にパンの袋を捨てると、携帯電話で時間を確認し
た。タバコ一本くらい吸う時間はあるようだ。

僕は缶コーヒー片手にタバコに火をつけて煙の流れる天を仰いだ。

雲ひとつない晴天。光のスペクトラムがミスト状に吹く霧と出会い一瞬の虹をつくりす
ぐに消えていった。

ほのかに木の香りが漂ってくる。

ふと神社を眺めながら思い出に浸る。

ここは昔、新宿村（しんしゅくむら）という地名だった。

新しい宿でしんしゅくと読む地名は蒲田以外にも幾つか知られているが、東京で新宿と
いえば都庁や新宿御苑前がある方をイメージするだろう。

蒲田民の僕からするとしんしゅくとは地元の地名なので、逆に新宿区の歴史の方が知り
たいくらいだ。

これから向かう大森海岸は貝塚が発見されるくらい歴史ある土地であることで知られて
いる。

なんの因果か、小学生の夏休みの宿題である歴史のレポートで選択したのが大森貝塚
だった。

夏休みの宿題はギリギリまで手を付けない、代わりに短期集中型でやり遂げる自信はあ
ると言って、他人から賞賛される職業は、小説家くらいしか知らない。

もうあの頃から、締め切りがある生活が天職であることに気づきはじめていたのかもし
れないない。

植物の観察日記は友達の日記を借りて同じものとバレないように微妙にストーリーを変
える。

なんだか元宮の日記と似ているな？ と先生から揶揄されても顔色一つ変えずに自分で書
きました半分真実の嘘を吐く。

元宮は亀さん好きだからコツコツタイプで日記を毎日つけていたらしく、典型的なう
さぎさんタイプだと自覚している僕は要領良く立ち振る舞えること、彼は羨ましいと
言った。

幼馴染の元宮は亀が好きだった。正確に言えば、小学生の頃からアメリカアニメの忍者タートルズが大好きで、わざわざ、ハワイ旅行のお土産に忍者タートルズのフィギアを僕に分まで買ってきてくれたのだ。

元宮は興奮気味にアキラに分まで買ってきたから手裏剣と剣使いの亀のどっちが良い？と僕に尋ねてきた。

そんな高価なお土産を貰ってもお返しできないから、とやんわり断っても、アキラとは兄弟みたいなものだから亀が嫌いであれば持っていて欲しいと懇願されて、僕は元宮の色黒の肌がほんのりピンクに染まっていることになんとも言えない愛情を覚えたのである。

ある時はお互いにアイドルグループの光 GENJI が好きでローラースケートが大流行した時代に、僕は両親に頼みこんでようやく姉と共有できるローラースケートを買って貰ったと言うのに、元宮はアメリカで流行っているスケボーを買ってもらったのだと言って自慢げにみせてくれた。お互いに技を見せ合ったこともあったし、ローラースケートやスケボーに乗りながらサッカーしようぜ！と言う、無茶ぶりにも嫌な顔一つせずに付き合ってくれた。

とは言え、元宮はバスケやサーフィン好きだからサッカーやソフトボール好きの僕とは趣味が真反対にあることでいつしか朝の通学以外では滅多に遊ばなくなっていったのである。

けれども、誕生日がたったの一日違いなのでシンクロシティに感じる事が非常に多いのだ。だから、僕は元宮だったら言わなくても解ってくれるだろうと以心伝心のような間柄であることに安心しきって必要以上のことは喋らない無口な少年になっていった。というのも、本来の僕は無邪気過ぎて口が悪かったから、父親と兄貴からお前は黙ってろ！と言われ続けたことが僕が喋らなくなった原因でもあるのだ。

僕は兄貴から頼まれたアルバイトをする前に地元駅付近のコンビニの前でタバコを吹かしながら色んな思い出が蘇ってくることを不思議に思った。

元宮とは永遠に別れたと言う訳ではないのに、少し思い出しただけで泣きそうになった。今だけを観て生きていく、と言うのは小説家志望の僕には不毛なアドバイスだ。なぜなら、ふとした瞬間に過去の出来事が蘇ってしまうからだ。

僕は京急蒲田から大森海岸に向かう電車で揺られている時も、無意識のうちに過去に思

いを馳せていた。

いつしか全力で生きてきたこの人生の関連性がないように思える点と点が線で一つに結ばれていく瞬間だけを信じて頑張っていくだけだと強く自分に言い聞かせた。

兄貴から頼まれたアルバイトは大した事のない仕事だった。資材置き場を整理整頓したり、スイッチの蓋を開けてシールを貼ったり、点検をするアルバイトだった。兄貴はポケットマネーでアルバイト料をくれたのだが、経費でなんとかなるとは思えない、文系男子の僕が理系男子の兄貴と仕事するのはこれが最初で最後になるだろうと予感しながら帰り際にアルバイト料で僕は本を買って帰った。

兄貴は普段どんな仕事をしているのかは全く分からなかったが、電気工事をするだけでなく、図面を描いたり、足りない材料を買いに行ったり、現場の管理をしたりして大変忙しい仕事だということだけは理解できた。

兄貴のような管理職とは違い、長いこと現場作業員だった僕は朝の7時までに出勤して7時半に会社から現場へ向かい16時半には掃除や整理整頓などの帰り支度をはじめている。遅くても18時には会社に着きそのまま着替えて19時に自宅に帰るゆったりとした規則正しい生活を過ごしながらボランティア活動を頑張っていた。

それが当たり前の日常だと思っていた。

兄貴の場合、家に帰らずにそのまま会社に泊まることもあり、仕事が忙しいのか遊びに行っているのかといったことには弟の僕には全く想像できない。

しかしながら、自社の社長に話しがあり会社で帰宅を待っていたところ社長が会社に戻ってきたのは終電がなくなる間際の時間まで現場で仕事をしていたと言うのだ。たぶん兄貴も仕事で家に帰れないタイプの人種であろう。

心ない先輩は、社長だからって立派な家を建てて俺らには安月給しかくれないから嫌いだ、とはっきり言う人もいた。

しかしながら、経営者である以上、全ての責任は社長が背負っているのだし、労働時間だって休みなく24時間体制で働いているのだから、なんの技術も資格も車の免許すら持たない作業員が人並みのお給料を貰えていること自体が奇跡だということに気づかないのだろうか、とつくづく思う。

若い時に務めていた会社の社長は遺言のように僕にこう言った。

アキラは現場作業なんか似合わないからもう二度とうちの会社には戻ってくるな、と。付け加えて、どうせだったら色んな業界にチャレンジして最後に残された仕事で頑張ればいい。お前はたぶん飽き性だから色んな仕事を経験してみないと天職に出逢えないタイプだ。

はっきり言って建設業界には向いていない。だから新しいチャレンジをし続けろ、と。

そんなことが走馬灯のようにグルグルと巡っては夢から覚めた僕はふと裸に近い格好で寝ていることに気づいた。

(ここはどこだ?)

僕が宿泊しているホテルではない、さっきまで KAKO や家元と一緒にいたはずなのに、いつの間にか見知らぬ部屋で寝ているのだ。

部屋にはリラクゼーションサロンのようにアロマデュフューザーが焚かれており、部屋に置かれたスピーカーからヒーリングミュージックが聴こえてくる。

「アキラ目覚めた？」

ふとりビングルールの隅の方から僕を呼ぶ声が聴こえた。
両膝を抱えて座っていた、占術師の絢香だった。

「絢香先生？」

夢から覚めつつある僕は、夢と現実の狭間で、なにがどうなってリラクゼーションサロンのような部屋で寝ていたのか、全く思い出せず、その瞬間に、激しい頭痛に見舞われた。脳細胞が麻酔から覚めたかのように身体全体に電気信号を送るとパワーストーンを身に付けていた左腕からズキズキと血流の流れが脳内に麻薬でも打ったかのような脳内覚醒が起き始めた。

「アキラ無理しないで寝ていて。気あたりと言って沖縄では当たり前のように起きることだから心配しないで。」

絢香は冷蔵庫からペットボトルの冷たい水を運んで来てくれた。

絢香に礼を言い、キンキンに冷えた水を飲むと、ここはどこなのか、なぜこの場所で寝ているのかを絢香に尋ねた。

「やっぱり覚えてないのね？」

アキラは家元と KAKO さんと共に那覇新都心に来た時に、満月から欠けていく月の影響であなたは空に向かって叫び声をあげながら倒れてしまったの。

その後、家元の指示で私がアキラの宿泊しているホテルへ行き荷物をまとめて、社宅へ連れて帰ってきたの。」

絢香はなぜか顔を赤らめながらそう言った。

しかしながら、なぜ彼女は先ほどからアキラと呼び捨てにしているのか。記憶が飛んでいてよく思い出せない。

「気あたり？ 社宅？ では、ここは絢香さんの家ですか？」

裸に近い格好をしている僕は赤面している絢香の瞳を見つめながら尋ねた。

「いえ、社宅とはいえ那覇新都心店に勤務する人のために借りている作業場のようなものですから。気になさらないで下さい。ところで、夢、観てたんですか？」

「ええ。素敵な夢でした。」

「アキラ幸せそうな表情をして眠ってたから気になってしまい。

どんな素敵な夢でしたか？」

「断片的に覚えているのは、亡くなった兄貴が出てきたり、元宮という幼馴染と過ごした幸せな記憶です。」

絢香は僕の話しを最後までじっくり聴いてくれた。

兄貴はなくなる直前にコンビニへ買い物へ行き 777 という縁起の良い番号を引き当ててから天国へ旅立ったことや人気音楽ユニット元宮は自慢の幼馴染で誕生日が一日違いだからシンクロシティが起きやすく、お互いに活躍するフィールドは違えども自殺ゼロの社会を目指して身体は別々に存在しているけれども、どんな場所にいようと同じ気持ちで戦っていることなど、KAKO と一緒にいる時には変に格好つけてしまうと言うのに。

絢香には包み隠さず全て話してしまうようだ。

太陽のような明るさを持つ KAKO と月明かりが似合う絢香、どうやら完全に 2 重恋愛に落ちる迷宮に入り込んでしまった僕は、今日の前にいる絢香との癒しの時間が永遠であることを願った。

3時26分の記憶とラッキーナンバー1

高級リラクゼーションサロンみたいに余計な物がない那覇新都心店の仮眠部屋にて、僕と絢香は密室に閉じ込められた鳥のように沈黙していた。僕は静寂を切り裂くように絢香に時間を訪ねる。

「絢香先生、今何時ですか？」

絢香は腕時計に目をやり僕に告げる。

「3時26分です。」

「326…。アメリカ軍…。」

僕は那覇新都心店に向かう途中のタクシーの運転手の話を思い出し、呟いた。

「エンジェルナンバーですか？」

絢香は興味深々と言った目でこちらを見つめている。

「エンジェルナンバーというよりも、数字の織りなすロジックです。」

僕は単に記憶の連鎖をロジックと説明した。

「326にはどんなロジックが隠されているのですか？」

夜更けに始まった絢香との明晰夢にも似た、不思議な記憶のお話しは、断片的に倒れる前の記憶をも蘇らせつつあった。国際通りのビジネスホテルで絢香に介抱されながらふいに彼女とキスをしたシーンが脳裏を過る。しかしながら、現実起きたことなのか妄想なのか確信が持てず、僕は聞かれた通りに『326』に纏わるロジックを絢香に説明することにした。

「第二次世界大戦の最後の地上戦。

アメリカ軍が沖縄の慶良間諸島に上陸したのが3月26日です。」

「あ、そういえばそうですね！」

3時26分と3月26日かぁ。アキラは真面目なんだね。私たちの世代は戦争を全く知らないで生きてきたというのに、未だに忘れられない記憶があるのですか？」

「いや、一番楽しいはずだった青春時代、高校生の頃。僕は家にずっと引きこもっていたんです。正確に言えば、心身症を患い高校に行けなくなってしまい、痴呆症の祖母のお世話をしていました。

3月26日というのは僕を引きこもりから救ってくれた友達の誕生日の前日なんです。

彼は両親共に沖縄の人なので、自身の誕生日が3月27日であることに深いカルマを感じていたようです。その後、彼は、もう二度と戦争など起こしたくないと仏道の道へ進みました。僕も先ほど話した元宮という友人も、そんな彼の後ろ姿を覩て決意したのです。どんなことがあろうとも夢を叶えよう！と。

今から思えば、貧乏人と命を失いかけた男と引きこもりの僕のたった三人だけの生涯変わらぬ誓いだったのですが、不思議なことに、貧乏人だった男が先に玉の輿に乗って結婚していき、次に僕が社会復帰をして本来の自分を取り戻し、最後に元宮という友人が音楽の道で羽ばたいていきました。」

「もしかして元宮さんという友人は、ダブテックの日本人の方ですか？」

「ええ、ダブテックご存知でしたか？」

彼とは疎遠になったかと思えば、人生の大事な局面で再会して気づきを与えてくれる、僕の人生のキーパーソンみたいな奴です。一方で、3月27日の友人は、新城というんですけど、距離が近すぎて、ケンカばかりしてしまうんです。」

「ダブテックは私も大好きなアーティストです。新城さんと元宮さんとアキラ、なんだかとっても良い関係ですね！」

「仏法には異体同心（いたいどうしん）という考え方があるんです。異体同心とは、簡単に言えば、身体は別々に存在しているけれど、どんなに離れた場所にしようとも心は同じという意味になります。同じ志を持っているからこそシンクロシティのような現象が起きやすいです。

さっき3月27日の前日のお話しをしましたけれど、ダブテックの元宮と僕は8月生まれで誕生日が一日違いなんです。占いで相性も良いとでます。一方で新城君とは、ないものねだりで真反対の性格になるので相性が悪いと出てしまうのです。

長年、彼とは大喧嘩を繰り返してきてようやく彼の言っている意味がわかりました。僕は僕自身のソウルメイト達と繋がっていくこと。それが世界平和にも繋がっていく。」

「アキラの言いたいことなんとなく解ります。私は、特別な信仰を持ってませんけれど、仏法は科学だと考えています。」

絢香は夜明け前にもかかわらず、どんどんと脳が冴えていくといった具合で僕の話に耳を傾けてくれていた。

ふと、僕の話しが彼女の睡眠時間を奪っていたことに気づき、素直に謝った。

「絢香先生、少し横になった方がいいですよ。布団一枚しかないのなら、僕は地べたにカーディガン羽織って寝ますし。」

「お気遣いありがとうございます。」

でも、私普段からショートスリーパーなんです。だいたいいつもこの時間は、無目的に車でドライブしていますから。」

「占術師なのに、寝ないのですか？」

こんなにも頭脳を使うお仕事なのに少しでも頭休めた方が良いですよ。

あ、そういえば僕、リラクゼーションサロンに勤めてたことがあるんです。

ヘッドスパと足裏マッサージなら得意なので頭とか足が痛かったらいつでも言って下さい。」

「アキラがマッサージ？」

また変なこと考えてない？ 大丈夫？」

絢香は顔をピンク色に染めてそう言った。

「え？ 変なこと、、、？」

僕は那覇新都心での絢香との出会いの時、ふいに腕を掴んで、あなたのことが好きだ、と言った記憶と介抱された瞬間にキスをした妄想なのかよくわからない記憶が混じり合っ
て、沈黙した。

「アキラって、ひょっとして、ラッキーナンバー高い？」

「は？ ラッキーナンバー？
確か、ラッキーナンバーは1ですけど。」

僕がそう告げると絢香は口に手をあてながらクスクスと笑った。

「ラッキーナンバー1だったら、少しでもマッサージお願いしてみようかな～。
でも、その前にちゃんと服着てよね！」

ラッキーナンバーにどんな意味が隠されているのか僕にはよくわからない。一説によると恋愛の傾向性が判るらしい。

マジカルナンバーは護ってくれる数字で、ラッキーナンバーは勝負する時に幸運をもたらす数字として説明している。

しかしながら、絢香の小麦色した肌に少しでも触れるチャンスがきたこと自体、すでに幸運なことなのかもしれないと僕は思った。

感傷的なアキラのリラクゼーション術

僕はスーツケースからアクアグリーン色したサーフTシャツを取り出して着た。なにがどうなってここに寝ていたのかは、全く思い出せないが、下に履いていたショートパンツまで脱いでいたよいだ。慌ててスウェットのショートパンツを履く。

足裏とヘッドスパをして欲しいと絢香に頼まれて、フェイスマッサージもするから簡単に顔だけ洗ってきて欲しい、と僕が言ったら、絢香は簡単にシャワー浴びてくるからリビングルームで待っていてと言い、僕は絢香がシャワーを浴びている間、電子レンジがあることに気づき、これで蒸しタオルが作れることを確認した。冷蔵庫の中には水しか入っていないことに気づき、僕は自動販売機くらいあるだろうと思い絢香にバレないようにこっそり外に出た。

朝焼けまでにはまだ早いが、見上げた、星々の輝きが今にも消えてしまいそうなくらい儚く映った。琉球王国は物理的にも地上と天までの距離が近いゆえ、今にでも星の一つくらい簡単に掴めそうだと錯覚してしまう。

中国やアメリカに支配されてきた複雑な歴史ですら琉球民の心を分断することはなかった。あるがままを受け入れる強さ、しなやかさ。リラクゼーションの施術をするにはこれ以上ない最高のロケーションかもしれない。

僕はさっそく自動販売機を見つけることができ、さんびん茶を2つ買った。

部屋へ戻るとシャワーを浴び終えた絢香がリラックスモードの服に着替えて待っていてくれた。

「アキラもシャワー浴びたら？」

絢香は悪びれもなくそう言った。

「手は洗うから心配しなくても大丈夫だよ。」

今ここでシャワーを浴びてしまったら僕の方まで変な気分になってしまいそうだった。癒し系に見えるらしいけれど、一応、一人の男なのだ。

「ねえ、仰向けとうつ伏せどっちになればいい？」
絢香はマジカルカラー緑で癒し系の雰囲気を持つ。お互いに緑同士だからすぐに遠慮しない仲になれるのかもしれない。

「足裏から全身やってあげるからまずはうつ伏せになって。でも、その前にさんぴん茶買って来たから少し飲んで。身体の巡りが良くなって施術効果あがるからさ。」
そう言って布団の中で足を横に崩して座っている絢香にさんぴん茶を手渡した。

「ありがとう！ わざわざ買ってきてくれたんだ。アキラって結構ちゃんとしてるセラピストなんだね。私も趣味でマッサージ学んでるから後でやってあげるね！」

「絢香先生がマッサージ？
有難いですが、今日は遠慮しておきます。たぶん、全身マッサージしてヘッドスパとフェイスやっている間に寝ちゃうと思います。」
セラピストという職業柄、多くの身体に触れてきたのでなんとなく予想はついている。普段からショートスリーパーだったらなおさらやりがいもある。

「じゃあうつ伏せになればいいのね。
疲れてたら無理しなくていいからね。」
絢香は手を顔の前で交差させて布団にダイブした。

絢香の足裏のツボを押すと、パンパンに張っているようで、ふとヒラメ筋にオイルを塗ってスローマッサージからはじめることにした。

「絢香先生、とても足がむくんでますね。チラシ配り頑張り過ぎじゃないですか？」
僕はついついサロンのようなリラックストークをしてしまった。お客さんとの距離が遠い足裏マッサージの時には、こうした世間話しをすることで安心してもらうことが大事だ。

「ありがとう。足めっちゃ気持ちいい。
なんだかすでにとろ～んとしてきちゃった…。」
絢香はそのまま夢に落ちていくようなほど小声で囁いた。

無心に絢香の足裏をマッサージしていると絢香は時々、寝息を立てては、寝まいとして、ありがとう気持ちいいよと言ってくれた。たぶんこのままヘッドスパをしたら寝るだろ

うと直感し、絢香を仰向けにさせて絢香の額から目の上に優しく蒸しタオルを乗せた。

「じゃあ、ヘッドスパとフェイスやっていきますね。」

絢香にそう伝えるとフェスラインを撫でるようにリンパ節に向けて血流を流していく。絢香はフェイスマッサージをしている途中に完全に寝息を立てて寝てしまった。一通り施術し終えた僕は、絢香には気づかれぬようにスーッと組んでいた足を抜いて立ち、キッチンに向かった。

ワンルームの部屋とはいえ、物が少ないから仮眠部屋には十分なほど広く見える。僕は換気扇を回してタバコに火をつけた。絢香の発言から推測すると KAKO や家元とサンセットを観た後、那覇新都心店へ向かいそこで僕は倒れたのだと言う。アコースティックギターやらスーツケースやらをどうやって運んだのかすら謎のままだ。

僕はアコースティックギターを取り出して練習中である黒いオルフェという楽曲を弾きはじめた。朝、もう二度と帰ってこないかもしれない恋人を想いながらギターをつまびく、という女性心理を歌ったボサノバのスタンダードナンバー。

絢香とは付き合ったとしても、うまくいかないかもしれない。なぜだか、黒いオルフェを弾き語っていると、そんな心境になっていた。自由を求める僕は、女性をその気にさせておいてある日突然いなくなる。僕だって本当は結婚して幸せになりたいのだ。けれども、女性は結婚してしまえば二度と連絡することはできない。女性からモテる訳ではなく、ただ、僕の方から女性が好む趣味に飛び込んでいっただけの話だ。

うまく弾けない、黒いオルフェを弾きながら、僕は朝焼けを待っている。
絢香とこのまま身体を重ねてしまえば、このはっきりとしない感情が少しは楽になるのかもしれない。

KAKO と観た美しいサンセット。

絢香と過ごしたかけがえのない時間。

どうして神様は二人もの素敵な女性を同時に巡り合わせたのでしょうか。

運命の歯車は止まることを知らない。

夢の中で逢えたら

絢香の柔らかな小麦色の肌に引き寄せられるように密着したい衝動に駆られた僕は、アコースティックギターを放り投げ、読みかけの本を2冊積み上げてそれを枕かわりにして絢香の側で彼女に甘えていた。

絢香は薄いタオルケットを被っていて、寝返りする様子もなく、仰向けのまま、スースーと可愛い寝息を立てて寝ている。僕は絢香に気がつかれないように彼女の柔らかなような胸を触った。絢香はそれでも気がつかない。ふとココナッツオイルの薫りがして、彼女のショートヘアの髪の毛を優しく撫でた。

女心と秋の空とは、移り気の早い女性の心理を指してよく使われる言葉だが、暦の上ではもう秋真っ只中に出会った僕たちの恋愛模様をスクリーンに写し出すように、絢香とKAKOが醸し出す知的で少しだけエロスを感じさせる雰囲気、恋愛下手な僕の心模様を表現する言葉としてぴったりハマる。

昨夜、那覇新都市で倒れた記憶は全く思い出せず、妄想なのか夢なのかよくわからない、絢香とキスをした映像が脳内を過ぎっていく。夢ならば醒めないで欲しい。隣で眠る、絢香のプクリとした唇を覗ながら、僕は下半身に血が流れていくのを抑えきれず、絢香の腕にピタリと寄り添って、キスしたい衝動を我慢していた。

明日の予定などない。突然倒れてしまった僕に、任せてもらえる仕事などあるだろうか。インターネット店のお仕事をしていれば、こんなにも、恋愛の悩みに煩わせられることもなかったはずだ。

占術師として、多くの恋愛の悩みにアドバイスしてきた。その多くは、出会いがないなどの簡単な悩みだった。そういうお客様には、マジカルカラーとマジカルナンバーを勧めただけでなく、運気のアがる場所へ行くこととパワーストーンを身につけることをお勧めすることになっている。パワーストーンを身につけていれば、自己肯定感が上がり、目標も明確になり、魅力が引き出されていくから、受け身の女性だったとしてもアプローチされる確率が高くなる。

しかしながら、自分の恋愛の悩みといえば、物語の世界に生きているかのような、誰にも相談できない、僕だけの秘密の二重恋愛なのだ。世間一般で言えば、オフィスラブなどうまくいかないに決まっている。もしくは、結婚する意思があるのならば、どちらかが職場を辞める選択をしなければならない。

自由とは責任を伴うもの。

会社員時代と個人事業主では、責任の重さとリスクの取り方が全く違う。会社員であれば、責任は会社や上司やとってくれる。個人事業主であれば、どんな失敗をしたとしても、全て自分に跳ね返ってくる。その分だけ、一般の会社員よりは自由度が高くて、成功した時の喜びも大きい。

手相には小指下から手首に伸びる線を起業線と呼び、僕の手相にも、生まれながらにしてこの起業線が出ていたのだ。まさか、セラピストと占い師の2足のワラジを履く運命になるとは予想していなかった。しかも、僕は将来的には小説家になりたくて、人とは真逆の生き方をしてきたのだ。今更、引き返せはしない。

僕が空想に耽っていると絢香は寝返りをして僕に背を向けてしまった。その小さな背中を少し摩ってあげると絢香は子猫のような笑みをしてみせた。

寝ている時に見る夢は、不思議なくらいに、奇想天外なストーリーで楽しませてくれる。僕は寝る前が一番幸せな時間かもしれない。現実生きていれば嫌なことも多いが、寝ている時だけは嫌なことも全て忘れて、亡くなった人達とも会うことができる。

僕はよく眠れない時には睡眠薬を飲むことにしている。心療内科へ行き、睡眠薬をだして欲しいと頼めば、大抵の医者は処方してくれる。精神科の医者は、薬を処方するのが仕事だし、学生時代も薬の勉強が大半だったと言う。だから、悩みを聴いて欲しいだけの人は、心理カウンセラーか占い師のもとへやってくる。どうせ保険が効かないのだから、カウンセリングでも占いでも好きな方を選べば良い。

ただし、心理カウンセラーは答えを出してはくれない。アドバイスすらしないカウンセラーの方が多いだろう。答えはクライアントさんの心の中にしかないことを知っているからだ。しかし、占いならば、エンターテイメントの延長線上で気軽にアドバイスすることができる。客観的に観て、うまくいっていない方の逆をやればいい話しなのだが、うまくいっていない人に限って、占いを嫌う傾向にある。成功している人はすでに占い通りに生きている。それはその人が自分の心に正直で素直だったからだ。

だから、僕も寝れない時には医者 of 言うことを聴いて、睡眠薬を飲むことにしている。

僕は絢香から離れて、スーツケースの中にあるポーチから睡眠薬を取り出して水で飲んだ。

ふとタバコが吸いたくなりさんぴん茶をあけて飲みながら遠目で絢香を眺めていた。窓から差し込む光がタバコの煙を照らしだし目が涙で濡れた。

絢香とくっついて横になっている時の幸せ。まだ出逢ってから数日しか経っていないのに、アキラと呼び捨てにされた時の嬉しさ。さっき絢香の胸を触ってしまった自分の左手を覗いた。この世のものとは思えないほど柔らかな感触だった。

タバコを吸い終わると産まれたての赤子のように絢香の隣で寝ていた。絢香の背中に顔を押し当てて、甘えているうちに睡眠薬が効いてきた。絢香と身体ごと心ごと、一つになりたい。

僕は薄れゆく意識の中で夢の中で出逢えることを願った。

未知の道をゆくための羅針盤

白いレースのカーテンの隙間から陽が差し込む。さっきまで観ていた景色が全て夢の中の出来事だったことに、僕は何回か寝返りを繰り返してから気が付いた。寝ている間にグシャグシャになったであろう髪の毛に触れてようやく現実世界の記憶が蘇ってくる。昨晚、寄り添うように寝ていたはずの絢香の姿が消えている。

ふと寂しい気持ちに襲われた僕は、日課である『夢日記』でも記しておこうかと思い、薄れゆく記憶を辿りながらそれを脳内で簡単にまとめあげた。その時、遠くの方からこんがり焼けたパンの香りがしてきたのである。振り返ってキッチンへと視線を向けると、家着のまま慌ただしく動く絢香の姿が見えた。僕はゆっくりと上半身を起こして寝起きで霞んで見える眼をこすりながらキッチンへと向かった。

そして僕が目覚めたことにも気づかずに一生懸命に調理している絢香に言葉を投げかけた。

「おはようございます、絢香先生！
美味しそうな匂いしますけど、何を作ってるんですか？」

いきなり背後から話しかけられた絢香は一瞬驚きの表情をみせながら「おはよう！」言った。

「アキラが目覚めたら朝ご飯食べるかなと思って簡単にコンビニでパンと卵買ってきたの。」

絢香はフライパンを片手に持ちながら顔だけを僕に向けて満面の笑顔を見せた。

「アボカドのサラダもあるんですね！
マジで美味しそう！ありがとうございます！」
僕は感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

「すぐできるから座って待ってて！
あ、できるならば布団だけ畳んでおいて！」

「了解です。絢香先生とのモーニングコーヒー楽しみにしてるね！」

僕はリビングルームに戻ると布団を畳みながら、アコースティックギターだの読みかけの本だのですっかり散らかってしまった部屋を眺めながら、一夜にして自分の部屋みたいになってしまったな、と反省しながらも、結婚生活ってこんな感じなのかな？ と想像しながら、一人絢香にばれぬよう、心の底から込み上げくるニヤニヤを隠すため髪の毛で前髪をつくりながらうつむいた。

「アキラ朝食できたよー！ 取りに来てー！」

朝食は、ベーコンと目玉焼きとサラダのプレートに、トーストが2枚、アボカドとトマトのサラダ、コーンポタージュなどでテーブルいっぱい埋め尽くされた。朝食を食べながら雑談をしているとまるで結婚間近のカップルみたいに思えてきて幸せを感じる。

「一流ホテルも顔負けのモーニングですよね！」

パンを頬張りながら僕は絢香に言う。

「沖縄だとだいたいスパムとエッグスの組み合わせが多いけれど、私のお母さんは台湾人だからあまりスパムの缶詰は食べないのよ。」

「あ、そういえば絢香先生ってハーフでしたね！」

うちは母親が沖縄出身だしスパムも親戚の叔母様が定期的に送ってくれるから馴染みありますよ！」

「私自身はスパムけっこう好きなんだけどねー。」

父親は混じりっ気なしの100パーセント沖縄人だから子供の頃から沖縄料理とアメリカ料理で育ってるから。」

「世代的にはうちの母親と同世代ですかね。」

確か、沖縄は1972年頃までアメリカ軍の統治下にあったからアメリカの影響は大きいみたいですね。」

「そうみたい。確か、一ドル360円の時代にドル建てでお給料貰ってたらしいから内地の人よりかは得してた人も多いみたいね。」

「まあ、朝鮮戦争の特需とかもあって、その後、日本は高度経済成長を成し遂げたみたいですね。でも、ベトナム戦争の時も沖縄からガンガン戦闘機が離発着してたらしいから、日本は無条件で平和な国であったみたいな意見は沖縄の人からしたら失礼だと思っ
てますよ。

ところで台湾はどうだったんですかね？」

「うちの母親も若くして台湾から沖縄に嫁いできたけれども、あまり故郷のことは話したがらないから解らないのよ。台湾は親日家が多いことで知られているけれども、あくまでも、昔から沖縄と台湾の関係が良好だったことが大きいみたいよ。琉球民は貿易が上手だし他国からは誠実で信頼されてきた歴史があるからね。」

「朝鮮民族と琉球の文化交流も盛んだったみたいですよ。まあ、元を正せば日本も、漢字や仏典や建築技術など大陸から輸入して栄えた歴史があります。今は政治的な意見は対立してますけれども、民衆の文化交流までは制限できないですね。」

僕は絢香との話に夢中になっていて気がつかなかったが、時計の針はすでに10時を過ぎていて、今日の予定が気になりはじめていた。昨晚、那覇新都心店で突然倒れてしまったという僕は全く記憶がないままにこの仮眠部屋で寝ていた。一応、個人事業主なので東京に帰っても幾らでも仕事はあるが、占術の師匠（メンター）である佳子（よしこ）先生からの依頼で家元のお仕事を最優先するように言われていたことも思い出した。原因がわからず急に恐怖心に襲われた僕は、それとなく絢香に訪ねてみることにした。

「絢香先生。昨晚は急に倒れてしまったみたいで済みませんでした。佳子先生からは家元のお仕事を最優先するように指示を受けていますけれど、果たして、僕に任せて貰えるお仕事などあるでしょうか？」

絢香は僕の顔つきが急に真面目になったことが可笑しかったのか、クスクスと笑いながら、「心配しなくても大丈夫！」と言ってコーヒーが入ったカップを口に持った。ふうーっと深呼吸をしてから少し小悪魔な視線を向けて彼女は話を続けた。

「アキラは心配性なんだね～！ 大丈夫だから！

東京には数えるくらいしか占術師がいないんだし、沖縄だって同じことだよ。

発送作業してくれるアルバイトの子たちがいてくれるから成り立っているけれど、残念ながら、彼女達はアルバイトと割り切っているから、鑑定はできないので、人手不足

なのよ。

それにうちはインターネットの売り上げが一番大きい会社だからアキラは本来、沖縄にいたとしても東京にいたとしても基本的にやることは変わらない。

ただ、リアル店舗で学んで欲しいのは、商品の値段を覚えたり写真の撮り方をマスターしたりしてさ、

何年後かに東京にリアル店舗構えた時には、アキラにマネージャーとしての役割を担って欲しいからだと思う。過去の経験から言わせてもらえば、期待されてる人材というのは、色々な部署を経験させられるものよ。アキラが成長した先にうちの会社の未来が見えるの。どうかな？ 私の意見？」

絢香がバーっと一気に話してくれた中で、僕はその家元や佳子先生や絢香の期待とやらに応えられる人材ではないであろうことを悟ってしまった。僕は絢香の凛とした瞳を見つめ返して嘘を言おうとしている自分に少し嫌気が差した。が、思いつくままに東京進出後の未来を語り合うことにした。

人は40歳にして惑わず、50歳にして天命を知る、とは孔子の言葉だっただろうか。

僕は8月27日の誕生日で35歳になったばかりだ。

まだまだこの先も長く続いていく未知の道を渡っていくには、羅針盤が必要だ。

絢香との対話はミステリアスで楽しいが、一緒に船に乗ってしまえば、すぐにでも迷子になってしまうかもしれない。そう強く感じるのであった。

現代建築と風水と数字に隠されたシークレット

ブレックファーストを食べ終えた僕たちは、コーヒーを飲みながら、やがて来る風の時代における未来について語りあうことにした。

「絢香先生、古典風水（こてんふうすい）ってご存知ですよね？」
僕はコーヒーにミルクを入れてスプーンでかき混ぜながら絢香に尋ねた。

「うちの占術で使われてる方位学のこと？」
絢香はよく解らないと言った感じで眉間にシワを寄せて聞き返した。

「まあ、方位学を含む、現代建築などにも取り入れられている環境科学のことです。」

「私、風水はよく解らないけれど、東から太陽が昇り西へ沈んでいくという法則は変えられない。
人間にとって住みやすい環境というのも宇宙の法則に則ったルールがあると思うよ。」
絢香はてっきり直感型タイプだと思っていたがたまに的を得たことを言う。確かに東から日が昇ることは科学の力を持ってしても変えられない。

「ええ。確かに太陽が東から昇ることも宇宙の法則ですし、どんなに寒い冬だったとしても必ず、春には桜が咲きます。風水とはルールなのです。」

「確か、江戸時代に栄えたのも、東に東海道があり南に港があり、西側には川、そして北風が吹く冬には寒風を避けるための山があったことで栄えるための条件が全て揃っていたらしいよね。商人たちは貿易で江戸にやってきて稼いでも潮の関係で帰れないから江戸の城下町で金を落として、北風が吹く冬には疫病を恐れて帰っていく。そのため、地形が維持されてきたので今でも東京は日本で一番の経済都市であり続けている。」
絢香はパーソナル智（ち）の研究者タイプゆえ、博学で色んなことを知っているみたいだ。

「実は、横浜にもたくさんの方友がいますが、設計事務所の社長を父親に持つ友人から建築やデザインのお話を聴かせてもらう機会があって気がついたのです。その子の父親は職業柄、風水を学んでいたらしくて、同じ時期に独立して設計事務所を構えた友人達の会社が年々倒産という憂き目にあっていく中で、最後まで設計事務所を存続できたらしくて。彼女のお父さんが言うには、ただ単に、運が良かっただけだ、と。」

「確かに、一級建築士の資格を持つ人はたくさんいるからね～。風水を学んでいたことが他とは違うユニークポイントで差別化をはかれたのが大きいような気がするよねえ！」
絢香は占い師だから当然のように宇宙の法則があることを信じているだろう。しかしながら、一般の多くの人も風水は科学だと信じているのに、誕生日から人間の性質を読み解く占術の話しになると怪しいと思われてしまう。その流れをつくってしまったと思われる一部の占い師を論破しなければならない。

「そのお父さんはお仕事柄、若くして、風水を学ぶ必要性を感じていらしいのですが、もう何年も前に、GDPで中国が世界で2番目の経済大国になりました。風水を取り入れたホテルだと中華系の観光客からは喜ばれます。
例えば、僕は鍼灸整骨院に勤めていたこともあるのですが、東洋思想は、気の流れを重視することを教えて貰いました。一流ホテルに行けばすぐに気づきますがピアノが天に舞うような吹き抜けの空間であったりシンプルに空気が澄んでいてまるで高原にいるかのようなリラクゼーションを与えてくれています。」

「気の流れ。。
目には見えないけれど重要だよね。」

「もしも、この先の近い未来、新型の悪性ウィルスが蔓延する時代が来たとしますよね。たぶん、マスクをする習慣のない人達は、ウィルスに感染するリスクが高くなってしまいうので死んでしまうかもしれません。
これは極端な例でしたけれど、人類史は疫病と戦ってきた歴史でもありますので大きな時代の転換期である現在から未来にかけては歴史を揺るがす大事件が起きたとしても不思議ではありませんよね。」

「確かに、安定が一番とされた地の時代から変化が激しい風の時代へとシフトされると西洋占星術の先生が言ってました。時代の黎明期というのは、新しい幕開けにふさわしい形でスタートするべきです。
アキラが言ったように一時的かもしれないけれど、新型のウィルスが流行って多くの命が失われる未来がやってくるかもしれない。でも、それはあくまでも平和な世界へシフ

トするためには必要不可欠な出来事かもしれないよね。」

「信じる信じないは別として、僕らが信仰している日蓮（にちれん）の生涯でも予言がありました。

法華経を信じないのならば、内戦と他国からの侵略戦争が起きる、という予言だったのですが、事実、内戦が起きた後に、モンゴルが攻めてきて日蓮の予言は的中したのです。日蓮はむやみやたらに幕府に忠告したのではなくすでに飢饉や疫病で亡くなっていく民衆の姿を法華経という經典に照らし合わせてまだ起きていない2つの大難が起きると確信したのです。」

「日蓮って鎌倉時代に法華経を広めたお坊さんよね。そんなに凄い僧侶だったんだねえ。知らなかったよ。」

「日蓮は運命については変えられるものと変えられないものがあると言っています。大きな運命と小さな運命の二つの両輪があって、大きな運命それ自体は変えられないのだとも言っています。この話しの結論は、宿命転換（しゆくめいてんかん）と言って、例えば、今世で罪を犯した悪人でさえ法華経を行じていくことで今世のうちに必ず成仏できる、ということで帰着します。ですが、大きな運命それ自体変えられないという思想はどこから来ているのかということが重要で、人は何回も生まれては亡くなり、また生まれてくるという3世永遠の生命であることが考え方の基となっています。」

「占いのお客さんも当たり前のように宇宙の法則や永遠の生命を信じている人が多いよねえ。

私も生まれ変わりは信じているよ！

前世のことは解らないけれど今世で強運に恵まれていることから思えば、前世では徳を積ませて貰ったような気がするよ！」

「生まれ変わりを信じている人が増えたのは良いことだと思います。もしも、人生一度キリだ、と勘違いしてしまったら人間は破滅的な行動をとると思います。先程からなんでこんな話しをしているのかと言うと、東京進出後の未来について僕なりに考えてみたのですが、今のままでは、東京に実店舗を構えるのはリスクだと思っています。だから、残念ながら、僕は絢香先生の期待に応えられる人材にはなれそうにありません、すみません。」

僕は東京進出後の未来を語る上で『時』を待つことが重要だと考えている。遠回しに絢香に風水と建築や東洋医学、哲学について語った。それは、占いという性質上、目には見えない運気の流れを読み解くことも必要だがこんな非科学的にも思える話しを理詰め
で語るには、多角的な視点で観なければならない。必然的に話しは永遠に感じられるほど長くなり、僕はコーヒーを口にした。

「アキラが言いたいこと、なんとなく理解できる。

東京は人口が多いから占い師としての需要はあるかもしれないけれどパワーストーンを扱うには家賃が高すぎるからリスクってことよね。それにアキラの予言が万が一的中したとしたら、リモートワークが主流になり外出するのも規制がかかるかもしれない。」
絢香は僕の言いたいことを端的にまとめてくれた。

確かに、家賃が高いのもその通りなのだが、ネットショップでうまくまわっている以上は、わざわざ東京にリアル店舗を構える必要性が今はないのだ。西洋占星術を少しでもかじっている人ならば大きな時代の転換期こそよくよく注意して時を見守るしかないと言うだろう。だからインターネット経由で広く世の中に占術が広まっていくことの方が重要だと考えている。

「それもありますけれど、僕個人の問題でもあります。僕は店舗に縛られるのが苦痛です。

毎日変化があるノマドライフを捨てることは考えられないのです。実は、琉球占術以外にも学びたい占術があるのですが、今使用している宿曜占術（しゅくようせんじゅつ）以外にもマヤ暦や四柱推命（しちゅうすいめい）、算命学（さんめいがく）を学んでみたいのです。」

「マヤ暦に四柱推命に算命学かあ〜。

面白そうだね！ ちなみにアキラはマヤ歴では kin いくつ？」

「kin111 です。

たまたま書いた自叙伝が A4 の紙で 111 枚になってしまったのでご縁に感じていますよ。」

「えー！

111 なの？ ゴロ目で縁起いいじゃん！」

絢香は目をまん丸くしてそう言った。

確かに、自分自身でもまさかゼロ目のナンバーに生まれていたなんてことは嬉しい反面、できるならば隠しておきたい事柄だった。手相を紐解けば天下取りの相と言われ、マヤ

暦で観ればゾロ目のナンバーを持ち、さらに四柱推命で占っても弱点が見当たらないほど良い星の生まれであることを知ってしまった。男は自己承認欲求を満たしたくてどんな些細な事でも褒めてくるキャバ嬢にハマっていくらしいが、僕にとってはそれが占いというだけの話なのだ。占いに行けば大抵ベタ褒めしてくれる。だから、一部の悪質な占い師がわざわざお金を払ってくれるお客さんに説教をすることが信じられない。

「絢香先生、そう言えば、今日は佳子先生が出張から帰ってくる日ですね。また面白いお話し聴かせて貰ったらシェアさせて下さい！」

絢香はコーヒーを啜りながら左手でオッケーというサインをつくってみせた。細長い顔たちのKAKOに比べて、丸顔の絢香だが全体的に小柄なため顔が小さく見える。彼女の長い睫毛や凛とした瞳を覗いていると沖縄独特のゆる〜く始まる朝ですらお洒落な恋愛ストーリーの中に生きているような錯覚に陥ってしまう。コンポからはJAZZミュージックが流れている。練習中である黒いオルフェはまだうまく弾き語れないのだが、若者が多い那覇新都心店であるならば、流行りのJ POPでも弾き語りながら、絢香と共に楽しくお仕事ができそうだ。

この先、KAKOや絢香と過ごす日々の中で僕は青春時代へ戻ったようなトキメキを感じることになるだろう。それはまるで彩りの占術師が織りなすお洒落なラブコメディ。純愛と呼べるほど一途にはなれない。琉球王国はまだまだ夏真っ盛りといった具合でフレッシュなオレンジジュース片手に海辺で絢香とこのままずっと語りあっていたいし、刹那的な瞬間瞬間に宿るこの想いを大切にしていきたいと願うのであった。

ソアラとレヴィン

8月30日15時PM、家元の指示で絢香が店長を務める那覇新都心店にて店舗研修を受ける運びとなった。店舗までは絢香が使用している従業員用の仮眠部屋から歩いて15分で行ける距離らしい。しかし、絢香は車好きのため海岸線を少しドライブしてから出勤しようと言いだした。

今日は東京から占術の師匠（メンター）である佳子先生が沖縄へ帰ってくる予定らしい。家元とKAKOは佳子先生を迎えに那覇空港へと向かっている。

たぶん、お昼には合流してランチを食べながらミーティングをしているはずだ。佳子先生は僕よりも4歳年上なので今年の12月で39歳になる。最初は家元の奥さんかと思っていたのだけれどどうやら色々面倒くさいので二人の関係性については質問しない方が身の為だとティンバからアドバイスを受けている。年上の女性に強い憧れを持つ僕は35歳になったばかりの今でも子供はいらないから佳子先生のような知的な女性と結婚したら毎日刺激的で楽しいだろう、と簡単に考えている。

ちょうどお昼を過ぎた頃に絢香はドライブに行こうと誘ってくれた。朝食が中途半端な時間になってしまったせいもあり、どうせならばドライブへ出てから外でランチを食べようということみたいだ。

絢香の愛車はトヨタのソアラ。ディーラーの知り合いから安く譲って貰ったらしい。しかしながら軽自動車が当たり前の沖縄県民からしたら十分に高級車であることは間違いない。僕は車には詳しくないのだが車好きの友人からは「アキラはやっぱりレビンだろ？」と言われることが多い。たまたまその時に、ドイツ出身の社会心理学者である『クルト・レヴィン』について研究していたので『レヴィン』というキーワードを持つ人物達とはシンクロシティを感じていたのである。

絢香はソアラで海岸線を走りながらこの先には有名なタコス屋があるのだが、沖縄県民の口コミナンバーワンの沖縄ソバ屋とどちらが良いかと尋ねてきた。たまにはタコスも悪くないと思いながらも、朝食がトーストだったので、僕は沖縄ソバ屋がいいと告げた。

絢香はドライブ中には音楽をかけるタイプではないようだしこちらから話しかけても上の空という感じだったので、僕はスマホを取り出し日記用のアカウントに溜め込んだ記事を読み返していた。

すると、脳内で曖昧になっていた記憶が蘇り、すぐさまインスピレーションを受けて、簡単に記事にまとめることにした。

一琉球4日目・58号線ドライブ中の気づきー

時間とは本当に存在するものなのだろうか？

太古の人達は、星々を観察する中で、暦を考え出した。太陽が昇る方角を東と定め、移動しているように見える星と全く動かない星があることに気づき、春夏秋冬の自然の法則に逆らえないことを悟った。

数学者である『ピタゴラス』は、紀元前に幾つもの法則を発見した。そのうちに、人間の一生にもある一定の法則があるのではないかと仮定して、ピタゴラスは数秘術の理論を打ち立てた。

時間という概念も人間が作り上げたものだ。

宇宙の法則は数字で割り切れるものではない。だから4年に一度、閏年をつくって暦を調整している。

沖縄へ来て地平線が目線よりも高い位置にあることにすぐ気が付いた。地球はまるく出来ているのだ。

日本に朝がくれば真反対に位置する国は夜になる。

現代社会においてはこの当たり前に思えることすら認められなかった時代がある。コペルニクスが地動説を発見するまでは太陽が地球の周りを動いていたと信じられていた。

科学とは再現性の高さだと定義する。

誰がやっても同じような結果になることを科学だと定義するならば、仏教は科学なのだ。

仏教では量子力学の法則を読み解き、人が人と縁することで幸せにも不幸にもなると説

いている。

すなわち、釈迦は思想が一番重要だと悟ったのだ。

時間という概念があるおかげで僕たちは遅れることなく会社へと向かうことができるし、集合的無意識があるおかげで平和に暮らすことができている。

しかしながら、自由を手にした人達にとって、時間という概念は果たして本当に必要だろうか？

人は一人では生きていけないのは当然のこととしても、人間が狩猟で生き延びてきた時代には、時間という概念はもっと曖昧なものだったに違いない。

そんなに毎回毎回、都合良く獲物が現れるとは限らない。例えば、12時PMに必ず昼飯が食べれる安定した職種ならばまだしも、いつお客さんが来るかわからない占い師やセラピストであるならば、空いた時間にさっと昼飯を食べることは当たり前だし、昼飯にありつけない日だってある。

人は農耕によって安定した暮らしを手にすることが可能になったらしいが面白いことにそのせいで穀物の奴隷になったと考える人もいる。

話しは変わり、小説家で短命の人が多いのは昼も夜も関係なく思いついた時にいつでも仕事ができるのが原因の一つらしい。しかも新人ならば原稿料が400字詰め原稿用紙一枚で3500円から5000円という厳しい世界だ。本当に書くことが好きでなければとてもじゃないけれど生活していられない。

しかしながら、僕は人間が作り上げた時間という概念から解放されたいのだ。野生の本能のまま行動し、そこで得た貴重な体験を小説にする。

大人と呼ばれる年齢になった現在、こんな夢物語をまともに聞いてくれる友人は音楽で生計を立てている幼馴染の元宮くらいだろうか。

人は簡単に小説家になりたいというが、果たして、

誰にも相手にされない失意の10年間に耐え切れるだけの覚悟はあるのだろうか？

幸いなことに僕がテーマと定めた占いには一定数のニーズがあるみたいだ。解る人にだけ届けばいい。

元宮、新城、僕は信じている。

何もなくて引きこもっていたあの頃、それでも僕の中にある無限の可能性を信じて励まし続けてくれた心の友よ。

現在は理解できないこともあるかもしれない。

けれども、生涯変わらぬ誓いを決して忘れてはいない。夢、叶うその時。例え逢えないほど遠くにいたとしても祈りの中で届けたい。ガムシャラに不器用に生きてきたこの人生にいつかの悔い無し、と。

—琉球4日目・友に贈る詩（うた）—

僕は気づきという名の詩を書き上げると、心の中に熱いものが込み上げてきた。絢香はカフェラテを片手にハンドルを握り車を走らせている。こうして出勤前に気づきを書き上げることは占術師としてとても大切な時間である。

「ブログ書いてたの？」

ふと絢香はミラー越しに尋ねてきた。

「ブログのような日記です。いちおう小説家を目指しているので気づいたことをネタ帳に書く習慣があるんですよ。」髪の毛をかきむしりながら返事をすると、絢香は「小説家目指してるの？」と意外そうなりアクションをしてみせた。僕はてっきり絢香には話していたように勘違いしていたがまだまだ話してないことがたくさんあったようだ。

「まあ、小説家になるのは厳しいけれど占い師から小説家になった人は結構いるみたいだよねえ。」

「ええ。占い師って他人の人生をたくさん知ることができるじゃないですか。一般人がリアルな人付き合いの中で交流できる人数って限られてくると思うんです。占い師だったらお金払ってわざわざ向こうの方から足運んできてくれる。」

「ああ、なるほどね！ それに普通に悩みなく生きている人達の話し聞くよりは、よっぽど占い師の方が面白い話し聞けるしねえ。」

「人はリアリティのあるフィクションを好むらしいので占い師としての経験は無駄にはならないと考えてます。例えこの協会が詐欺師集団だったとしても、小説家自体が詐欺師みたいなものだと思うので十分に考慮した上で占い師になりましたから。」僕は正直に言うと絢香は苦笑いを浮かべた。

「まあ、小説家が詐欺師というのはあくまでも適正の問題よね。普通ではあり得ない話しをもっともらしいことを言って信じ込ませるとい点では新興宗教の教祖にも向いていると言われてるよねえ。」

絢香は本当に博学の人らしく小説家の適正を見抜いているみたいだ。

「そうなんですよ。小説家の適正が他にあるとしたらその二つは間違いなくあるでしょうね。」

でも、人が欲しがるコンテンツを作れること自体が価値を生むのであって、わざわざ、不幸自慢みたいな小説に価値があるとは思えない。その点では、家元は小説家になろうと思えばいつでもなれる素質持ってると思いますよ！ まあ、儲からないから絶対やらないだけだと思ってます。」

「家元が小説家かあ〜。じゃあぶっちゃけ詐欺師だっていう可能性だってあるよね。」

絢香は冗談なのか本気なのか解らない発言をすると信号待ちで車を停車させている間、運転席から窓の外へと視線をなげかけた。

サイコパスというキーワードがネット上で流行っている。サイコパスは魅力的な外見を持ち話しが面白くて天才的な頭脳の持ち主だが、平気で嘘をついたり人を傷つけることにもなんの罪悪感も持たないという特徴を持つ。占い師の世界にはサイコパスがたくさんいると言われている。騙されるかもしれない、そんな危険ですら楽しめるような自分自身のことを馬鹿だと思う反面、少しだけ誇りに感じている。

ヤクザが怖くて警察官ができるか、というならば、詐欺師が怖くて小説家になんかなれるかという格言があっても良いだろうと思うのであった。

もしも昔のポエムを見られたら。

絢香が運転するソアラの助手席に乗りスマホで地図を見ていた。どうやらすでに僕の母親の故郷である浦添市（うらそえし）まで来ているようだ。絢香がドライブ前にコンビニで買ってくれたカフェラテを飲みながら親族への挨拶まわりはいつくらいにしようかと考えていた。ちょうどその時、絢香は右にウィンカーを出して58号線から学園通りへと入っていった。

「アキラこの道をまっすぐ行くと浦添市民球場があるの。すぐ近くには緑がたくさんある大きな公園とかもあってとても静かでお気に入りの場所があるんだあ〜。」

「さすがマジカルカラー緑同士ですね！
僕も行ってみたいです。」

「プロ野球の球団もシーズンオフにはキャンプ地にしてるから近くには美味しい沖縄ソバ屋さんもあるよ〜。この時期はけっこう穴場かもしれない。」

「絢香先生のおすすめの店があればそこ行きましょう！」
絢香は了解といった感じで片目をウィンクさせた。
母親の故郷だから親族もたくさん浦添市に住んでいることは絢香には内緒にしておこうと思う。沖縄の人に母親の出身地と旧姓を教えるしまうと勝手に金持ちだと勘違いされてしまう恐れがあるからだ。

パイプラインを通り過ぎて、緑が揺れる公園沿いを少し走ると絢香はこじんまりとした沖縄ソバ屋の前で車を止めて僕に降りるように指示した。どうやらバックミラーの調子が悪いようなので車の後ろを観てあげることにした。
絢香がソアラをパーキングに入れて車から降りてくると、腕を天高くあげて少し背伸びをしたり腰を左右に捻ってから「さあ入ろ！」と店内へとエスコートしてくれた。

店内に入ってみると意外なほど広く感じてしまったのはランチタイムを過ぎてお客さんが一人もいないせいもあるだろう。カウンター席が約8席ほどに四人がけのテーブル席が4セットあり奥には畳が敷かれた座敷もあるみたいだ。

絢香は先にドリンクだけ注文しようかと提案してきたので僕は烏龍茶、絢香はコーラをオーダーした。

そして、絢香は僕がメニュー表を見ている間に、僕が書いた自叙伝を見たいと言うので慌ててポケットからスマホを取り出して電子書籍のURLをコピーしてLINEで絢香に送った。

「私はもうメニュー決めてあるからゆっくり選んでね。アキラの自叙伝見ながら楽しく過ごせそうだよ〜。」

絢香は僕の文章力を買いかぶり過ぎている。というか、自叙伝なんて大袈裟なことを言っているが、それは兄貴へ供養した111枚に及ぶエッセイのようなものであり、電子書籍に発表した作品は原本を基にかなりライトにしあげたつもりだ。だから、たぶん絢香も文章力が中学生並みと言って笑うだろう。

しかしながら、原本はかなり重い内容に仕上がっているのだ。笑わせるつもりが全くなくて素で笑いがとれる人のことを天然ボケな人というがまさしくぼくはそのタイプに該当する。

「ちょっとアキラ！ なによこれ！」

メニュー表を見てた僕は絢香がプンプンとしてクレームをつけていることを不思議に思った。

「なにかマズイことでも書いてありましたか？」

絢香が僕の自叙伝を読み始めてからまだ数分しか経っていない。それにしてもクレームをつけてくるスピードが早すぎる。

「学校では人気者だったみたいじゃん！」

バレンタインデーに女子からチョコ貰ったり、告白しかけられたり！」

「仕方ないじゃないですかぁ〜。事実なんだから。

それに、ちゃんとその後すぐに引きこもりになって地獄をみるから安心して下さい。」

「バーっと観たよ、引きこもりになった理由もちゃんとね。え、これってマジ昔僕は人気があったっていう自慢話なの？」

絢香はそう言った後で笑いを堪えきれずに「アハハー！！」と豪快な笑い声をあげた。目には若干の涙すら浮べている。

「人気なんてないですよ。女子の集団からはキモいだの言われて不良気取りの男子チームからは暴力スレスレのちょっかい出されてました。」

僕は素直にそう言うと絢香はゴメンゴメンと平謝りで軽く深呼吸してから話した。

「アキラって真面目なんだかおちゃらけてるんだかよく見分けがつかないタイプだよねえ～。

いい？ 占術師としての今後のためにも教えておいてあげる。

アキラは何か勘違いしているよ。

この文章見る限りでは友達もたくさんいただろうし、女の子からも好意を寄せられていた。たぶん自分が気がつかないだけで後輩からも憧れの対象になっていたタイプの人なのよ。

それに、思春期の男子が女子の集団から目をつけられるのってアキラは理由わからないだろうから教えてあげる。」

「女子から目をつけられる、..

なんかわかんないけど、教室入った瞬間に女子が本棚に足広げながら座ってたからパンツ見えそうで気持ち悪いからやめろよって思いながら見てましたけど、..」

僕が素直に打ち明けると絢香はよしよしといった具合に僕の頭を撫でて話しを続けた。

「まったく。思春期の女心もよくわからない癖によく占術師になろうなんて思ったわよね。」

「単純にわからないことをそのまま放置するよりは全然マシだと思うよ。」

絢香の挑発するような口調につられてついつい僕もタメ口で話してしまった。

「いい？ 占術師としてこの文面を観る限り、嫉妬心が絡んでいることは間違いないのよ。

例えば、不良気取りの男子だけ？

その男がアキラみたいな中性的で比較的女子から人気が出やすいタイプに絡んでくる時は大抵、女が原因よ。たぶん、好意にしている女子がアキラにちょっかいを出すこと自体、すでに報復の対象になるのよ。んで、キモいと言った女子は単純にアキラをからかいながら、心の奥底では、仲良くなりたかっただけよ。」

絢香はコーラを口にすると矢継ぎ早に僕を諭すように話しを続ける。

「アキラはまだ自分のこと全然わかっていない。

さっきマヤ暦で kin111 って言ってたよね？

私、手相も見せてもらったしマヤ暦も趣味で学んでいるから解る。アキラはよくわからないうちに勝手に人気出すぎて一部の人から嫉妬されるタイプだから気をつけて。あと天運鑑定の実命にも『闘志を燃やす』と出てたけど、たぶん恵まれすぎてやる気がでないのよ。だから結果がついてこないのは当たり前じゃない？」

絢香は天運鑑定の実命項目に渡る『実命』という占術結果をちゃんと観ていたようだ。僕には難しすぎてよく解らなかつたのだが、言われてみれば恵まれているかもしれない。

側からみれば、単なる幼馴染の元宮が音楽家として成功したことについても、本人と家族の次くらいに僕が得をしていると思う。ライブに行けばすぐに友達が増えるし、ダブテックの元宮の友達というだけで少くらの悪戯（イタズラ）をしたとしても笑って許してくれる。新城だつてわりと大きな組織の責任者をやっているから、元宮と同様に新城の友達だからという理由で「まあ仕方ないか。」と、大目にみているらしい。1980年（昭和55年）生まれの僕たちは、申年ということもあってみんな集まればお祭り騒ぎといった感じですぐに調子に乗ってしまう癖がある。

ゆえに先輩からは可愛がってもらい後輩からは慕われて、2000年のミレニアムイヤーに20歳になる運命を知っていたため横の連帯も強い。バブルを知らないからこそ一番平和な世代かもしれないなあ、と言われることもある。

メニューを決める前に絢香とたわいもない話しで盛り上がりってしまったのだが、たまにはこんな答え合わせのような時間があつても良い。小説家にはなれなかつたとしても、自叙伝を書いてみたいという人が多いのは、たぶん、こんなゆる〜い話しでまったりと盛り上がるからに違いない。

無駄に笑いのエネルギーを使ったせいか？ 絢香はお腹がすいたと言ひメニューを見始めた。

ねえ、もう少しここで話ししない？ と絢香がいうので、僕たちはサイドメニューを頼むことにした。

沖縄タイムは何事もてげてげ（ほどよく）が丁度よい。

琉球王国で観る夢とソウルメイト

那覇新都心店での店舗研修が始まった。この数日間ですっかり絢香と仲良しになったのでわりと気楽に考えていたのだが、絢香は仕事モードになると一切の無駄口を叩かずに店舗の設営からチラシ配りの枚数のノルマがあることまで丁寧に説明してくれた。

事前のミーティングで人目を集めるのためにギターを弾いて欲しいとお願いされていたので、僕はパソコン経由で幾つかの譜面を開き、JAZZのスタンダードナンバーであるフライミートゥーザムーンやマイフェイバリットシングスをインストルメンタルで弾いていた。その間、絢香はネットでの記事を書き上げると通行人相手にチラシを配りはじめた。

メニューには300円で10分程度の占いからあるのだが、主に二人組の女子やカップルをターゲットにしているため、占いからパワー石の販売に結びつけなければ、売り上げのノルマを達成するまでにかなりの人数を集客しなければならない。

ギターの作戦が功を奏したのか、さっそく観光客の二人組の女子が300円の占いに目を止めた。すかさず、絢香が占術の説明をするとお客さんは「運気があがるマジカルカラーとマジカルナンバーが知りたい。」と言って絢香は「5分程度で鑑定結果が出ますからどうぞこちらで座ってお待ち下さい」と告げ鑑定に必要な個人情報が書かれた用紙を見ながら、パソコンに入力していった。鑑定自体はアプリケーションシステムがあるためスマホでもだせるのだが、いざという時に鑑定書をプリントアウトできるようにパソコンを使用しているみたいだった。

絢香の鑑定を横目で観ながら「マジカルカラー赤なんですか？ えーめっちゃ好きな色だから嬉しいです！」と言ったお客さんの声を聴くことができた。

最初は半信半疑のお客さんでも、一生涯護ってくれるマジカルカラーや大人になってから一番表に出てくるマジカルパーソナルを伝えると必ずと言っていいほど「当たってる！」とテンションが上がって、すぐに緊張が解れるようだ。次にお客さんが聞きたいことや悩みなどをヒアリングしてアドバイスをしていく中で、パワー石を製作するご丁寧をする。

絢香は今日は運が良いみたいで初めてのお客さんからパワーストーンの販売に結びつけることができたようだ。その時に、絢香から呼ばれて、ブレスの作り方や必ず写真を撮ることなどを教えて貰った。

絢香は小声で「お客さんがいるうちは、集客がしやすいからアキラは今のうちにチラシ配って次のお客さんを呼び込みして。」と言われたので僕は慌てて髪の毛を櫛でとかしてカーディガンを羽織り、パワーストーンを身につけてから路上での声かけを始めた。

リアルでのお客さんに慣れていない僕は、「占いかかですかー？ 的中率 98 パーセント！ 沖縄で一番当たると評判の琉球占術です。沖縄旅行の記念にどうかマジカルカラーで運気をあげてって下さい！」と見様見真似でチラシ配りをしていると、接客中の絢香がパワーストーンの調整のため席を外して僕にアドバイスをくれた。絢香がいうには、二人組の女子かカップル、それ以外には声をかけなくていいから、シンプルにアキラが可愛いと感じた子にだけチラシを配って、と言われ、僕にはその意味がわからなかったのだが、一応、上司なので言う通りにすることにした。

ピンクのワゴン車から少し離れて、全く人通りがなかった昼間とは違い、街は賑やかな装いを呈している。人の流れを観察していると、明らかに、視線を避けて下をみながら通り過ぎていく人や睨むような目つきで離れていく人もいる。その時、通りの奥、5メートルほど離れた場所からかなり好みのタイプの女子二人組が来るのがわかった。幸いにも視線がばっちりあったため、僕は街中でナンパするような甘い声を出しながら近づいていった。すると、「なんの占いですか？」とお客さんの方から聴いてきたのである。

「琉球占術と言って沖縄発祥の占いです。東洋占術や数秘術、古典風水を基に心理学を取り入れた世界でもここ沖縄でしか占えない占術です。お一人様、300円ですぐに運気の上がる色がわかりますよ！

いかがですか？」

女子二人組は常夏の沖縄にふさわしい白いタイトなドレスを着た細身の女の子と淡いブルーのTシャツに冴えるような青を着た胸の大きい女の子で、かなり僕のタイプなので、つつい仕事忘れて遊びに行こうよと誘いたいくらい魅力的に見えた。

「パワーストーンもあるんですねえ。うちの地元でも流行っているけれど、沖縄ってパワーストーン屋さん多いですよねえ。」

青いTシャツを着たグラマーな女の子がそう言うと

「ええ、沖縄は世界中のパワーストーンが集まって来ますから。実は僕、東京の出身なん

ですよ！

人、物、金、情報の全てが集まってくる東京ですらこんなに低価格でハイクオリティのストーンは買えないです。」

「へえーおにいさん東京なんだ？ 私たちは東北から観光で来ているんだあ。ねえ、優子、記念に占い受けてみない？」青いTシャツの女の子は隣にいた友達に言う。どうやら白いタイトドレスでワンレンのお友達は優子という名前らしい。優子ちゃんのはじめのうちは微妙といった顔つきで少し涙目になっていたのだが、友達のテンションの高さにつられて「萌がいうならせっかくだし占い受けてみようか。」と言ったので、すかさず僕はらさあさ、どうぞこちらへ椅子に座ってください、とエスコートした。

鑑定項目に必要な、名前、生年月日、血液型、出生地、出生順、をフォーマットに記入してもらっている間、すでに職業やどんなことが知りたいかなど、ヒアリングは終わっていて、本店から鑑定結果が送られてくる頃には雑談も交えながら、すっかりリラックスモードで鑑定をすることになった。

「優子さんと萌さんのマジカルカラー発表します！

優子さんはマジカルカラー白で萌さんはマジカルカラー青です！」と僕が告げると「えー好きな色！」とテンションノリノリの青いTシャツの女の子が言った。

「なんだかんで今日の服装もマジカルカラー取り入れてますよね！ マジカルカラーが身近にあってその色が大好きという人は、自分に素直な方なので、すでに運気が高い人ということができます。

では、恋愛運を観るご希望でしたね。具体的にはどんなお悩みですか？」僕が言うと白いワンレンのドレスを着た優子ちゃんが「実は、看護師をしてるんですけど職業柄全く出会いがないんです。」と悩みを告白してくれた。青いTシャツの萌ちゃんも看護師みたいなのでウンウンと共感している。

「出会いがない。なんとなく想像はつきます。

でも、こんなに魅力的な女の子を放置しておく東北の男はちょっと問題ありですよねえ。もしも東京や横浜の関東エリアで働いてたとしたら、すぐに男の方からデートの誘いが舞い込んできて、逆にもっと遊びじゃない男と出会いたいという悩みを持つことになります。優子さんと萌さんは若いうちに結婚したいですか？」僕は褒めながら結婚の意思について訪ねると「田舎だからまわりの子達も結婚が早くて私たちも看護師で経済的にはゆとりあるけれど、良い人がいれば結婚を考えても良いかもしれない。」と優子ちゃん

が言った。

僕は鑑定結果の中で、マジカルカラー青の萌ちゃんがパワーストーンに興味があることに気づき、まずはマジカルカラー青のラッキースポットである海へと行くことをアドバイスした後、パワーストーンを持ってみるのも良いとご提案した。

「パワーストーンで奇跡を起こした人は多いですよ！うちの生徒さんでも、全く出会いとかなかったのにパワーストーンを持ち始めてから、異性からチャホヤされるようになったらしいです。そして、運気のあがるスポットへ出向くことや運気のあがるナンバーを常に意識していたら趣味の場で理想的な男性と出会うことができ、何回かデートに誘われて付き合うことになったらしいです。

優子さんと萌さんもそのままだでも充分魅力的ですけど、パワーストーン持つとマジでモテまくりですよ！僕もパワーストーンを持つ前は全くモテない人生だったのに、パワーストーン持ち始めてから、かなり人気運が高まって、SNSのアクセスあがって、ダイレクトメールもバンバンくるようになりました。昔とは違い、ちゃんとSNSをやれば出会いはいくらでも訪れますよ！」僕は自分の体験談を通して精一杯に励ました。すると、最初は乗り気じゃなかったマジカルカラー白の優子ちゃんがパワーストーンに興味を持ち始めて、店舗に飾られているサンプルのプレスレットを見始めた。

パワーストーンに詳しい絢香がフリーだったので、ストーンの説明やセレクトは絢香に任せることにした。マジカルカラー青の萌ちゃんも優子が買うなら私も欲しいと言いはじめたので、僕も含めて四人でワイワイとパワーストーン談義で盛り上がった。

結局、その日、パワーストーンを購入してくれたのは優子ちゃんと萌ちゃんと絢香が最初に捕まえた二人組のお客さんだけだったのだが、優子ちゃんと萌ちゃんが一人3万円の予算を組んでくれたおかげで、ノルマの2万円を大きく上回り、5000円のプレミア鑑定と合わせると10万円近い売り上げを叩き出すことができた。絢香は佳子先生にLINEで売り上げを報告すると、売り上げ金を家元のマンションまで持ってくるように指示されて、二人で店じまいをする頃には、もう23時PMを過ぎようとしていた。

絢香はお腹すいたでしょうと言いコンビニで肉まんを買ってきてくれた。どうやら、晩御飯は家元が用意してくれているらしいけれど、国際通り店にも寄らなければならないため、もう少し我慢してということみたいだ。

神秘的な月夜に椰子の木の下、月明かりが似合う絢香の横顔を観ながら、二人仲良くハフハフと肉まんを頬張っている。那覇新都心の夜は幻想的なほど美しい。熱く胸を焦がし続ける恋人同士の泡沫（うたかた）の夢。エキゾチックな音楽が流れている。

果たして、絢香以上に相性が良いパートナーが果たして他にいるだろうか。疲れ切ってボロボロになった身体を自然と寄せ合っていた。風の流れるままにこのまま二人でどこか遠くへと旅に出てみたい。

この先に待ち受けるであろう運命の悪戯（イタズラ）も知らないうちに。

マジカルカラーの魔力

那覇国際通り店は0時を過ぎても運営していた。小さなお子さんを抱える田中さんご夫妻の奥さんが店長を任されていて、絢香と僕が到着する頃には、すでに人通りもなく飲食店以外はすでに店終いをしていた。絢香は田中さんの代わりに経理の作業をはじめると暇だった僕は田中さんとの雑談もそこそこにして、缶コーヒー片手にタバコを吸いながら近くで絵を売っていた路上アーティストに声をかけた。

路上アーティストのお兄さんはふだんアメリカ軍基地の周辺で活動しているらしく、「僕には売れないものはないというくらいに営業力に自信があるのでそこまでの境地になるとお金や時間から自由になれますよ。」と自慢気に言った。まあ、時間という概念から解放されたいとは常々考えていたのだが、営業力を身につけるよりかは時代の最先端であるインターネットさえあればいつでも自由になれるけどなあ、と思いながら話を聞いていた。

幾つかの店舗が軒を連ねる那覇国際通りの小さなショッピングセンターから絢香が出てくると田中さんご夫妻に挨拶をして「アキラお待たせー。さぁ次行くよー。」と言い足早に通り沿いに止めてあったソアラの運転席へと乗り込んだ。

その時、田中さんの旦那さんが「これから家元のマンションですか？」と尋ねてきたので、そうです、と答えると「いいなあ〜。僕たちなんて家元のマンションなんて呼ばれたことないですから。橋本さんこれからもどうか仲良くしてください。」と言うので、正直、職場で仲良くしてくださいとか面倒くさい人だなあと思いつつも「了解です！ではまた」と短い別れの挨拶を告げてソアラの助手席に乗った。

「アキラ。国際通りをまっすぐいくとホテル直結のショッピングモールがあるのね。モノレールで言うと牧志（まきし）駅。そのショッピングモールの2階にミラクルスポットの本店があるから覚えておいて。たぶん、本店勤務だと国際通り店にヘルプで行かされることもあると思うからさ。」

「牧志ならばこの前泊まっていたホテルが近いのでなんとなくわかります。潰れたデパートのちょい先ですよ。」

確か、三越があったような気がしていたのだが、いつの間にか閉店していたようだった。昔は国際通りのランドマークとして待ち合わせにも使っていた記憶がある。

「まあ、このまま那覇新都心店勤務になるのか、研修終わったら東京に帰るのかわからないけれど、本店はインターネット店と密接に関わっているから店舗研修はあると思う。」
絢香は少し乱暴なまでに車を走らせている。家元を待たせるわけにはいかないといった感じだ。

「そういえば、今日はスーパーホテルにでも泊まろうかな。絢香先生の仮眠部屋を使うわけにはならないし。」

僕はやんわりと一つ屋根の下で泊まるわけにはならないという意思表示をした。

「そのまま使えばいいよ。わたしはふだん実家から通っているし、あの部屋はわたしだけのものじゃないんだから。」

絢香が正直にいうとなんだか寂しい気持ちになった。一人暮らしが長いため昨晚の絢香との対話がもうできないのかと肩を落とした。

那覇新都心のおもろまちまで戻ってくると社員用の仮眠部屋近くの駐車場で車を停めた。家元のマンションはどうやら歩いて行けるほど近くにあるようだ。押し黙ったまま暗がりの道を絢香と歩いていると一階がケーキ屋さんの10階建ての高級そうなマンションに辿りついた。絢香はポストの中をチェックすると自動ドアの前でインターホンを鳴らし、しばらくして自動ドアが開くとエレベーターで最上階である10階へと昇っていった。

ドアの前まで着くとアイドル占術師のKAKOが出迎えてくれた。マンションなのにバルコニーが庭園のように植物がたくさん並べられており、花壇には、見た事もないような花が咲いている。玄関も広くて10人分くらいの靴ならば棚にしまわなくても良いくらいだ。廊下を抜けてリビングルームへと案内されると木製のテーブルにパソコンを置いて作業している佳子先生の姿があった。

僕と絢香が挨拶すると

「お疲れ様～、今日はだいぶ頑張ったみたいだね！」と佳子先生が労を称えてくれた。すると、KAKOも「お二人はご飯まだですよ。カレーなら残ってますけど、チャーハンとどっちが良いですか？」と尋ねてきたので、僕はカレーでも全然良かったのだが、絢

香が少し身をくねらせながら甘える感じで「ありがとうございます。わたしはチャーハンが良いです！」と返事した。絢香は KAKO に対してはライバル意識ムキ出しで少し意地悪してみたかったようだ。そんなことはお構いなしに「KAKO ちゃん、絢香にチャーハンつくってあげて。」と佳子先生はクールに言い放った。

「アキラさんも同じでいいですか？」と KAKO が僕に尋ねてきた時に、今日の KAKO はマジカルカラーの服を着ていることに気づいた。

「カレーも残ってるのに、わざわざありがとうございます！ 僕はどっちでも簡単な方でいいです。」

あまりの KAKO の豹変ぶりにさっきまで絢香と恋人気分に浸っていた僕は、目を奪われた。女の子は、髪型とお洋服を変えるだけで別人になれるのだ。

「絢香、今日の売り上げ金出して。」

佳子先生はパソコン作業をしながら絢香に指示すると絢香は慌てる様子もなくカバンの中をまさぐりながら封筒を渡した。すると、佳子先生は、「今日はアキラ君のおかげで 10 万円近く売り上げ出すことができました。いつもならば、ノルマを達成できない日もあるのよ。ねえ、絢香。」

「私だってアルバイトの子がいた時は 10 万円以上の売り上げ出してたじゃないですかあ〜。」

絢香は佳子先生の前ではまるで赤ちゃんか子供のように甘えるのであった。

KAKO がチャーハンできたというので、僕はオープンキッチンまでいき料理を運ぶのを手伝った。

6 人掛けのテーブルに佳子先生と KAKO、そして対面の席に絢香と僕が座ってご飯をたべながら雑談交じりのミーティングが始まった。

「いやあ〜。東京面白かったなあ！

美味しい坦々麺も食べることができたし〜。」

佳子先生は麺類が好きなようだ。KAKO が「やっぱり東京は違いますよお〜。世界中の美味しい料理が食べれますもん。」と羨まし気に言う。

「沖縄って麺類弱いですよねえ〜。沖縄ソバかパスタ屋さんしかないし。」と絢香が言うと佳子先生は「あるっちゃあるんだけど美味しい坦々麺はないよねえ〜。それにファッションもみんな洗練されていてお洒落だし、やっぱり優秀な人が多いよ。ねえ、アキ

ラ君？」

急に話しをふられた僕は「まあ人口が多いからそうなりますかねえ。」となんの面白みもない発言をしてしまった。一瞬、場の空気を悪くしてしまった僕は「そういえば、家元は寝てるんですか？」と話しを逸らすことにした。

「いや、奥の部屋で秘密のお仕事してるよ！

ところで、今日は KAKO ちゃんのお洋服買いに行ったんだけど、KAKO ちゃんみんなに見て貰いなよ！」と佳子先生は言う。

「ええ～恥ずかしいですよ。オレンジ色のドレスなんて！」 KAKO は恥ずかしいと言いながら、「ちょっと待って下さいね？」とみんなに告げて、玄関の方にある部屋へ消えていった。KAKO が部屋に入ったのを遠目から確認した佳子先生は、身を乗り出して小声でこういった。

「KAKO ちゃんって深層心理に宙（ちゆう）を持つじゃない？ この深層心理宙ってのは、数字変換すると『9』になるんだけど、1 から 9 まであるナンバーの中で、一番、頑固な性質を持っているのよ。

まあ、うちの会社はマジカルカラーが一番のウリなのに、オレンジ色のお洋服を着た方が人気出ると言っても、頑なに拒否するわけ。そんでもっていよいよ家元がうちのユニフォームなんだからちゃんとオレンジ色のお洋服着てよってショッピングに連れ出して、散々褒めまくってようやく買ってくれたのよ～。全く、部下に宙がいると面倒くさいわあ。」

「ええ、信じられない。貧乏な私ですらデパートでセールやってるうちに緑色の服を買って準備してたっていうのに。KAKO さんってたぶん言動からして広島のお嬢様ですよね？ なんか不思議ちゃんって感じします。」

絢香は佳子先生に同調して陰口を叩いた。それを聞いて僕は女を敵にまわすと怖いなあ～とつくづく思うのであった。その時、KAKO がじゃじゃじゃ～んっ！ と昭和のテレビ番組のノリで登場した。

絢香と僕が振り返ると、南国沖縄に相応しい、オレンジ色にトロピカルな模様が入ったシルクのワンピースに身を包んだ KAKO が得意げにポーズを決めて立っていた。それを見た僕は、KAKO ってふだん着痩せするタイプで解らなかったのだが、おっぱいも大き

いし脚もすらっとして綺麗だし、髪型もきちんと前髪をわければ、本当にリアルなアイドルと勘違いしてしまうくらいキラキラとして見えた。

下半身が少し反応してしまい、僕は直視することができず視線をそらした。南国沖縄はどんな女性をも美しくさせる。KAKOのように元が良い女性ならばなおさらだ。ジブリ音楽のクラシックピアノが流れる一流ホテルのカフェテラスで KAKO と紅茶を飲んだり美術館や水族館デートする妄想が脳内を過ぎる。

さっきまで絢香と過ごしていた時間は、ドラマで例えるならば、秘密の職場恋愛の末に結ばれた友達同士のような夫婦の物語。KAKO のような品のある女性とはまだお付き合いしたことがない。マジカルカラーの魔力にすっかり魅せられた僕は占術師として KAKO や絢香に出会えた幸運を嘯み締めていた。

古代史に隠されたシークレット

占術師のミーティングは深夜1時も過ぎるとそのまま勉強会へと突入する。さっきまで奥の部屋にいた家元が黒の浴衣姿でリビングルームに出てくると僕の方を見て「お疲れ様、今日は運が良かったね。」と言った。ミーティングとは名ばかりの女子トークをしていた佳子先生や KAKO や絢香も家元の登場により少しだけ緊張感が走り、気まずそうな空気を和らげるように KAKO が家元に「何か飲みますか？」と言うと「ありがとう、アイスコーヒーくれるかな。」と言うので KAKO はオープンキッチン越しから「みんなもアイスコーヒーでいいですか？」と尋ねてきたので、僕も手伝いにキッチンへと向かった。

KAKO とキッチンで二人きりになった僕は、まだ洗いたての香りがする KAKO の髪の毛の匂いに恋人と過ごした過去の記憶が蘇ってきて嬉しくなった。

僕はトレイに5人分のアイスコーヒーを乗せると KAKO は私が運びますよと言ったのだが、昔ウェイターをやったから大丈夫ですよと言って僕はテーブルにアイスコーヒーを並べた。ちょうどその時に絢香と佳子先生と売り上げの話しをしていたようだった。

「アキラ君。ありがとう。KAKO ちゃんも座って。」と家元に促されるまま6人掛けのテーブルに家元と絢香の対面する席に僕と KAKO は座った。

ここ最近の那覇新都心店は不調だったらしく、アルバイトの子もなかなか見つからずに絢香一人で運営をしていたので、売り上げが10万円近くあがったことに対して「やはりアキラ君は運を持っているよね。」と家元が褒めてくれた。佳子先生は上座にいてパソコン画面を前にせわしくタイピングをしている。勉強会の途中で時折、家元の話しを噛み砕いて説明する役割をしているのだ。

一通りの講義が終わると家元は「じゃあ、ハートレベルのお話しはここまでにして、気づきを発表してください。」と言い、このメンバーの中で一番役職が下の僕が真っ先に名乗りをあげた。

「まさかハートレベルの 5.1 と 5.2 の間にそんな大きな差があったのは驚きました。ハートレベルは行動力と密接に関わっています。単純に気弱なタイプとか目が肥えているタイプとかがわかるのでストーン販売の参考にしようと思います。

話しは変わり、数秘術を開発したピタゴラスの時代のことを思うと紀元前にはすでに暦の概念や人の運命を紐解く学問が成立していたことを最近になって知りました。実は僕は仏教を学んでいたのですが、釈迦（しゃか）も紀元前 5 から 7 世紀くらいまで遡って活躍されたとされているので古代文明の知恵というのは果てしなく古い歴史があることに気づき、仏教は科学だと考えるようになりました。」

僕はまともでない頭でバーッと話すところの話しをどうやってまとめるかと考えノートを見た。すると、家元は「仏教は科学だねえ。」と短くコメントすると、今度は絢香が「私もそう思います。」と賛同してくれた。

「アキラ君。良い気づきだね。さっき話しが出たピタゴラスもなんの人だったか知ってる？」

家元が尋ねると「数学者であり科学者であり。哲学者、..。」と僕はうろ覚えな記憶を辿り答えた。

「ほら、ピタゴラスの定理で有名な彼ですら、紀元前 5 世紀くらいにはもう数秘術を使って宗教集団を創り上げている。

今から約 5000 年前には、すでに現代の建築やアートの元となるものはたくさんあったはずなんだよ。

人間はイメージできるものがなければつくることができない。逆に言えば、その時代の絵画とかを観ると天使が空を舞っていたりしてイメージできるものはたくさんあった。ギザの大ピラミッドもそう。

ギザの大ピラミッドは今から約 4500 年前に創られたものとされているけれど、現代科学の粋を集めてもあのピラミッドと同じものは作れない。」

家元がピラミッドの話しをすると絢香が

「え？ ピラミッド自体は作れるって話しを聞いたことがあります。」と言う。家元はその発言を受けて「作れるっちゃ作れるんだけど、残念ながらあの精度では作れないんだよ。最新の輸送車やクレーンなどバンバン投入すれば大ピラミッドと同じようなものは現代科学でも作れる。お金さえあればね。

ただし、精度が違う。残念ながら現代科学の粋を集めてつくったピラミッドが約 4500 年前に作られたピラミッドに勝てないんだよ。」

絢香は「精度、..。」と呟くとさらに好奇心を掻き立てられたようだ。

「例えば、一般人が知らないだけで、アトランティス大陸やムー大陸は実際にあったとき

れていて、実際に沈んだ場所もわかっている。沖縄の与那国島の海底神殿だって、あれはどうみても人為的に作られたものなのに、日本だけが自然現象によってできたものだと主張している。僕は古代史が趣味だから色々な文献を研究しているのだけど、明らかに、何かを隠そうと言う権力者たちの意思が邪魔をしているのは間違いない。既得権益を守ろうと必死だ。」

その時、絢香が「琉球王国の一万年の歴史はどうなんですか？」と尋ねた。

「まあ、歴史というのは本当のところは誰にもわからない。なのだけれども、沖縄が日本だと考えているのは日本人だけであって世界的規模で観れば、ここは琉球王国なんだよ。それに一万年も前に新潟や秋田と貿易していた証拠としてその当時日本では作れなかったはずの高度な技術で作られた土器が発見されている。琉球王国というのは地政学上、最も重要な位置に存在しているので、中国や朝鮮アメリカからの防衛の最期の捨て石として日本軍に利用された悲しい歴史がある。今でも日本におけるアメリカ軍基地の70パーセント以上が沖縄に集中している。」

さっきまで疲れきった様子で居眠りしていたように見えた KAKO が急に起き出して「戦争はもう二度と起こしたくないです。」と言った。

その言葉を受けて絢香は「方言札。戦争中に沖縄言葉が禁止されて日本人なのだから日本語を喋れと軍事的な圧力がありました。沖縄言葉を話すと例えば子供だろうがお年寄りだろうが日本軍によって殺されたのだと私の父方のおじいちゃんが言ってました。内地の人は解らないだろうけれども、沖縄の人からすると戦争の脅威に晒されているのは日常的なことです。私も例え侵略戦争が起きようとも丸越しのまま戦った方がまだマシという武力放棄を主張する人の気持ちはわかりますがなかなか難しいですよねぇ。」と言った。

「あ、それで気づきの途中だったね。KAKO ちゃんこれまでの話をまとめながらみんなに気づきを教えてあげて。」と家元は言う。

「ハートレベルと行動力のお話しから、ピタゴラスの数秘術という占術が生まれた歴史的背景をイメージすることができました。やはり、これだけの膨大なデータを統計学としてまとめてみると、所詮、人間の人生や運命なんてちっぽけに思えてきます。だから、好きなように生きれば良いと常々思っています。ましてや、戦争の話しにもなりましたが、今の時代、戦争が起きるリスクが少ないこの日本において、好きなこと

ができないっていうのは単なる臆病者で無知な人の言い訳だと思います。ですが、その一部の人たちを除いて、好きなことを見つけたい才能を開かせたいという人たちのために占術を通してアドバイスしていけたら、と考えています。」KAKO が気づきという名の決意を述べると「じゃあ、みんなが寝るために今日は解散しよう。」と家元がいい、僕は時計に目をやるとすでに4時 AM 近くになっていた。

「アキラ君は今日は那覇新都心店の仮眠部屋を使って。絢香と一緒に窮屈だろうけれど色々、占術のことなど教えて貰ってね。」と家元が言う。

「わかりました。色々ありがとうございます。」と僕が言うと家元は「絢香は今日は15時出勤になると思うけれど、台風が近づいてきているらしいので予定はグループLINEで確認するように。くれぐれもアキラ君の身のまわりの世話をしあげて。東京からわざわざ来て頂いているお客さんだからね。」と絢香に告げた。

「え？ 布団一枚しかないんですけど。。。」
と絢香は困惑した様子でいうと家元はうちに布団あるからそれ持って行ってといい「KAKO ちゃん、社員寮まで布団運ぶの手伝ってあげて。」と指示した。

マンションの玄関で KAKO を待っている間、絢香とは無言のうちに気まずそうな空気が流れていた。

まさか、僕が沖縄滞在中、一つ屋根の下で過ごすことになるとは考えもよらなかっただろう。

布団セットを抱えた KAKO が玄関のドアを開けて出てくるとエレベーターの中で絢香と KAKO が雑談している間、僕はみんなにバレないように顔をそらしあくびをした。絢香はふだんショートスリーパーらしいけど、さすがに頭脳労働者なのだし少しでも睡眠をとらなければ翌日のパフォーマンスに影響する。那覇新都心の社員寮まで着くと絢香が「お茶でも飲んでいきませんか？」と KAKO に言う。意外なことに KAKO はその誘いを受けた。絢香は買い物がてらコンビニに行くのでなにか欲しいものがあるかと僕たちに尋ねた。KAKO がアイスが食べたいから一緒に行きますと言ったのだが、せっかくアキラと二人きりなんだし、適当に買ってきますからゆっくりしててください、と意味深な発言をして一人でコンビニへと向かった。その発言を受けて KAKO と僕はぽかーんと目を合わせて立ち尽くしていた。

「KAKO さん、なにもない部屋ですけどどうぞ座ってください。」僕はオレンジの勝負服のまま社員寮に来た KAKO に言うとうとう言いながら、足を放り出しながら地べたに座る KAKO のパンツがまる見えなことに恥じらいと嬉しさが込み上げてきて、

なんて無防備で可愛らしい人なのだろうか、と頭の中で小躍りを踊るような気持ちでした。そういえば、KAKO は家政婦として雇われて沖縄に来たから家元のマンションと一緒に暮らしている。いきなり憧れの人とご近所さん同士になってしまった幸運に見舞われた僕は絢香と KAKO の出現により青春時代へとタイムトリップしたような甘酸っぱさを味合うこととなったのである。

占術師だって素敵恋愛がしたい

絢香がいなくなった那覇新都心店の仮眠部屋にて、KAKOと二人っきりにされてしまった僕は、無音の状況に耐えきれず音楽をかけることにした。夜明けも近くラグジュアリーな衣服に身を包んだ美女がいるこんな状況ではJAZZがとてもよく似合う。僕は棚に置かれたコンポではなく自分のスマホからノラジョーンズをチョイスしてスピーカーから流した。

「アキラさんってお洒落だけでなく音楽のセンスもいいんですね。」と少し顔を赤らめたKAKOがいうので「いえ、自分の好きな曲ばかりですみません。KAKOさんはふだん音楽聴かれますか？」と僕は質問をした。

「私はアキラさんみたいに音楽のセンスないのでふだんはあまり聴かないです。けど、昔は勉強中の時とかクラシックミュージックやJAZZをかけるときもありましたよ。」KAKOは広げっぱなしの脚の隙間に視線を感じたのかゆっくりと足を閉じてそのまま崩れるように女座りにしなおした。

「ところで、KAKOさんが占術に興味持ったのってなんでなんですか？」僕は突然マジカルカラーを受け入れるようになったKAKOの心境の変化や占術を学ぶきっかけが気になりはじめていた。

「実は、少し前まで婚約者がいたんです。私は乗り気じゃなかったんですけどある日突然、会社経営をする両親から紹介というかお見合いをすることになりまして、婚約するまでも色んな葛藤があったのですが、母親が喜ぶならと運命を受け入れることにしたんです。ところがすぐに彼の浮気が発覚してすぐさま婚約を破棄しました。自暴自棄になって、それからしばらくして、海外を旅していたんですね。

イギリスやアフリカなどたくさんの国々をまわる中で、やっぱり日本人って恵まれているなあ、と感じましたし、イギリスのストーンヘンジに行った時に言葉では表せないほどの不思議な出来事に見舞われたんです。占術に興味を持ったきっかけを一つに絞るのは難しいですがスピリチュアルブームのきっかけをつくったイギリスへ行ったことが大

きいかなあ。今はソウルメイトと出会いたいという夢を持って占術師のお仕事をしています。もう二度と親が願った結婚なんてまっぴらごめんですから。」KAKO は赤裸々に語ってくれた。

「なるほど、ストーンヘンジですねえ。確かヒールストーンと呼ばれる玄武石から創られてるみたいですよ。紀元前 2000 年から 2500 頃に作られたとされる高さ 7 メーターもあるストーンサークル。確か夏至の日に祭壇と玄武石を繋いだ直線上から太陽が昇るので天文学の高い知識があったとされているみたいですよ。」

僕はあえて元婚約者の話しを逸らすことにした。KAKO の痛みはまだ完全には癒えていないだろうと直感したからだ。KAKO はイギリス滞在中に起こった不思議な体験を夢中になって語った。僕はその話しを楽しく聴かせて貰った。話しが一通り終わると僕は恋愛の話しをしだした。

「ところでアキラさんって彼女いるんですか？」

KAKO は単刀直入に聴いてきた。

「いないです。残念ながら約 5 年間くらいは車の助手席が空席のままです。」

「えー。モテそうなものにもったいないですよ！ 男性占術師って絶対女の子からモテると思う。」KAKO はなぜか目を輝かせながらそう言った。

「ブログのアクセス数は飛躍的に伸びましたが、確か月間で 10000PV かなあ。でも、リアルなお付き合いとなると占術師なんてモテないですよ。あくまでもお友達として楽しいだけの相手です。それにモテてなんかいいことあるんですかねえ？」

僕は常日頃から思っている疑問を話した。

「ええ～、モテる男子はやっぱり違いますよお。」

女の子からチャホヤされたり色んなお店で特別扱いを受けたりいいことだらけじゃないですか～。それに、意識高い系でルックスが可愛い女の子の話しを聞くと、やっぱりモテる男子がいいって必ず言いますもん。」

KAKO は僕がモテる前提で話しをすすめているけれど、もしもその話しが本当だとするのであれば KAKO や絢香のような知的でミステリアスな女性と結ばれたいものだと強くそう思った。

「まあ、遠目から観ればイケメンとか横顔がイケメンとか冗談っぽくからかわれることがありますけれど、KAKO さんのような知的で綺麗な女性とお付き合いできるのであれ

ばこれからも自分磨き頑張ろうと思います。けれど、KAKOさんはどういったタイプの男性がお好きなんですか？」

「わたしは、一般的なイケメンとされる男子には興味がないのです。それよりかは不思議な色気があって包容力があって話してて面白い人が好きです。

あとは、二人で歩いている時にさりげなく歩道側の安全な道にエスコートしてくれたり、誕生日などの特別な日だけでなくちょこっとでもいいから毎日何かしらの愛情を示してくれるマメな人ならばなおさら好きになっちゃいます。でも、ここだけの話し、顔の好みというのはとても大事だと思いますし、わたしの友達もみんな口を揃えてやっぱり顔よねえと言ってますよ。人間だれでも性格は歳をとればとるほどまるくなっていくらしいから変えられるじゃないですか？ けど顔は容易には変えられない。けっこうわがままですかね？」KAKOは全て話した後で少し恥ずかしさが込み上げてきてうつむいた。

「まあ、気持ちは解ります。顔はかえられないとか占術師としては絶対に言っちゃいけないことですが大事ですよええ。人は外見で判断しちゃいけないとは言いつつも、無意識のうちに友達になるなら可愛い子がいいとか選り好みしてますもの。綺麗ごとだけでは生きていかれないです。」

僕はKAKOの意見に同調してみせた。誰にでも話しを合わせるパーソナル公（こう）が八方美人と言われる由縁かもしれない。

「アキラさん。今度、久高島とか離島に行きませんか？ 昨晚、アキラさんが倒れる前に、久高島が一望できる知念岬公園（ちねんみさきこうえん）行った時に家元が面白い話しをしてたじゃないですか？

久高島には絶対に行かない方がいいとか言われたけれど、わたし、禁止されるとますます行きたくなってしまう性分なんです。絢香さんも行けるならば三人でも楽しそうですね、できれば二人きりで出かけたかったです。まるで指輪物語の世界のようなドキドキを味わってみたいです。」

いきなりKAKOからデートのお誘いを受けた僕は、二つ返事でオーケーしようと思っていた。しかし、コンビニへ出かけていた絢香が「お待たせー！」と言いながら部屋に入ってきたのである。

「いやぁ～、コンビニ行ったら友達とばったり会っちゃってさぁ～。お待たせしちゃってごめんね。」

妙にテンションが高い絢香の登場によりデートの話はうやむやになった。うちの会社では基本的に従業員同士で個人LINEをすることは禁止されている。

しかしながら、いきなり二人きりで離島に行くお誘いをするなんてKAKOは意外と大胆

不敵だなあ〜と思っていたら、マジカルカラーオレンジは太陽のような明るさを持っているために楽しいことワクワクすることのためならば率先してリーダー役にもなれることを思いました。リアルでの付き合いからして、マジカルカラー緑の癒し系の絢香、太陽のような明るさを持つ KAKO の存在は月と太陽の関係性に似ている。もしも意識があるうちに絢香と二人きりになってしまったら男女間の一線を越えていたかもしれない。そう感じたからこそ、絢香は長めに外出していたのだろうかと思は深まるばかりであった。

羽衣伝説と琉球に眠りし姫

コンビニから絢香が戻ってきた後、KAKO はアイスを食べながら雑談をしてそそくさと帰って行った。

絢香は何を勘違いしたのかパーティでもやろうかというほどの酒やつまみまで買ってきていたので、また今度ゆっくり飲みましようと言うと KAKO は軽く会釈をしてどちらにでも取れるような態度を示した。家元のマンションまで送りますからという僕の気遣いにも笑顔で近いから大丈夫です、と告げて玄関を出て行った。KAKO は一瞬何かを伝え忘れたかのようにこちらを振り返ったのだが僕と絢香が並んで立っている様子を観て足速に単身者用のアパートの階段を降りて行った。

KAKO の姿が見えなくなると絢香は目線の先に見える 10 階立てのマンションの出窓付きの部屋を指差して「あの電気がつけばなしの部屋が KAKO さんの部屋だよ。」と言い、僕はこのようなオアシス的狀況を与えてくれた家元のことを思い両手を合わせて感謝の意を表した。

「全く、好きなら好きってはっきり言えばいいのに。」と隣にいた絢香が呟くと「ああ、気を遣ったらお腹がすいた。」とわざと聞こえるように言い放ち部屋へと消えていった。僕が部屋の中に入ると絢香は開口一番「朝っぱらからなによ、このエッチな音楽。」と言いながら腹の底から気に食わないと言った態度で少し広めの 1DK の窓際に KAKO が運んでくれた布団を敷きはじめた。「手伝うよ。」という僕の言葉にも一切耳を傾けず、ただただお腹が空いている時の赤子のようなわかりやすいムツとした表情で荒々しく布団を敷くと

「アキラ。着替えるから、こっちから奥には入ってこないでよね！ シャワーでも浴びてよ。」と言うので、僕は着替えだけとらしてくれと言いスーツケースの中から部屋着を取り出して洗面所へと向かった。

僕がぬる目のシャワーを浴びている時、リビングルームで何やらガサガサという音が聴こえてきたのだが、絢香は一体何に対して怒っているのだろうかと思議に思っていた。知らぬまに汗びっしょりになっていたティンバーランドのシャツや下着を洗濯機の中に入れた方がいいが絢香の洗濯と一緒にまわして良いのかわからないのでしばらく放置することにした。2 週間程度のバケーションの軽い気持ちで沖縄に来たために、もしも季節の変わり目まで沖縄に滞在することになったら、東京に帰る時に羽織るジャンパーなど持ってきてはいない。羽田空港からタクシーで蒲田まで戻るとは定番なので、車の乗り降りくらい短時間ならば寒さにも耐えられるかもしれないし、最悪は羽田空港にあ

るユニクロで安いジャンパーでも買うかと思いつきながら顔にシェービングジェルを塗り髭を剃っていた。その時、絢香がドア越しに「ちょっと、わたしもシャワー浴びたいんだから早く出てよ。」と言うので慌てて歯ブラシを片手に持ち、待たせてごめんと洗面所から出た。

「アキラシャワー長すぎるよ。もうこんな時間だしわたしは起きたらシャワー浴びるから、その時は適当に散歩でもしててよねえ。」と絢香は言う。

「ごめんね。でもさっきからなにをそんなにツツンしているの？」と僕はいい加減少し不快感を露わにして言った。

「別に。ところで出勤表みたんだけど、アキラは今日は15時に本店勤務らしいから、お昼過ぎになったら車でモノレールの駅まで送ってあげる。ここから歩いて15分くらいだけど、沖縄の夏は出勤するだけで汗だくになるからさあ。」

「ありがとう。本店勤務かあ、楽しみだなあ。」

「まあ、那覇新都心店や国際通り店と違って、パワーストーンの種類も豊富だから楽しいと思うよ。」

「なんだか昨日から今日にかけてアキラのお世話で疲れちゃった。わたし寝るね。」絢香はショートスリパーらしいがさすがに明け方近くになれば眠くなるようだ。絢香も僕も一般的に見れば社会不適合者と言われるかもしれない。けれども、目覚まし時計をかけずに寝たいだけ寝れる小説家に比べればまだ会社に出勤しているだけまだマシかもしれない。

「今日はマッサージしなくていいの？」

僕は悪気なく尋ねると絢香は「アキラはエッチだから遠慮しとく。」と言った。なんのことかさっぱりわからずに僕は押し黙った。

「アキラ昨日、わたしにキスしたり胸を触ってきたりしたの覚えてないの？ わたしが寝ていると思ってまたイヤらしいこと考えてたでしょ？」

絢香は寝ているフリをしていたのだろうかと思い、顔面が蒼白になりかけた。絢香は話しを続けた。

「やりたいならやりたいって素直に言えばいいじゃん。まあ、ラッキーナンバーが低い KAKO さんと比べたらわたしなんて南国気質で声かけやすかったでしょう？」絢香は小悪魔のような上目遣いでこちらを覗くとしばらくは恋愛と無縁で人間関係の駆け引きになれていない僕は言い返せないでいた。

「絢香、何か勘違いしてるよ。僕は好きな人としかそういうことしない。」

「じゃあ、なんで KAKO さんからのデートの誘い、断らなかったの？アキラはズルいよ。家元や佳子先生から可愛がられたり、KAKO さんからも好意を寄せられてさあ。」絢香がパーっと不満を口にすると僕は絢香を抱き寄せた。勢いに任せて絢香の耳元に囁いた。

「はじめて会った時から絢香先生のが好きになっちゃいました。」もう本当の自分の気持ちなんてどこにあるのか分からない。倦怠期のカップルみたいな痴話ケンカを収める手段は抱き寄せることしか知らない。絢香は僕の腕に抱かれて顔を胸に押し当てながら「好きなら。して。」と甘く囁く。

絢香の髪を撫でながら瞳を合わせると雪解け水のような雫が頬を伝った。その涙を優しい口付けで堰き止めながら彼女の甘い吐息に吸い寄せられるようにぶくりとした絢香の唇に口づけをした。そのまま力なく布団へと落ちていく彼女を水が流れるままナチュラルに布団を被りながらも一度激しく舌を絡ませるような甘いキスをした。琉球に眠りし姫の伝説は水浴びをしていた天女の羽衣を隠した農夫の物語がベースになっている。ものあわれな僕のことを神様は抗えない運命の歯車の一部としてさぞかし面白い演技をしてくれたと膝を叩いて笑っているかもしれない。終わらない夏の夢。琉球王国のお姫様は実に嫉妬深い。

G 線上のエリア

朝焼けに結ばれた絢香と僕は夢の中で会うことを約束して眠りについた。1組の布団の横で眠る絢香の可愛い寝息を聴きながら僕は彼女の髪を優しく撫でた。初めて絢香と出会った時と同じようにホワイトセージとフランキンセンスのエスニックな香りに少しだけ隠し味のような甘い香りが部屋に漂っていた。

僕は無造作に置かれたジープンのポケットからスマホを取り出しインスタグラムを覗いていた。誕生日が1日違いの幼馴染であるダブテックの元宮がアップした誕生日ケーキの写真に数百件のいいねボタンと百件近いコメントが寄せられていて、心の中で元宮生まれてきてくれてありがとうと囁いた。

数年前までは、僕のささやかな誕生日祝いの翌日に元宮の誕生日の異様なまでの盛り上がり勝手に比べて落ち込むこともあったのだ。元宮はそのことに気づいたのか単に面倒くさくなったのかフェイスブックでの誕生日を非公開にしてしまった。

元宮は本当に優しい心根を持つ人で、まだ幼かった時代とは違い、本気で友人の幸せを何時間も仏壇に向かって祈れるいい奴なのだ。例え少くく酒癖が悪かったとしても目には見えない歌を生業とするアーティストなのだし、それすらも芸の肥やしとしてファンの方たちには大目に観てやって欲しいとつくづく願っている。普段から自身の発言が及ぼす影響力の高さから真面目を演じなければならない彼だからこそもう後には引けない。僕らのような占い師であるならば友人の付き合いでキャバクラに行くのも仕方ないと許されるけれど、元宮は地元にいる時にキャバクラの呼び込みのオニィさんから声をかけられたりストーカーまがいのファンから追い回されることがとても嫌だったみたいで、それが理由かはわからないけれど長年地元に住み続けたフードスターの彼ですら蒲田から離れていった。

隣で眠る絢香の天使のような横顔を観ながらスマホで時間をチェックすると 828 という数字を目にして、僕はまるで天から降り注ぐ神様のメッセージの如く溢れ出る気づきを書くことにした。

ー 8月31日・アキラの日記ー

ダブテックのファンならば彼が蒲田出身ということはわりと有名だが、彼の小学校時代の後輩にも蒲田愛が強いアーティストがいる。蒲田っ子というストレートな歌詞でマニアックな蒲田民の生態を歌うだけでなく真面目なラブソングも歌っている。映画の主題歌にもなった。彼らが蒲田に住んでいるからという理由だけで蒲田に引っ越してくる女の子もいる。確かに僕が小学校のソフトボールチームに所属していた頃に、その後輩たちは先輩たちから可愛がられていた記憶があるので、子供心に元宮と同様にして将来は出世しそうな子達だなあと思っていたら、案の定、その予感は的中した。東京都大田区蒲田の通り名である新宿村（しんしゅくむら）からは、たくさんのアーティストや芸術家を輩出している。

同じ大田区でも田園調布と言えど誰に聞いてもお金持ちが住む高級住宅街で大森や久ヶ原、山王エリアだって社長が住むような閑静な住宅街だしその子供達は当然大田区内の僕達からしてもお坊ちゃんま育ちと呼ばれる。それに山王には馬込文士村と呼ばれる大正後期から昭和初期にかけて活躍した文士や芸術家が集まってできた町がある。

かくいう蒲田だって、戦前期までは松竹の撮影所がありキネマの街として栄えていたらしい。

『流行は蒲田から』というキャッチコピーもある。

とはいえ、蒲田にはつい最近までヤクザやヤンキーも多かったし、日雇い労働者が日銭を稼いでピンクサロンやデリバリーヘルス、違法な売春宿などに金を使いこむことも日常的な光景の一つなので、地元民ならば無言でスルーできるハニートラップに引っかかってしまう区外の人達もたくさんいる。

土曜日の深夜に蒲田東口のロータリー近くのコンビニへ行けば、タクシーも呼べないほどに路面に酔い潰れて倒れているスーツ姿の男性をよく見かける。たぶん会社の飲み会の後にフィリピンパブかキャバクラにでも行ったのであろう。明瞭料金が安くしつとりと飲めるスナックであるならばここまでの酔い方はしないからこそその勝手な憶測だ。サラリーマンという人種とはあまり関わったことがないのでその生態はよく解らないが、わりと合理的に見える彼らですらパチスロで遊んで帰るといふ行動をとる人も少なくない。まあ、隣街にはソープラントや競馬場、映画館からゲームセンター、ショッピングモールまで幅広いニーズに応えてくれている神奈川県の川崎があるのだし、そのことを思えば蒲田なんて可愛いものだ。

B級グルメはたぶん世界一と呼んでもいいくらいにとんかつ屋さんからラーメン屋、羽根付き餃子まで取り揃えているし、意外にもコスプレ発祥の地の一つとして知られているらしい。

大田区から世界に羽ばたけ、というキャッチフレーズの如く、ここ琉球王国にて占い師として活動していることについても、たぶん、僕が田園調布などの山手（やまのて）に産まれていたとしたら家族から絶縁されてたかもしれない。

地元の友達は反対するところか、どうせやるならばむしろもっと面白いことをやれと応援してくれている。だから、自叙伝を書いた時に反発があったのは自分の名前が出てこなくて面白くなかったという人たちもいることだろう。人間とは不思議だ。普通ならば、小説に書いてほしくないから男友達が離れていくのはまだ理解できる。逆に女性は自分のことを知りたいという理由で小説に書いて欲しいという子がたくさんいる。僕だって、どうせ書いてもらうならば重要なキャラクターとして登場させてもらいたいし、逆の立場からしても面白く書いて欲しい人もたくさんいることだろう。しかしながら、味方のフリして敵対心ムキだして、人前では丁寧に扱うくせに、いざ近所ではったり会ったらわざと無視する人が世界平和を叶えるのが夢とか大真面目に言っている意味が解らない。世界平和どころか仲間すら信じれないのにどう足掻いたってその夢は叶いそうにない。こういうのもジェラシーが絡んでいるものなのだろうか。だとするならば、誰も人が集まらないくならない会合なんて誘わなければいい。新城はいつか笑って話せる時が来ればいいね、と言うが、僕だって実家のことや山手でも暮らせるほどのお金さえあれば閑静な住宅街に立つマンションにでも引っ越したいくらいだ。

時や場所を選べないのだからこっちだって同じだ。

沖縄へのアクセスが良いから蒲田に住んでいるだけであって、会社の近くに部屋を借りるような心境と全く同じだ。だから、息苦しさを感ずるから、僕の方からサヨナラしようと思う。どうせ小説家志望の僕の気持ちなんてあの人には解らない。

普通に生きていけばこそ後輩の面倒も覗れたかもしれないが、夢ばかり追いかけて生きている間に、後輩たちの方がどんどん出世をしていき、それが当たり前の世界に生きているにも関わらず、さも後輩に面倒みてもらって情けなくないのか？ だの恥というもの知らないのか？ だのそういう世間体と呼ばれるくだらない見栄や虚栄心で生きている人たちに囲まれて生活しては何もできやしない。何も言えやしない。そのつまらない考え方やプライドのせいで自殺未遂をしたこともあるし閉鎖病棟に3ヶ月間も入院することになってしまった。

しかしながら、今、元宮と新城のみが唯一信じられる友人として励まし続けてくれている。

いつかは夢観る小学生のような僕ですら大人になる。

その時、はじめて祈り続けてくれた人たちの本当の気持ちを知って僕は年甲斐もなく涙するかもしれない。まだ、今は解らない。生きている意味もその価値も何のために生きていくのかすらも。

ただ一つ言いたいことがあるとすれば、元宮、誕生日おめでとう。一日だけ早く生まれた先輩のわがままを一つだけ聞いてくれるとするならば、せめて一日でもいいから僕より長生きしてくれ。意図しないうちに仲間から離れていく、もう、これ以上の寂しさに耐えられそうにないからさ。

—アキラの日記—

絢香と身体を重ねてしまえば楽になるかもしれないと思っていた。でも、この心に少しばかりの懺悔の気持ちが込み上げてくるのは一体なぜなのだろうか。黒いオルフェ、G線上のARIA。僕は仏教徒でありながらも幾度となくキリスト教に改宗しようとした過去がある。隣で眠る絢香の純潔なまでの心を踏み躪りたくはない。けれども、そう決意すればするほど離れ離れになっていくような気持ちになる。

今から睡眠薬を飲んだとしても眠れないだろうと思い、せめて絢香を起こさないように側にしようと眼を閉じるのであった。

台風の来る頃には

カーテンの隙間から優しい陽が差し込む。絢香は寝返りを打ち始めるとウーンと寝ぼけ眼でスマホを手繰り寄せた。僕はしばらく様子を観ていたのだが、絢香が「アキラ。起きてたの？ おはよう」と言うので彼女の頭を軽く撫でながらおはようと返した。

まだ、15時の出勤までには早すぎる目覚め。絢香は寝ながら「アキラはなぜギターをはじめたの？」と尋ねてきた。僕は泣き止まない赤子をあやすように昔話しをするのであった。

「最初は友達付き合いでエレキベース買った。

当時はバンドブームだったからね、通販で2万円も出せばそれなりに観た目もよい楽器が手に入ったんだよ。高校生くらいの年頃って学園祭とかもあるから女子にモテたくて趣味ではじめる男子が多かった。僕も無意識のうちに多少なりともモテたらしいなあ～って思ったかもしれない。

みんなボーカルとかギターとか目立つポジションに行きたがるから、エレキベースをやってると複数のバンドから声かけて貰えて楽しかったんだけど、彼らはあくまでも学園祭というイベントだけのためにバンドをやっていたから、18歳も過ぎると就職や大学進学で楽器から離れていった。

だけど、幸か不幸か僕の友達フリーターしながらでもプロの音楽家になりたいって奴が結構いて、僕もその頃にはベースではなくエレキギターに夢中になってたんだ。エレキギターならば、弾きながら歌えるから友達付き合いが苦手な僕でも一人で楽しめるからね。

例えばさ、僕のようなモテない男はさ、少しでも女性との共通の趣味を多く持つべきだと思うんだ。

ギターだけでなく旅行やドライブ、映画鑑賞とかね。

まあ、女の子からモテる定番の趣味以外にも、女の子が好みそうな手芸やアクセサリー製作、イラストや絵本書いてみたり英会話スクールに通ってみたりさ。

もっと言うならば、僕は引きこもっていた時に、料理することだけが家族との唯一のコミュニケーションだった。3歳年上の姉が言うにはお弁当をつくってくれる僕のような男子は職場の同僚からも人気だという。

僕みたいに稼ぎが悪い男は、結婚したとしても、共働きが当たり前のように生きなきゃならないの知ってたから、せめて料理くらい作れなきゃ相手にもされないだろうからね。ギターは読書と同じで僕一人だけの大切な趣味の時間だけれども、歌うのが好きって人ならば、僕が伴奏して彼女や奥さんに歌ってもらえたら、それだけで立派な共通の趣味になるじゃん。

まあ僕は方向音痴だから車の運転にはあまり自信がないから、絢香みたいにドライブが趣味っていう女性とならばお互いに無い物を補いあってうまくやっていけると思う。ただ、小説家と占い師の二足のワラジで経済的にも安定しないから、少しでも若い人から興味持って貰えるように趣味だって色々と気を使ってるよ。その点、ギターはメンテナンスにもそんなにお金かからないからコストパフォーマンス良い趣味だと思ってるよ。」

僕は一通り話し終わると布団の中で絢香が腕を掴んで何かをねだるような表情を浮かべた。

「アキラはもうこれ以上、モテなくてもいい。」

絢香は僕のほっぺたに優しく口づけをすると、僕も強く絢香を抱き寄せてもう一度優しいキスをした。

「そういえば、なんでコンビニ行った時にあんなにお酒や食べ物を買ってきたの？」

僕は絢香がとった行動を不思議に思い尋ねた。

絢香は当たり前でしょ、と言わんばかりに逆に僕に言った。

「台風来る前に少しずつでも食料貯めなきゃ。沖縄の台風って凄いだよ。軽自動車ならば吹っ飛ばされて横転するくらいにね。だから、輸送経路がたたれてコンビニですら食料がなくなる。それが二、三日続く時もあるわけ。だから、出勤前にスーパー行って買い物しとかなきゃ。」

絢香は思いだしたかのように言うスマホで時間を確認してアラームをセットした。

「ねえ。それならば一緒に買いに行こうよ。」

カレーライスとかオムライス肉じゃがみたいなものならば僕でも作れるからさ。」
僕はすっかりと絢香と恋人気分でそう言った。

「ねえ、8月27日アキラ誕生日だったんでしょ？」

絢香はなぜか僕の誕生日を知っていた。確か8月が誕生日だとは言った記憶があるが日付までは話してないはずだ。僕はその通りだと言うと、絢香は誕生日パーティーしようと言った。

沖縄ではじめて経験する台風の恐ろしさとは裏腹に、数日前には一人きりで誕生日祝いのケーキを食べていたことを思えば、こんなに嬉しい誕生日祝いは他にない。たぶん、誕生日が一日違いの元宮も、顔も名前もわからないファンから「おめでとう」と言われるよりも、大切な人と過ごすお祝いの方が嬉しかったに違いない。絢香と共に過ごす琉球王国での日々は永遠にも思えた。しかしながら、天下をとるかどん底まで墮ちるか強烈な星の生まれである僕の運命は、絢香とのささやかな幸せでさえも追憶の彼方へ掻き消そうとしていた。

琉球王族の DNA

お昼前には絢香の運転する車でスーパーへと買い物へ出かけた。昨晚まではからっとした気候で夏真っ盛りの沖縄でも台風が暴風圏内に入ってくるとさすがに蒸し暑くて仕方ない。僕は絢香が運転する助手席で台風が通り過ぎる頃には時間をこじ開けてでも沖縄の親族の挨拶まわりに出かけなければならないと決心していた。なぜならば僕は高校を中退しているから学費には充てていないが大学へ通う費用くらいは母の弟から援助して頂いてるし、実は正社員じゃないのに一人暮らしできているのは母親を經由して親族から初期費用 60 万円も出して貰っているからなのだ。ちなみに、母親は 5 人兄弟姉妹の 4 女で最後に生まれたのが長男だった。

僕はお金にはあまりこだわりがなく自由な発想で生きていけるのも、沖縄の親族が地主だからだろう。

沖縄のおじいちゃんが亡くなった時、母親は相続権を放棄すると申し出たそうだが、そのおかげで幾ばくかの土地を分けて貰えることになり、土地を親族に売却するかわりに東京のマンション購入の頭金を作ることができた。

まあ、親族への挨拶まわりなどは本来であるならば長男の役割だと思うのだが兄貴がこの世を去ってしまった故に、末っ子の僕が長男の役割をすることになった。

信じる信じないは別として、四柱推命（しちゅうすいめい）で鑑定するならば、僕は長生（ちょうせい）という長男長女の役目をする運命のもとに生まれていたことになる。長生とは、例え次男だったとしても長男のような役割を与えられている。他に長生の特徴をあげるとするならば、なぜかわからないが他人から信用信頼される星で真面目に見られるという外面的性質を持ち、人生で例えるならば学校で勉強を学びはじめた小学生くらいの年頃にあたる。それゆえに純粹でピュアで人を疑うことをせず、人当たりも良いために比較的愛される良い星となる。

僕の場合は、年、月、日の 3 つの柱に長生がでているため、15 歳から晩年期までこの星の特徴を維持し続けるという星周りとされているのだ。

この四柱推命は生まれた時間がわからなければ、正確に運勢を読み解くことはできない。でも、そこまでの的中率を誇る四柱推命（しちゅうすいめい）だからこそ『運命は変え

られるのか?』という疑問がでてきて当然だ。結論から言えば運命は変えられるし、そもそも悪い鑑定結果など信じなければいい。

しかしながら、脅すように『地獄に落ちる』という罰論（ばちろん）を降りかざす占術師が、いざ自身が亡くなった直後に SNS で誹謗中傷されていたのをもし亡くなる前に観れたとしたら自分自身の生き様死に様についてどう思うだろうか。

僕ならば無名の庶民でもいいから惜しまれつ天国へと旅だっていきたいとつくづく思った。むしろ、無名の庶民こそが本当の人生の勝利者かもしれない。

宮沢賢治は、『雨ニモマケズ』という詩の結びに、そういうものにわたしはなりたい、と綴っている。

宮沢賢治と誕生日が同じという理由で僕も宮沢賢治とはシンパシーを感じることも多い。誕生日が一日違いのアーティストである元宮が歌った曲の中で、食べる分それ以上、身につける物それ以上、渴きを潤すのに何が必要？ とリスナーに問いかける場面がある。彼は成功したとしても決して贅沢しているようには僕の眼には見えない。例えば、ベンツを所有していることだって個人事業主みたいなものだから、会社の担保として持って置くならば、いざという時に高く売却できるベンツを選ぶのは合理的だ。

着るもの一つとってみても人気ブランドならば高く古着屋に売ることができる可能性がある。

単純に考え方一つで人はいつからでも幸福な人生が歩めるのだ。人と比べる必要はない。

もっと言うならば、資産家に生まれた僕の従兄弟だってお金の苦勞からは解放されているけれど、そのせいで選択の自由なく生きていくことを運命つけられていた。幸いなことに僕の従兄弟は勉強することとスポーツが趣味なので琉球大学の大学院まで通い博士号を取得するほどの秀才だし、妹と協力しあえば海外旅行にも行けるチャンスもあるだろう。

一つ問題があるとするならば彼が女性に興味を示さないという点にある。僕が彼の立場だったら遊びまくってたかもしれないと思うことがよくあるのだが、人間にはちゃんとそれぞれ生まれてきた役割や使命が違うのだ。しかし同じ血筋を持っているのにどうしてここまで生き方の違いが出てしまうのかと言えば、生まれ育った場所や家庭環境や教育、そして付き合ってきた友達の違いしか考えられない。

ちなみに、従兄弟は金持ちの生まれにも関わらず 2000 円のジーパンしか買えないと言いき、僕が履いている 2 万円のジーパンを指差して羨ましいと言った。いやいや、ちょっと待て！ ジーパンくらい買ってあげるからせめてこの先なんかあった時に助けて欲しいと淡い期待を抱いているし、そもそも、そのジーパンのお金は母親から貰ったお小遣いで買ったものかもしれない。で、あるとするならば金の出所は君のお父さんなんだけどなぁと思いだし笑いが止まらずに帰り道大爆笑してしまった。

新城は「アキラはいい年こいて母親から未だにお小遣い貰っていて羨ましいが、逆に情けなく思うこともある」とか言いながら、自分だって、部員さんから名古屋旅行に誘われた時には、実のお父さんから10万円も貰って大喜びで僕に報告しにきたくせに。

ちなみに、新城の奥さんの父親は社長なので、運良く玉の輿に乗ったと思っていたら、またまた、四柱推命にて彼は生まれながらにして玉の輿運を持っている星の人だということが判明したのだ。

しかしながら、彼が凄いのは、高卒で建築の作業員をずっとながいことやっていたにも関わらず、ある日を境に、IT系の派遣会社でキャリアを積み、地元の優良企業に勤めて、最終的には東証一部上場企業の正社員へと着実にキャリアアップしたところにある。それだけでも充分凄いことだが、彼はかなり熱心な仏教徒のため、世のため人のためにと活動することの方に最大の生き甲斐を感じているのだ。

ちなみに、新城は両親共に沖縄の出身の東京生まれ東京育ち。今でこそこんなに恵まれているように見える彼なのだが、出会った時は、信じられないくらいに貧乏だった。それを救ってくれたのが仏法であり仏法を通じて知り合った彼の奥さんなのだ。彼の奥さんはとても美人で地元でもちょっとした有名な人だった。化粧品会社の販売員というのは天職だと思う。あれだけの美人からだったら男の僕ですらシャンプーや石鹸を買いたいくらいだから、女性から人気が出るのも当然だ。まあ、新城の奥さんだけでなく、仏法で心を磨いてきた女性は皆、美しい。

全ては心こそ宝だ。心さえ磨いていけば、健康にもなるし、健康であるならば財産も貯まっていく。

小説家としても何を伝えたくて書いているのかと言えば、読んだ人たちが、何かしらの気づきを得て、今よりもさらに幸せになっていくような書き手になりたい。

琉球王族の血脈流れる、この身体の隅々にまで法華経という名の仏が得た最高の言葉を染み渡らせていきたい。宝玉といえども磨かなければ錆びてしまうという、沖縄民謡のていんさぐぬ花のように。

禁断の果実

イオンモールのスーパーに到着すると絢香は大型のショッピングカートを手にしてカゴを3台乗せた。

台風が急接近しているとあって駆け込みで買い物に来ているお客さんで店は大変賑わっている。

小さな子供連れのお客さんとぼったり遭遇してしまい、まだ小学校にも通っていない保育園児くらいの子供から指をさされて「あのおにいちゃんテレビ出てる人かな？」と幼子は母親に尋ねると「東京の人かもしれないねえ」と軽くあやして奥の方へと消えていった。それを受けて絢香は「さすが人気者」と吹き出すように笑い転げていた。

恥ずかしさと嬉しさが同時に込み上げてきた僕は無言でショッピングカートを押しながら、玉ねぎ人参じゃがいもなどのカレーにも肉じゃがにもできる保存が効く定番野菜をカゴにポンポンと放るのであった。

絢香はラッキーカラー黒のワントーンコーデで緑色のニット帽を被っている。フワフワしたそのニット帽の隙間からショートボブの艶やかな黒髪と耳に付けたイヤリングが蛍光灯に照らされて、遠目から眺めているとお忍びで買い物にきた芸能人のオーラを醸し出していた。僕はラッキーカラー赤のジャケットにインナーはアクアグリーンのサーフTシャツとラフなブルージーンズ。靴は黒いミドルカットの革のブーツというイタリア人が好むような原色使いで買い物に来たために、先程から子供たちからの熱い視線を感じているのだが絢香はそんなことはお構いなしに思いつくがままカゴにポンポンと食品を入れていった。お会計をする時絢香は現金で支払おうとしていたので僕はクレジットカードを店員さんに差し出して一回払いだと告げた。こまめにポイントを貯めておくことももう無意識のうちに身に付いた習慣になっている。

「アキラこの近くにゲームセンターあるんだけど寄っていったいい？」と絢香がいうのでUFO キャッチャーでもやりますかと僕はその誘いに乗った。

飲料から野菜、肉や冷凍食品までパンパンになった買い物袋を4袋ソアラの後部座席に乗せると僕たちはイオンモールに車を置いたまま徒歩でゲームセンターに向かった。

「ねえアキラどんなぬいぐるみが好き？」と絢香が尋ねてきたのでぬいぐるみなんて興味ないというフリをしたら、絢香が声高らかに笑い声をあげた。

「アキラ無理してカッコつけなくてもいいよ。アキラはぬいぐるみ大好きって鑑定結果に出てるよ！」と絢香は言う。確かにぬいぐるみを抱いて寝る方が安眠できる気がするので東京で暮らしている時にはお気に入りのぬいぐるみが幾つか部屋に転がっている。まさかそんなことまで見抜かれてしまうのかと僕は占術師という生き物が少し怖くなった。

「まあぬいぐるみ好きというか捕るのは好き」

僕は UFO キャッチャーの魅力を語った。捕れそうで捕れないあの仕組みをどうやって社交術とクレーン技術で落とすかというあれはパチスロに似ていると力説した。パチスロだってある程度回転数があがって捨てられている台からデータを読み解き高設定と思われる台があればハイエナの如く席が空くのをじっと待つ場合もあるし朝一のモーニングで当たりを引いて即換金すれば 4000 円くらいのお小遣いにはなる。まあ、朝並んだりする努力は必要になるが、そこまでするのならば、ちゃんと真面目に働いた方が効率よく稼げることに気づきみんなギャンブルから卒業していくのだ。だから今時のパチンコ屋なんて金持ちしか遊んではいけない。大人になってからゲームはあまり好きじゃないけれどなぜか UFO キャッチャーの前に通りかかると財布から 100 円玉が何枚あるかを確認している自分がある。絢香もたぶんマジカルカラー緑だから癒しが欲しくてぬいぐるみをゲットしたかったに違いない。

「あーこのぬいぐるみフワフワしてて可愛い！」

絢香はコアラのようなたぬきのようなゆるふわなぬいぐるみを指差してこの子を絶対に連れて帰ると宣言して僕に場所とりをさせて自分は 1000 円札を両替しにいった。

「わたし UFO キャッチャー得意なの。1000 円でゲットするから観てて！」と絢香は言う。とまず 100 円硬貨を一枚投入した。アームをボタンで操作して、正面からゆるふわのぬいぐるみを狙うとさらに横から覗き観て最終的な吊り位置を決定してアームはゆるふわなぬいぐるみを持ち上げた。一瞬、イケるかもと大はしゃぎで絢香はゆるふわのぬいぐるみを見つめながら「来い！ お願い一緒に帰ろう」となにやらオマジナイを唱えながら途中までゆるふわなぬいぐるみがアームにぎっちり掴まれたまま出口まで運ばれていくのを興奮気味に観戦していた。

だが、ぬいぐるみは他のぬいぐるみにぶつかって出口付近でひっくり返った状態で落下してしまった。

「ねえアキラもやってみてよ！」と言うので僕もポケットから小銭を取り出してトライすることにした。しかしながら、良いところまではいくのだが、なかなかお店側もそう

簡単には捕らせてはくれない。絢香はその後5回ほどトライしたところでぬいぐるみが獲れなかったので諦めるかと思いきやどうしてもこのぬいぐるみを捕るまでは帰らないと駄々をこねはじめた。僕は絢香に諦めるよう説得してみたのだが絢香は頑（かたくな）なまでに譲ろうとしない。僕は「じゃあ仕方ないなあ。江戸っ子の必殺技ですから待ってる。」と言い絢香を待たせておいて、ゲームセンターの店員を呼ぶことにした。

こういう場面では、女性店員ならばぬいぐるみを捕りやすい位置に移動してくれることがある。ふと思い出して、僕は近くにいた学生アルバイトではなく店の奥の方にいた可愛い女性店員に話しかけることにした。

「すみません。ゆるふわのぬいぐるみが獲りたいんですけど、少し動かして頂けませんか？ 実は今日は娘が誕生日でして。先程から妻が2000円ほど投資しているのですが全く動く様子がなくて。」

僕は女性店員に話しをかなり誇張して話しかけた。女性店員は快く応じてくれて UFO キャッチャーのガラス戸を開けてぬいぐるみを出口手前まで移動してくれた。少し触れるくらいで落ちそうだ。これならば100円のワンゲームで捕ることができそうだ。

「だいぶ移動させて貰ったのでこれで獲れると思います。」と女性店員が言うので、絢香が100円を投入してトライすることに。アームの先が少し触れただけでゆるふわなぬいぐるみは簡単にポロッと出口から転げ落ちて絢香は「ヤッター！」と大喜びでぬいぐるみを抱きしめた。女性店員は自分が景品を獲ったかのように「おめでとうございます」と言って紐付きの袋を差し出した。僕は矢継ぎ早に女性店員に次はあのクマのぬいぐるみが獲りたいです、とお願いをして女性店員はクマのぬいぐるみを手にして先程と同様に出口付近の触れればすぐ落ちるといようなポイントにクマのぬいぐるみをセットした。僕は絢香から100円を借りてターゲットを狙うと少し持ち上げただけでコロっとクマのぬいぐるみが落ちてきたのでめちゃくちゃテンションがあがってしまい絢香とハイタッチして女性店員にもありがとうございますと礼を言った。

ゲームセンターを出ると絢香が

「いやぁ面白かったねえ！ まさか1000円で2つも獲れると思わなかった。」と言った。

「まるで江戸の祭りだよ。小さい時に祭りに連れて行ってもらった時にさ、射的で欲しい景品があって父親に駄々こねてみたら、親父がテキヤのおっちゃんに交渉してくれてさ。金払うから景品売ってくれとか仕入れ値いくらなのとか話しているうちに、そのおっちゃんがうちもお客さんの目があるんで、獲れやすい位置に工夫するからお願いだから

ゲーム料払って獲ってくれってさ。その交渉術がゲームセンターでも通用するかどうかは店員との相性次第だな。

女性のアルバイトの子だったら結構獲らせてくれるもんだよ。母性本能や感情に訴えかけて話すのがポイントさ。」と歩きながら僕は絢香に持論を展開した。

「アキラって本当どうでもいいことにまでプロ意識持つのねえ。心理学を悪用しないでよね。さあ、帰ってカレーでも作ろう。」

ソアラの後部座席にぬいぐるみが入った紐付きのビニール袋を丁寧に置くと絢香は「今日は一緒に寝ようねえ。」と言いながら軽くポンポンと叩いた。

那覇新都心店の作業部屋まで戻ってくると 15 時 PM の出勤の時間まで、絢香と二人でカレーをつくっていた。その合間に簡単に昼食をつくってキッチンで食べながら雑談に華を咲かせて、やれ学生時代は貧乏でマックでポテトと 100 円シェイクだけ頼んで友達と恋愛話しに華を咲かせていたあの専門学校ではデザインを専攻していて趣味でイラストを描いていたからサイトのカスタマイズを頼まれているだけのたわいもない話して盛り上がり、昨晚のケンカなどなかったかのように僕と絢香は付き合いだてのカップルだけが味わえる幸せに酔いしれていた。僕が琉球王国に来てまだ数日しか経っていないのにこんなにも大切な思い出が出来たことに感謝している。けれども勇気を振り絞ってデートに誘ってくれた KAKO のことを思うと急に刹那さが込み上げてくることに対して、少しばかりの淡い恋心を胸に残しつつ生きていかなければならないのかと思い、僕の目の前にいる絢香がどこか遠くへと消えてしまいそうに思えて話中に夢中になっている絢香を強く抱き寄せて「あなたのことが好きです。」と耳元に囁いた。「急にどうしたの？」と彼女の言うセリフにも答えずにこの瞬間が永遠であることを強く願った。台風が来る頃には、部屋に缶詰になりながらも二人の愛を確かめ合う。その時神様は二人に問う。禁断の果実に手を出して楽園を追放されたアダムとイブに問いかけた質問と同じように。

マトリックスと成功の法則

14時過ぎに那覇新都心のおもろまち駅まで絢香に車で送って貰い、僕は沖縄滞在中はじめてモノレールに乗ることになった。絢香は台風の影響で休日となったのだが、店舗の様子を覗に行くというので僕たちは夜にまた誕生日のお祝いをしようと約束して別れた。ゆいレールのおもろまち駅から牧志駅までは2駅でちょうど良い運動になりそうだった。東京で使っていた Suica が使えるというので僕は改札をタッチアンドゴーで抜けると近未来のような可愛い車両が止まっている。

そのまま近未来的な車両に乗り込むとドアがゆっくりとしまりモノレールは動き出していく。走りだしてすぐに窓際の席から那覇新都心のビル群を一望できるスポットに来ていた。今夜には台風の影響でゆいレールが止まってしまうかもしれないけれどもミラクルスポットの本店のシステムだけは止めるわけにはいかないようだった。

牧志駅で降りると雨に打たれながらダッシュでホテル直結のショッピングモールへと駆け込んだ。ホテルのロビーには中国人の観光客が群れをなして座っている。騒がしい声、落ち着きのない立ち振る舞い。地元中華屋でも聞き慣れた中国語が飛び交う。それを横目にエスカレーターで2階まで登りすぐにピンク色がテーマカラーのミラクルスポット本店を見つけることができた。マジカルカラーの紫に身を包んだ方へ挨拶をすると、店長の金城さとみさんという自己紹介を受けて、店の奥でストーンの検品をしていた細身で髪の毛が長い女の子を紹介されてアルバイトの奈津美さんという名前であることがわかった。

金城さんと奈津美ちゃんはとても仲が良くしてストーンの検品をしながら雑談をして、研修とはいえ、鑑定師としてこの店に研修に来た僕は二人のマジカルカラーを尋ねた。金城さんは茶色いセミロングの髪をかき分けながらマジカルカラーは紫だけドラッキーカラーは白だと言う。奈津美ちゃんはマジカルカラー赤らしく感情豊かに身振り手振りを交えながらユーモラスに語る。僕はまっジョースでも飲みながら気楽にやりましようと言って本店での研修が始まった。

朝礼の最後に売り上げ目標を声に出して言うことや全国からひっきりなしに届く LINE に対応しながら、リアルでのお客さんがいたとしてもインターネットを優先することなどを知った。ストーンをカメラで撮影する際には2種類のライトと背景があり白系のストーンは背景が黒とかだいたい約束事があるらしい。そして那覇新都心店と同じように2時間ごとにチラシ配布数と鑑定数を報告することが義務つけられている。

しかしながら、鑑定と言っても、ショッピングモールに来られるお客さんはあまりいない。晴れの日などはショッピングモールの外に出てチラシを配るのだと言う。金城さんは店長らしくあまり無駄口を叩かずに黙々とLINEでの指示通りに動いているが、奈津美ちゃんはアルバイトと割り切っているためかやたらに僕に話しかけてきてはどうせもうすぐ辞めるから話すけれどこの会社は頭がおかしいと陰口を叩き、ティンバとの仲が良いので橋本さんには優しくするようにお願いしておくなどマジカルカラー赤の感情的な傾向が垣間見えて面白かった。ちなみにティンバも奈津美ちゃんも既婚者同士なのだが男女間の一線を超えているかのような話ぶりなので、僕も絢香とのこともあるのだしあまりプライベートには触れないようにしようと思うのであった。

17時には奈津美ちゃんは定時で帰って行った。僕は金城さんと二人きりになり気まずかったので幾つかこちらから質問してみたのだが、マジカルカラー紫のせいなのか、マジカルパーソナル守(かみ)の性格なのか金城さんはあまり多くまでは語らない女性で、彫りの深い沖繩顔をしているために若干近寄り難いオーラを放っている。しかしながら、深層心理には星(せい)を持っているのだと言う。この深層心理とは表にはなかなか見えない性質のことで星を持つ人は目立ちたいという願望を持っているのだ。そしてキラキラとした世界に行きたがる。金城さんはストーンのデザインを担当しているのでこの仕事は天職かもしれない。

夜も20時半を過ぎるとほとんどインターネットでのお客さんしかこないために、金城さんと僕は黙って作業をしながら、店仕舞いの仕方を教えてもらうのであった。21時には店をクローズさせてどんなに残業したくても21時半にはビルから出なければならない。台風が強くなるのは深夜にかけてがピークになるらしい。

国際通りで軽自動車横転しているのがニュースで流れていたがショッピングモールの裏口からドアを開ける時も強風の影響で身体全体に力を入れなければ開かないほどだった。僕は警備員さんに挨拶をすると、さてどうやって帰ろうか悩んだ末にタクシーで家元のマンションに向かうことにした。国際通りで待機していたタクシーに乗り込むと住所を告げ夜闇の静寂を切り裂きながらタクシーは那覇新都心へと走り出した。

タクシーに乗っている間、疲れがどっと湧き出てきて僕はスマホに届いていたメールをざっと確認した後に少しばかり瞳を閉じた。依然として雨足は強く、矢で打たれたかのように車の金属音と雨音が混じりあい不気味なほどネオンが輝いて見えた。反対車線を走る車のヘッドライトがヒュンヒュンと音を立てて流れていく。夏草が流れていくように儂さが心に残る。

一階がケーキ屋さんのマンションへとたどり着くと現金で支払いをしておつりをもらう。僕はそのおつりから缶コーヒー2杯分ほどのチップをタクシー運転手に渡してあげた。とうとうございますお気をつけてと云い車を出た。エレベーターで10階まで登るまで雨で濡れてしまったレザーのビジネスバックをハンカチで拭いた。

幸いなことに大事なデータが入っているノートパソコンは無事だったみたいで万が一

のために帰ったら外部メモリーにデータを移さなければならないと思い、ふと誕生日祝いをしようと言ってくれた絢香の表情がよぎった。今日は早めに帰れることを祈るのであった。

家元のマンションまで辿り着くと KAKO が出迎えてくれた。「お帰りなさい。今タオル持ってきますね。」と告げて KAKO は洗面所からバスタオルを持ってきてくれて僕はそれで髪の毛や身体を拭いた。スリッパに履き替えて奥の部屋へと案内されると家元と佳子先生がノートパソコンを広げてなにやら作業をしており、僕がお疲れ様ですと言うと家元が「お疲れ様。相変わらずカッコいいね」とクールに返事をした。

僕が売り上げ金をテーブルにだすと佳子先生が今日は台風だったから暇だったでしょうと言うので、インターネットの方はひっきりなしにお問合せが来て予想以上にバタバタしていましたと返した。KAKO がアキラさん夕飯食べました？ と尋ねて来たので空腹を誤魔化して食べましたと答えた。ついでに温かいコーヒーがあればお願いします、と KAKO に告げて僕は今日の報告を佳子先生に話した。一通り報告を終えると佳子先生がため息交じりに話し始めた。

「奈津美ちゃん辞めたいって言ってるんだ？」

佳子先生は顔に手をあてながらそう尋ねた。

「ええ。ここだけの話し田中さんの奥さんと馬が合わないようでして、後から入ってきたのに鑑定師気取りで偉そうにしているのが気に食わないみたいです。」

僕は温かいコーヒーを口にしながら本店の実情を話した。

「まあ、仕方ないんじゃない。田中夫妻はいちおう鑑定師として雇ってるんだし。奈津美ちゃんは会社に遊びに来てるようなものだからねえ。」

家元がそう言うと佳子先生は困った表情を浮かべて、「奈津美が辞めるのは全然困らないけれど金城さんに辞められたら困る、奈津美は金城さんの慰安のために雇っているだけだからさ」と言う。

隣りのリビングルームでは KAKO がなにやら映画を観ている。それに気づいて僕は佳子先生に尋ねた。

「KAKO さんなにを観ているんですか？」

「ああ。マトリックスだよ。成功法則が詰まっている名作だからねえ。昼間は THE シークレットをみんなで観てたんだけどやっぱり定期的に観るべきだよ。」

今日の深夜過ぎから台風がますます強くなって缶詰状態になるから、アキラ君も今日はおうちに泊まってマトリックス観てって。私もすぐに作業終わるから一緒に観よう。」

佳子先生はそう言うとパソコン画面に目を落として黙々とタイピングをはじめた。佳子先生と一緒にマトリックスを観るなんてとても嬉しいお誘いだ、僕の帰りを待つ絢香のことを思うと非常に心苦しく感じていた。これは仕事であり上司の命令なのだから不可抗力だ。台風が来る頃には二人の愛が試される。どれだけ甘い言葉を囁かれたとしても信じるだけの強さが僕たちにはあるはずだ。そう思っていた。すっかりリラックスモードのアイドル占術師 KAKO と白いワンピースに着替えた佳子先生の大人な誘惑。絢香との秘密の恋は音も立てずにどこかへ消えてしまいそうだった。

仮想現実と神々の演劇

深夜2時を過ぎた頃、台風はいよいよ勢いを増して窓ガラスと冊子（サッシ）の激しく揺れる音と雨音が鳴り響いていた。家元は奥の部屋で仮眠をとると言うので佳子先生と僕は6人がけのテーブル席にいてサイトのカスタマイズに取り掛かっていた。アイドル占術師 KAKO は映画マトリックスを見終わってから少し様子が変わって何やら悟りを得たかのような表情を浮かべながらリビングルームで読書をしていた。佳子先生が「KAKO ちゃん仮眠とってきていいよ」と言うので、KAKO は眠い眼を擦りながら玄関の方にある部屋へと帰って言った。佳子先生はコーヒー淹れ直すね、と言ってキッチンに立つと昼間に買ってきたパンがあるから一緒に食べようと言って簡単にハムとたまごをはさんでサンドイッチにしてくれた。

こうして深夜過ぎに佳子先生とお仕事をさせて頂いているとつくづくクリエイティブな職種に転職して良かったと思える。僕は社交性が高いパーソナル公（こう）になる前は、パーソナル創（そう）という鑑定結果がださされていて、パーソナル創は趣味に生きる性格のために人脈も勉強も横に横に広げていく特徴を持つ。高校中退してから主に肉体労働で生計を立ててきた僕は、鍼灸整骨院やセラピスト業を除いてほぼ男だらけの職場で長い時間を過ごしてきた。それはそれで面白かったのだが、元来、男ならではの縦社会が苦手だったので休憩時間のコミュニケーションなどが本当に苦痛で仕方なかったのだ。僕は車にはこだわりはないし女性とのお付き合いも真面目な方だからそういう人間は肉体労働者の中では割と浮いて見えるらしい。

まあなにせよ、普通と呼ばれることが苦痛だったのでコンビニのレジ打ちからキャリアをスタートさせて現場仕事、工場勤務、整骨院、リラクゼーションセラピスト、占い師と変化を楽しみながら着実にステップアップしてきたつもりだ。占い師というのは一昔前とは違いインターネットができなければ生き残っていけない。サイトのカスタマイズ一つとってみても特別に難しい知識が必要な訳ではない。サイトの作り方などはすでにインターネット上で誰かが勝手に無料で教えてくれているからそれに従ってヘッダーなどの写真加工などをすれば良い。コピーライティングも何冊か本を読んで勉強したつもりになっていたけれど、実際にはすでに売れている人の広告文を何度も観て真似するのが一番確実な方法なのだ。作家としても観て貰えるように書くコツみたいなものがあるとすれば読書さんのニーズウォンツを汲み取って毎日更新することだと考えている。まあなにわともあれ努力の甲斐あって頭脳労働者の仲間入りを果たせたのだしこれ以上望むものなど他にはないと思っていた。兄貴が亡くなるまでは。彼がこの世を去っ

てしまった以上、僕は例えどんな辛いことがあっても生き続けなければならないし親孝行をしなければならない。アキラという名前は文章の章からとって橋本章（はしもとあきら）と名付けられた。章には「しるす」という意味合いが込められている。

どういう経緯で文章というキーワードが出てきたのかは親以外に知る由もないが、様々な占いを通して観ても文学者というのは天職であるという結果が導きだされてしまうのだ。

佳子先生とサンドイッチを食べながら雑談をしていると「名は体を表す」というキーワードが出てきた。

「私は昔から趣味で姓名判断をしているのだけど、これがかなりの確率で当たるのよ。クライアントさんには姓名判断は関係ないと言っているけれどそれは名前は容易なことでは変えられないから言ってるだけなの。歴史に名を残すような偉業を成し遂げた人の姓名判断をしてみるとやはり大吉数と出る。アキラくんの本名の橋本章もかなり良い画数で恵まれた人生を歩んできたことが解るわ。名は体を表すからね。」

佳子先生は深夜過ぎになると声色にセクシーさを増してまるで映画のワンシーンを演じているかのようにそう言った。

「名は体を表す、ですか。確かに橋本章という名前には、文学で名を馳せて欲しいという親の願いが込められています。僕自身は無意識のうちに、偏差値教育から離れて引きこもっていた時もひたすら本を読んでいました。この独学での勉強がいつかは報われる時が来るとそう信じて。話しは変わりますが、僕が学校の勉強に興味を示さないのは、枠に囚われたくないからなんです。学校って歴史の教科書問題とかもあって、何が正しいのかとてもあやふやな面があります。それよりは二宮金次郎みたいに働きながらでも読書を糧として這い上がりたい。ロウソクの科学で有名なファラデーも昭和の文豪吉川英治も正規の教育を受けないままに社会に出ました。そのお陰でみんなが盲点となるような事象に気づく眼を与えられたのだと思います。

僕は学業を放棄したつもりもありませんし、可能であるならばいつかは大学のキャンパスライフを送るのが夢です。しかしながら、今日の日本のような学歴社会にあって引きこもりの方にも夢を諦めて欲しくないんです。だから僕は絶対に負けられない。どんな道に進もうとも例えそれが趣味や道楽と下に見られようとも、道楽といえども突き詰めれば学問に到達するはずですから。」

僕は真夜中過ぎとあってかなり熱い夢を語ってしまった。佳子先生は最後まで話を聴いてくれた。

「アキラ君は結婚したいと言ってたけれど、結婚は成功してからの方がいい。あなたは

必ず成功する星の生まれだから人生で最高の時に最高の伴侶と巡り合うのも宇宙の法則の一つだよ。アキラ君の年齢が35歳だったとするならば、どんなに早くても成功するのは40歳を過ぎていると鑑定結果に出ています。アキラ君に好意を持っている絢香やKAKOちゃんには悪いけれどもアキラ君は一般的な結婚には向いていません。」

佳子先生は衝撃的な事実を語りはじめた。KAKOが僕に好意を持っているなんて初耳だ。

「確かに一般的な結婚という形式には当てはまらないかもしれませんが。絢香さんやKAKOさんが僕に好意を抱いているのかはわかりませんが、佳子先生が言うように小説家として成功をおさめてからでなければ結婚は考えられませんね。子供ができてしまえば共働きって訳にはいかないでしょうから。夢を夢のまま諦めたくはありません。」

僕は一通り話し終わるとタバコが吸いたくなってきた。そのことに気づいたのか佳子先生が「タバコだったらキッチンで隠れて吸いなさい。うちの副社長も雨の日はキッチンでタバコ吸うから灰皿もあるし。」と言って佳子先生はキッチンに灰皿を用意してくれた。こういう大人な対応をされると男は弱いものだ。絢香との恋人気分に浸っていた日々はもうどこか遠くへと消え去ってしまったかに思えた。今、僕の目の前にいる佳子先生の瞳の下、泣きぼくろが妙に大人なエロスを感じさせてくれる。僕はポケットからタバコを取り出してコーヒーを飲みながらぶかぶかと煙が換気扇に消えていくのを見つめていた。

「アキラ君。マトリックス準備しておくからゆっくりしてリビングに来てね。」

佳子先生は奥の部屋へ消えて行くのを僕は目で追いかけていた。サンドイッチを口にすると学生時代の夜食を懐かしく思い返していた。あの頃は家族に守られて社会の酸いも甘いもよく知らずアルバイトで得た数万円のお小遣いに大歓喜して子供の頃から我慢してきたジュースやお菓子などを大量に買ってきては漫画を読み自堕落的な暮らしでも幸せならばそれでいいと思えた。大人になってからは仕事の合間にこうして上司と深い話しができることに最大の喜びを感じている。

僕がリビングルームへ向かうと佳子先生はソファーに座り準備万端で部屋の灯りを暗くした。そして、マトリックスは画面から放映されたのであった。この映画は天才ハッカーがある出会いをきっかけにこれまで仮想現実生きていたことを知ってしまうというストーリー展開だったはずだ。佳子先生は僕の隣にいてなぜかはあはあと息荒く観戦していたのだが、真夜中過ぎの映画鑑賞とあってその息づかいはとてもエロスに感じてしまうほど艶かしい。僕はストーリーに入り込めずに知的でエロスを感じさせる佳子先生のことが異性として気になりはじめていた。ベッドではどんな甘い声を出すのであろうか。疲れがどっと噴き出てきて、ふと瞳を閉じると佳子先生の息づかいと映画の音声とBGMがリアルでの現実から解放されたように感じられた。これは夢なのかそれとも仮想現実なのか。神様は絢香とKAKOという恋人候補だけでなく佳子という理想的な女上司までも同時に与えてくれた。

僕は途中から完全に眠くなってしまい映画を観ているフリをして全く別の妄想を膨らませていた。ふと佳子先生から声をかけられてた時には映画はエンドロールが流れていて「いやぁ面白かったねぇ」とソファの上で軽くストレッチをしながら「どうだった。何か気づいたことあった？」と聞かれたので「もしかしたら今だって神様に動かされているだけで仮想現実には生きているかもしれませんよね。」と僕は感想を述べた。

「要するに、全てダウンロードすればいい。」

佳子先生は意味深な発言をすると僕はオウム返しのように「ダウンロード、..。」と呟いた。「さて、アキラ君は仮眠とるでしょう。寝袋と布団どっちがいい？」と聞かれたので寝袋がいいです、と力なく答えた。佳子先生は奥の部屋から寝袋を運んでくれると私も今日はリビングルームで仮眠とろう、と言ってソファに寝転び掛け布団だけをかけて「なんだか修学旅行みたいで楽しいね！」と言った。

奥の部屋には家元が寝ているし KAKO も仮眠と言ったまま起きては来ない。佳子先生のグラマラスな胸の膨らみを観て下半身が反応してしまい明け方の誘惑と必死に戦っていた。この世の中、全ては神々の演劇という言葉がある。どんなに正義や正論を振りかざしてもこの瞬間を楽しめなかったら人生の敗者なのだ。地位や名誉や肩書きなど要らない。欲しいのはありのまま輝く未来だけ。隣りで佳子先生は可愛い寝息を立てて寝ている。僕はソファの下、ミノムシのように寝袋にくるまれたまま赤子のような気持ちで佳子に甘えるのであった。

宮沢賢治と秋の修羅

早朝までの映画鑑賞から少しばかりの仮眠をとり僕は目覚めた。マトリックスの影響で夢にまでユートピア的な無声映画を観てしまって僕はスマホに夢日記を記した。隣のソファで寝ていたはずの佳子先生はすでに起きてモーニングコーヒーを飲みながらパソコンの前にいる。僕はおはようございますと挨拶をすると朝食はご飯がいいかそれともパスタがいいかと尋ねられたので、朝から甘えてパスタが食べたいですと言うと佳子先生はキッチンに向かった。冷たいコーヒーとミルクを運んでくれたので、僕はアイスコーヒーにミルクを混ぜながら昨晚の気づきを振り返っていた。

「全てダウンロードすればいい」と佳子先生はそう言った。一体、どういう意味が込められているのだろうか。僕はノートパソコンを開き記事のネタ用のブログを展開する。ここ最近は何香や KAKO とのこともあり人生で三度訪れるモテ期という事柄について記事を書いていた。ダウンロードとはパソコン内にアプリケーションソフトをインストールすることだけを指す言葉と思っていた。佳子先生は「全て」という言葉を添えた。とするならば、生身の人間の脳内にも、パソコンのような機能が働いてたとして、必要な情報はインストールすれば良だけの話だ。これは成功の法則の一つかも知れない。僕はそう思った。例えば、僕は作家になるにあたっては漢字くらい書けなければ話しにならないと思い込んでいた。パソコンが発明される前までは、漢字の予測変換機能があるお陰で僕のような漢字が苦手な人でも簡単に執筆できるようになってしまった。もっと言うならば、辞書ですら必要なくなってしまった。インターネット上で検索すれば漢字の意味や成り立ちまですぐに調べられるからだ。そのお陰で暗記することにはもはや価値が無い時代になり、僕のような中卒でも高い学費を払って無目的に大学に行くのが馬鹿らしくて、その貴重なお金を参考書代や交際費や旅費に充てることができる。作家として生きていくには充分過ぎるほど全てが与えられた環境に生きているのだ。

人はお金を稼ぐ目的すら忘れて貴重な時間を仕事だけに費やす。別に悪いとは言わないがお金が幸せにしてくれるわけではない。使いきれないほどのお金があったとしても、健康でなければ食べることや寝ることなどの多くの幸せを感じれなくなる。そして、健康というけれども全ては『こころ』から始まっているのだ。

何香と身体を重ねてみて気づいたことと言えば、男の性欲など一回発散してしまえば綺麗さっぱりなくなってしまう。同じ女性と2回もセックスしてしまえば、もう身体の結びつきには興味がなくなってしまう強い結びつきがなければ心も身体も離れ離れになっていく。

この当たり前の事実を当たり前として教えてくれる大人などいない。大抵、そういうことは野暮ったく聴こえるし小説でも読んで学んでおいて欲しい教養だ。

でも、逆に言うのであれば、当たり前のことを当たり前として教えられるのは小説だけに与えられた権利かもしれない。僕も自叙伝を書いた時には発表するのが恥ずかしくて友達に読んでもらって感想を聞いた。

体験談にこそ幾つもの真実が散りばめられていると考えているし僕が心揺さぶられるのも大抵は無名の庶民の体験談なのだ。ファンタジーの世界などリアルな痛みも感じない作品は僕は好きじゃない。宮沢賢治の作品が好きなのはそこに確かな庶民の痛みや苦勞を感じれるからなのだ。時に哲学のようであり詩的であり、かと思いきや、思いっきりサイエンスフィクションを感じさせる話に騙されて考えさせられたり、と彼の作品には火地風水の自然描写だけでなく、確かな何かがあるはずだと感じる。同じ仏教を実践してきたぼくだからなんとなく解る。何が正しいとか何が間違っているとかそんなちっぽけな宗教観ではない、宗教的寛容の境地に至っていたはずだと考えている。作家には哲学や美学が必要だと思っている。哲学なき作品をいくら4000冊も読んだとしても心が揺動かされることはない。逆に言えば、心の琴線に触れて魂が浄化されるたった一冊の本さえあれば良いのだ。究極を言えば人生は暇つぶしゲームかもしれない。食べる物着るもの住むところまでも最低限の権利として認められている日本においては、借金さえなければ健康的で文化的な人生を歩んでいくことができる。生まれ付き障害を持って生まれてきた人たちがいることをつつい一般の僕たちは忘れて生活している。いざ、目の不自由な人を目の前にしては僕だってどう接して良いのかわからない。けれども、心に寄り添う、その気持ちさえあれば僕たちは上手くやっていけるはず。あなたにとって大切な物はなんですかと問われたとして、僕にとって大切なのは物ではなく人です、と言える大人になりたい。

「全てダウンロードすれば良い」

考えれば、考えるほどに謎だらけの迷宮に入り込んでしまう。いつかは佳子先生のように迷いなく直感や感性のみで生きていけるようになりたい。ダウンロードすれば良いだけの人生なんて僕にはつまらなくてつらくて仕方ない。そんなの機械でもできるような仕事や生き方は好きじゃない。むしろ憎悪まで感じる。

今日も機械的に上司に言われたことを言われたままにこなすだけの日々。恋人もなく数少ない友達も結婚して離れていった。そんな40歳だけは迎えたくない。

先輩の方が数多く失敗するのは後輩のためでもある。

後輩たちがあんな風にはなりたくないと思ってどんどん優秀になっていく。それが当たり前の人生だ。僕たちだって先人の偉大なる発明によって豊かな暮らしができていますが、その成功の陰には数えきれないほどの失敗や悔しい涙や悲しい別れがあったはずだ。

宮沢賢治のように仏道に入ったがゆえ未婚のまま亡くなっていった人たちもいる。

僕はどうだろうか。宮沢賢治をリスペクトしているといいながら、絢香との誕生日祝いの約束を守れずに、KAKOや佳子先生たちと楽しく一夜を過ごさせてもらった。僕だって宮沢賢治のような純粋さが欲しい。

G 線上のエリア。

せめてこの瞬間を止めておくれ。

バラバラのパズルのピースがようやく完成する。

その時、天使のように無邪気に笑う君が横にいる。

悲しみも憎しみもジェラシーも、、、

全てを愛する力に変えられたのならば。

その先にある未来をあなたを守りたい。

一占術師・アキラ

色気の星と人気商売

佳子先生との朝食はボロネーゼのスパゲティとサラダがテーブルに並べられた。佳子先生はマジカルカラー白のワンピースに身を包んでおりジブリミュージックをパソコンから流してくれて、部屋には一流ホテルのラウンジのような清々しい空気が吹き抜けていた。

雨音は依然として強く、台風が明けるところにはサイトのカスタマイズも終わり新しいネットショップが立ち上がる。ボロネーゼは佳子先生が手間暇をかけてホールトマトからこしらえた本格的な味がする。ふと粉チーズをふりかけようとして手を伸ばすとタバスコをとろうとした佳子先生の右手と接触してしまい、佳子先生の手その温かなぬくもりに家族愛を感じてしまった。血の繋がりはないとはいえ、4歳歳上の佳子はプライベートの相談も親身になって聴いてくれるおねえちゃんのような存在だと思っていた。彼女はモーニングルーティンのメールチェックを終えるとこの先の予定について尋ねてきた。

「アキラ君はいつまで沖縄にいられるの？」

佳子先生はボロネーゼにタバスコをかけながら僕に問う。

「サイトのカスタマイズが終わる頃には東京に帰ろうと思います。」

僕はオレンジジュースを飲みながらそう言った。

「解りました。では、絢香に那覇空港まで送るように言っておきますから」

佳子先生は僕と絢香の関係を知ってか知らずか悪気なくそう言うとなんか一人で大丈夫ですからとやんわり断った。

「ひょっとして絢香との間に何かあったの？」

パソコンから流れるBGMは僕の心模様を映し出すようにしっとりとしたミディアムバラードへと変わった。

「いえ、特別なことじゃありません。絢香さんにはプライベートでもお世話になりっぱなしでしたから、帰る時くらいはせめて格好つけさせて欲しいです。」

僕はまるでロックスターにでもなったかのように意味深な発言をしてしまった。佳子先生はその隙を見逃さなかった。

「まあ、絢香だけでなく KAKO ちゃんもあなたに好意を寄せているでしょうから、色々辛いね。」

佳子先生の泣きぼくろが妙にセクシー過ぎて僕は朝から変な気分になってしまいそうだった。

「彼女たちはまだ 20 代後半で一般的には結婚の適齢期です。僕なんかと遊んでいるうちに大切なことを忘れて欲しくないですから。」

そう真面目そうなフリして言った僕は自分でも八方美人だとわかっている。

「全然気にしなくていいよ。彼女達だって一般的な結婚には向いていません。だって占い師ですから。」

佳子先生は人生を達観したような目線でそう言った。

「まあ、アーティストと言えば聴こえが良いかもしれませんが、所詮は人気商売。時たま自分自身がホストクラブの男のように感じることもありますよ。」

うまくいきそうにない恋愛を応援しているうちに、クライアントさんの方から好意を寄せられる。たぶん僕だってその瞬間は間違いなく擬似恋愛を楽しんでいます。惚れた方が負け。なんだかリアルな対面鑑定ばかりやっているといつの日かお客さんと占術師の間にあるレッドゾーンを飛び越えて身体の関係を持ってしまう、そんな気がするんです。」僕は佳子先生の誘導尋問に引っかかってしまったようだった。佳子は間髪いれずに質問をする。

「アキラ君だったら大奥（おおおく）だってつくれるわよ。あなたには他の一般人には無い独特の色気がありますもの。確か四柱推命では壬申（みずのえさる）でしたよね？」

「確かに日干は壬申です。色気があるとはよく言われますけど自分では自覚ないです。」僕はうる覚えの知識を引用してそう話すと佳子先生は深く頷きながら言う。

「あなたは色気の塊みたいな人物です。あくまでも四柱推命と現実の姿を照らし合わせてみただけなのだけれども良く当たっていると思います。」

例えば、アキラ君は趣味でギターを弾いているらしいですが、女という生き物は男の指先をよく見ているものです。こんなの朝から失礼かもしれませんが女は指先での愛撫に最大のエクスタシーを感じる生き物ですから、アキラ君のような手先が器用な男

性はそれだけで性的な対象として見られがちです。私だってあなたのその繊細な指先で撫でまわして欲しいわ。」

佳子先生は男にとってミステリアスでエロスを感じる話題を話しはじめた。壬（みずのえ）と偏印（へんいん）の組み合わせは色気の塊、四柱推命の鑑定師に言わせればそうかもしれない。単純にマジカルカラー緑だから癒し系に見えるとか言っているけれども、深くまで掘り下げる時には複数の占術を使いこなす方が的中率もあがるものだ。

「佳子先生とならばいつでもお相手して欲しいです。

僕は歳上の女性には強い憧れがありますから。」

いよいよ性欲が抑えきれずに僕は佳子先生にそう言った。女は40歳くらいの淑女（しゅくじょ）が一番エロいことを考えている。佳子のように経済的に成功している女ならば年下の可愛い男を飼い慣らしたいと思うのは自然なことだろう。

「では、東京に出張した時にはこちらからお誘いします。でも、もうアキラ君は私たちから逃げられません。上級鑑定師のアキラ君には初級鑑定師の女性達の憧れの的になってもらわなければ困ります。」

佳子先生は冷静さを取り戻してそう言うと思い出したかのように僕にお願いことがあると言ってきた。

「先週、うちの協会に入会してきた東京の子。

名前は、星崎詩音ちゃん。この子はまだ初級鑑定師なのだけれども、実家が相当な金持ちなのよ。しかも一人娘でね。うちの会長も話しもできないくらい経済界に大きな影響力を持つ大財閥の娘さんなの。

アキラ君は継続してインターネットの新宿店を任せたいと思っていますが、星崎詩音ちゃんの面倒を最優先で観て欲しいのよ。」

「大財閥の御令嬢、星崎詩音さんですね。かしこまりました。失礼のないように接待させて頂きたいと思います。」

「詩音ちゃんは音楽が好きみたいだからアキラ君に任せたいと思っています。詩音ちゃんがその気になってくれればお父様からのご融資を受けてミラクルスポットの東京進出の夢も叶いそうです。くれぐれも星崎詩音ちゃんのサポートを第一優先にして下さい。」

星崎詩音という大財閥の一人娘の登場によりデザイナー兼鑑定師の絢香とアイドル占術

師 KAKO のパワーバランスは崩れ落ちつつあった。占い師だって所詮は金持ち相手の商売なのだから文句も言えない。東京進出の夢は叶わないかに思えたが星崎詩音の気分次第では幾らでもチャンスが訪れることをこの時はまだ誰一人として信じてはいなかった。

哀愁の帝国ホテル

2015年初秋の東京、太陽星座が乙女座から天秤座へとシフトしてく大切な季節の変わり目。銀杏並木（いちょうなみき）の枯葉が舞い散る頃、人恋しくさせるこの時期の東京都心は心なしかしみりと静まり返っていた。長年の友人が天運鑑定を受けたいと申し出てきたので、僕は帝国ホテルへと向かっていた。15時からのセッションにはまだ早過ぎる到着だったため、僕はタバコが吸える喫茶店にいて一人鑑定書と睨めっこしていた。今日セッションする予定の桐山誓（きりやまちか）さんは僕がセラピスト業界にいた頃に、掛け持ちでやっていた倉庫内軽作業のバイト先で仲良くなった子だ。見た目には綺麗でおしとかにもみえるのだが、桐山誓には誰にも言えない幾つもの秘密を抱えながら生きてきたようだ。

うちの占術では、マジカルカラー白と出ているために、このマジカルカラー白は人や環境の影響を受けやすい性質のため、様々な人種が入り混じる倉庫内軽作業は彼女にとってとても生きづらそうな現場だった。そのせいで鬱病と診断されたらしい。長年付き合ってきた友人達にも言えることなのだが死にたいくらい辛いのであれば逃げ出せばいい。僕は実の兄貴を自殺で亡くした立場もあるが、自分自身も自殺未遂を遂行した経緯があるから今日は桐山誓と真剣な話しをするつもりで準備していた。

14時過ぎになり有楽町付近で待機していた僕は日比谷の帝国ホテルへと向かった。たぶん誓はこういう場に慣れていないから早めにホテルへと来ているはずだ。

少し早い足取りで日比谷公園の通り沿いを歩いていた。先ほどから犬を散歩させている上品な女性や仲良くウォーキングを楽しんでいる老夫婦たちとすれ違いここは由緒ある千代田区の歴史を感じさせるセレブリティが住む土地柄だと痛感したのである。

帝国ホテルのロビーを抜けるとヒステリックグラマーのジーンズに白のロングTシャツ、その上に紺色のカーディガンを羽織っている桐山誓を発見した。僕は久しぶりの挨拶もそこそこにしてすぐさま1階のカフェテラスへとエスコートしてウェイトレスになるべく窓際の席に案内してくれるようお願いした。

「いやぁアキラ君今日は忙しい中ありがとう」桐山誓は運ばれてきたアイスコーヒーを飲みながらそう言うと僕は別に忙しくはないから大丈夫だとそう言った。

「さて、今日は鑑定する約束だったね。どんなことで悩んでいるの？」
僕は桐山誓に尋ねると彼女は箇条書きにしてあるメモを僕に手渡して、実はね、と話を切り出した。

「私、マジカルカラー白で深層心理が樹（き）じゃない？ 職場での人間関係が辛くて心療内科に行ったら鬱病と診断されたの。アキラ君も知っての通り摂食障害もあって、友達もいないし、今はなんだか生きていくこと自体がとっても辛いの」

「職場の人間関係かあ。まあ、マジカルカラー白の人が悩みがちなのは人間関係だけだよ。それに深層心理の樹からは少し感情的な好き嫌いがはっきりでやすい性質を持っていると出ている。実は誓さんのマジカルパーソナルは空（そら）なので、仕事自体はとても好きな人だよ。なぜならばパーソナル空を持つ人は、キレもので頭の回転が早し準備段取りが得意だからリーダーにもなっていける。たぶん人間関係で辛いと感じるのは、マジカルカラーの方だと思います。

倉庫内軽作業というのは、一人で黙々と作業できる利点がある反面、やはり向上心がある方は少ない。なぜならば、アルバイトの大学生を除いては、お金のために仕方なくやるのが倉庫作業だからね。でも決して、全ての倉庫内軽作業が悪いのではなく、たまたま、誓さんの勤めている会社がブラック企業かもしれないということなんだ。環境を変えてみるのも変化することが苦手な深層心理が樹の人には最終手段かもしれないけれども、鬱病になるくらいだったら休職してもいいかもしれない。命は大事にしなきゃいけないよ。」

「確かに、向上心がある人は一人もいない。私、アルバイトだけど目の前の仕事に全力投球したいの。それに日本語講師の資格とることも考えている。ただ、今は摂食障害とかあってお金がないのよ。摂食障害は過食と拒食の両方あって私の場合はたくさん食べてから喉に手を突っ込んで強制的に吐くを繰り返しているから食費だけで月に5万円以上かかってしまう。どうしたら良いのかはお医者さんにもわからない。」

桐山誓は深くため息交じりで話し終えると少しうつむいた。

「確か、お父様が山梨に住んでいると言ってたね。

誓さんの天輝地が南西と出ているんだけど、今住んでいる方角から南西には山梨がある。それにもともとバイオリズムで運気の低迷している時期に一番引っ越してはならない場所に来てしまった。たぶんこれからの5年間は治療に専念することになると思います。どうだろう、鬱病と診断されて東京で疲弊しているくらいならば、鬱病と摂食障害を治すと決めて山梨の大自然の中で自然治癒を試してみても良いと思う。

深層心理に樹を持つ人は、大自然や樹木や癒しがキーワードだから、まだまだ人生これからが長いのだし、素直にお父様に頼って山梨で静養する。そして、徐々にアルバイトからまた始めてゆくゆくは生まれ育った横浜辺りで港や自然豊かな土地で暮らしながら、都会や海を行ったり来たりする。誓さんの鑑定書からはそんな未来がイメージできます。それに外国人講師の需要はあまりないかもしれないけれど、英会話くらいはできた方がこの先の未来は楽になっていきます。」

「外国人講師ダメですか？」

桐山誓は少し肩を落としながら尋ねてきた。

「外国人講師は一時はニーズがあるかもしれない。けれども、彼女たちは日本語を習いに来日しているのに対して、日本はこれから少子高齢化の影響で人口が減っていきます。人口が減るということは日本の経済が衰退していくことが読み取れますので、外国人に日本語を教えるというよりは、僕たちが英語をマスターして英語圏の国へ出稼ぎに行くような未来も想定しなければなりません。誓さんは37歳でしたね。お父様が生きてきた時代は豊かで良かったと思いますが、僕たちはこの先もまだまだ長い人生を生きていかなければなりません。だから、途中で休養をとろうがゆっくり休み休みでも前へ前へ進んでいくしかないのです。

僕だって通信制の大学に通うことを検討していますから、お互いに頑張り過ぎずにありのまま生きていきましょう。」

僕は最大限に励ましの言葉をかけると桐山誓の表情がぱあっと明るくなった。

「先生、今日はありがとうございました。山梨に帰れるかは父親の許可がいるのですが、前向きに検討させて頂きたいと思います。それから向精神薬なのですが、これは突然やめたらまずいですかね？」

誓は最後の最後にナイーブな質問を僕に投げかけた。

「まあ、これは鑑定師としてでなく、友人として言わせてもらうならば薬はちゃんと飲んだ方が良いです。

医者も治療計画を立てながらそのガイドラインに沿って薬を処方しているはずですから、鬱病は脳の病気だから甘く見ないほうが良いです。ひょっとしたら、うちの亡くなった兄貴も鬱病だったかもしれない。彼はそのせいで誰にも気づかれずに死を選びました。誓さんにはそうなって欲しくありません。薬を飲むのは苦痛に感じることもあるかもしれませんが、ちゃんと治してから職場復帰の方が良いです。当たり前のことばかりお話しさせてもらいましたがその当たり前のことを人間は忘れがちです。食べること寝ること遊ぶことその細やかな幸せを噛み締めながら共に生きていきましょう。誓さんは決して一人ではないです。

お父様や僕だっていますし、亡くなられたお母様もきっと天国であなたのことを見守っているはずですよ。」

「はい。解りました。色々ありがとうございます。
亡くなった母と天国でピザを食べるのが私の夢です。
精一杯生きなければ天国に行けないと思いますので、これからも自分らしくマイペース
で頑張っていこうと思います。ところで先生はどうなんですか？」
桐山誓は今後の決意を述べた後、そう尋ねた。

「このあと 17 時からここ帝国ホテルで面接があります。なにやら大財閥の娘さんらしい
ので緊張していましたが、誓さんだって社長令嬢なのですから、お話ししているうちに
緊張が解きほぐれてきましたよ。
ありがとうございます。また、何かありましたら宜しくお願い致します。」

帝国ホテルの玄関口まで桐山誓を見送ると、時間潰しのために日比谷公園に行くことに
した。薔薇の花たちが僕の乾いた心を潤おしてくれ、なにやら迷い猫たちがどこからと
もなく訪れては秘密の抜け道から去っていった。これから面接をする星崎詩音の鑑定書
をカバンから取り出して眺めていた。マジカルカラー藍（らん）、深層心理は星（せい）、
マジカルパーソナル匠（たくみ）、この全てを数値化すると『777』。美意識にこだわりを
持ち、深層心理では目立ちたいと欲していて、仕事では天才肌でスペシャリストタイプ。
ベンチに座りながら暇潰しに星崎詩音を宿曜占術で調べてみることにした。1993 年 9 月
13 日生まれ。

なんとこの宿曜占術でも『星』と出てしまった。僕の奎宿（けいしゆく）と星崎詩音の
星宿（せいしゆく）は最高の相性である榮親（えいしん）の関係性だ。
僕はさらに四柱推命でも無料サイトで星崎詩音と僕の相性を調べてみた。辛口のサイト
にも関わらず相性 80 パーセント以上と出て運命の赤い糸で結ばれているという鑑定結果
がでる。

こんなにも『星』というキーワードを持つ星崎詩音とは一体どんな女の子なのだろうか。
僕は生まれてはじめて武者震いというものを経験していた。占術師としては運命の人と
でも呼ぶべき相性を持つ星崎詩音は、僕のような落ち目の旧家の出とは違い間違いなく
大財閥の娘であることには違いない。絢香との淡い恋の物語の決着は別れも告げずに帰
るといふほろ苦いものであった。まだ会ってもいないお客さんに運命を感じてしまう
とは予想もできない事実だった。

星崎詩音とラッキーセブン

僕は日比谷公園内にある売店でブラックコーヒーを買い管理人に見つからぬよう隠れてタバコを吹かしていた。東京はもうすっかり秋めいていて、中秋の名月が見られる頃には月見バーガーなどの限定商品が店頭に並ぶに違いない。どこか遠くの方で管楽器の音がしている。友人の桐山誓との鑑定セッションは長い時間が必要になるだろうが占術師として伝えるべきことは全て伝えたつもりだ。桐山誓は『祈り』という小説を書いている途中でスペイン語で祈りとは『レサル』ということまで調べ上げていたらしい。というのも、小説家志望の僕の筆がなかなか進まないことを憂いて励ますつもりで書き始めた小説だから物語は途中で頓挫したまま放置されている。桐山誓とも不思議な関係だ。付き合っている訳でもないのに色々と親身になって執筆や絵本作りを手伝ってくれる。彼女はビーズアクセサリーの講師の資格を持っていて、他にも調理師免許や医療事務など履歴書に書ききれないくらいの資格を持っている。

彼女から男が手芸をやった方が人気が出るからと言われ不純な動機ではじめたブログは、はじめのうちは好き勝手に書いていて面白かったのだが、読書さんを飽きさせないようにとどんどんエスカレートしていった最終的には占術男子・紫炎（しえん）というブログタイトルになり月間で一万PVもアクセスがある人気ブログとして伝説となった。今もスピリチュアルブームの名残がまだあるが果たして数年後にはどうだろうか。地の時代から風の時代に変わる2020年前後には時代の変革期にあって歴史的な事件が起こりそうな予感を感じていた。まあ時代の黎明期には必ず歴史を揺るがす事件が起きるものだ。ましてや日本というのはアメリカの影響を受けてブームがはじまるからアメリカで信じられている西洋占星術も時代の流れを読み解くことに適している。それに対して東洋占星術は個人の特徴を観ることに長けている。

夏の終わりから秋口にかけて暗くなる時間が早くなった。ふと作業着姿の男性を目にして現場仕事をしていた若い頃に思いを馳せている。あの頃は、夏場にはまだ明るいうちに休憩時間を長くとり涼しくなる16時半頃から18時にかけて作業の手を早めていく。暗くなったらそれが会社に帰る時間なのだ。雨が降れば現場は休みになるし給料も安くなる。とてもじゃないけれどまともな神経を持っていたら結婚など考えられないはずだった。新城は僕と同じような不安定な仕事をしていたにも関わらず若くして結婚した。僕には彼のような生き方はできない。結婚するならばサラリーマンの生涯年収くらいは稼

ぎきってから結婚したいとそう思っている。僕の掌には生まれながらにして『起業線』という吉相がくっきりと出ていた。一般的な会社勤めには向いていないと言われ続けてフリーランスとして働いている今日がある。しかしながら、小説家だって人気作家になれば20万部売れるなんて当たり前だし、いきなり年収が1000万円を超える世界だ。出版不況と言われつつも作家業は儲かる仕事なのだ。

社長の娘と結婚した新城は『逆玉の輿に乗ればいい』と簡単に言う。彼は家財道具から電化製品まで全て義理の父親に買って貰ったから金持ちになりたいなら逆玉に乗ればいいというのは本心だろう。絢香やKAKOだって一般的に言えば裕福な家庭に生まれた娘達だからガツガツしたところは一切感じさせない。絢香と出会った頃、はじめはステーキ代や飲み物代は出していたのだが、コンビニで肉まんやカフェラテなど細々と買ってお返しして貰っているのだし、そもそも占術師という商売も人気が出れば会社勤めが馬鹿らしく思えるほど稼げる仕事なのだ。そもそも会社員というのは所詮、会社が作り上げた仕組みを使って儲けているのだし、自分一人ではなにもできやしない。フリーランスならば仕事を貰うために営業活動もするし集客も自分でする。だからサラリーマンとフリーランスを比べられることはとても不本意なことだ。自分の力で100円でも稼ぐというのは大変なことだ。そもそも物を売なのかサービスを売のかによっても話しが変わってくる。小説家の良いところは紙とペンさえあれば誰でも気軽にはじめられるところにある。なるべく在庫を抱えないことは商売の鉄則だが、小説家の場合には、紙とインク代しかかかっていない。後は作家がどれだけの価値ある情報を提供できるかにかかっている。

気がつけばもう16時半も過ぎて日比谷公園内には帰り支度をはじめの人たちがちらほら出始めてきた。僕は星崎詩音の鑑定書を再度観てから頭の中でシュミレーションをする。『777』この鑑定結果が出たのは星崎詩音で二人目だが、最初にこの鑑定結果が出た友人の彼女も美容に高い意識を持っている子だった。

僕は日比谷公園を離れて帝国ホテルへと向かう。ロビーを抜けると見覚えのある顔があった。マジカルカラー紫の村田智子（むらたともこ）だった。村田智子は僕を見つけるなり、お疲れ様と言いながら紫色したドレスの裾がヒラヒラと揺れながらそれを必死に手で押さえながら駆け寄ってきた。村田智子は一昔前のトレンドドラマのヒロインに似ていて特別美人というわけではないがとても雰囲気のある女性だ。佳子先生と帝国ホテルで面接してもらった時にも村田智子が付き添いで来ていた。どうやら佳子先生の秘書という役職をこなしているらしい。

「智子先生、今日はどうしたんですか？」

「どうしたって今日は星崎詩音ちゃんの面接でしょ？

アキラ君だけじゃ不安だろうからって佳子先生から急遽頼まれたのよ。んで、星崎詩音ちゃんの鑑定結果出ている？」

村田智子はセクシーな立ち振る舞いでそう言った。

僕はカバンから星崎詩音の天運鑑定書を取り出して村田智子に渡した。村田智子はじっくりと天運鑑定書を眺めながら『777』と呟いた。

「数値化するとスリーセブンじゃない。それにバイオリズム。なんて運の良い子なのかしら。彼女だったら何にでもなれると思うな。」

「ええ、僕も同じことを思いました。もしも彼女が味方につけばうちの協会は鬼に金棒になります。しかしながら少しでも気に入らなければうちの会社ごと消えてなくなります。」

「ああアキラ君。詩音ちゃんは深層心理に星を持っているからなにか目立つようなことがしたいと思うの。」

「ええ、十分にシュミレーションしてきましたから大丈夫です。それにしても遅いですね。もう 17 時を回っていい時間なのですが、..」

僕は星崎詩音との待ち合わせに際してはある約束事を決めていた。秘密の合言葉だ。僕はスーツにピンク色のネクタイをしているなど必要な情報はすでに伝えてある。星崎詩音は、ディーゼルのジーンズにロングTシャツ紺色のジャケットを羽織ってくるという。不思議なことに昼下がりに鑑定した桐山誓と同じようなコーディネートなのだ。僕は帝国ホテルのロビーにいて玄関口を覗いていた。その時背後からポンポンと肩を叩かれて振り返った。

振り返った先には、直毛の髪の毛を茶色に染めていて、後ろで結んだ髪の毛の前髪はくるりとカールしており、今までに観たこともないような美人と可愛いの良いところどりをした女の子が立っていた。

「もしかして星崎詩音ちゃんですか？」

全身に電撃を受けたような痺れが走る。彼女のグラマラスな胸の膨らみ。細いタイトなジーンズにねじ込んだムチムチとした脚。ほんのりシャネルの香水の香りがしている。僕はこんな可愛い世の中にいるのかと思い、夢ではないかと左手で腿（もも）のあたりをつねった。彼女は天使のような白い歯を見せてこう言った。

「アキラさんですよ！ ようやくお会いできた。私の運命の人。」

「運命の人？」

星崎詩音との出逢いによって絢香や KAKO や佳子との甘い日々は追憶の彼方へと消えかけていた。星崎詩音と僕は 13 歳も歳の差がある。出逢うべくして出逢ってしまった二人の恋模様はこの先激しく揺さぶり続けられる。太陽が天秤座に入る頃には秋めいた東京で忘れかけていた小さな恋のメロディーが鳴り響く。

琉球王国への旅立ちと終わらない夢

帝国ホテルのロビーにて星崎詩音と対面したアキラ。紫色のドレスに身を纏う先輩占術師の村田智子を置き去りにしたままに、星崎詩音はアキラの手を引っ張りながら行きますよ！ と言い村田智子には後で LINE しますから今日はありがとうございましたと告げた。帝国ホテルの玄関口ではベルボーイがドアを開けて挨拶をしホテルに停められているハイヤーに乗り込んで星崎詩音は運転手に「羽田の国内線ターミナルへお願いします」と告げる。僕は星崎に無理矢理ハイヤーに押し込められて、何が起こったのかわからないままに、星崎に羽田へは何の用事かを尋ねた。

「決まってるじゃない。琉球王国へ行くのよ」

星崎詩音はクールに言い放つと予約はすでにとってあるから心配するなど付け加えた。

「ちょっと待ってください。いきなり沖縄なんて聴いてません。それに沖縄へ行く支度なんてしてきてませんよ」何がどうなってこんな話しになってしまったのか僕はあたふたして星崎詩音に愚痴を漏らす。

「アキラ君のお洋服くらい買ってあげるわよ。

これでもいちおう世の中では社長の一人娘なんだし、アキラ君の生涯年取くらいはすでに資産の配当金だけで賄えるんだからね。」星崎詩音は勝ち気なセリフで僕を軽く挑発して小悪魔な視線を投げかけた。

「今日は面接の予定だけだと聞いてました。」

星崎詩音のテンポの速い話し方につられてつつい僕も早口になってしまう。彼女の行動力は 20 億以上ある。この行動力とは話すスピードや行動の速さを指し示す数字だが通常は一億から三億が標準なのに比べて星崎詩音のように 20 億を振り切っていたら一般人からすると宇宙人のようにも感じられるのだ。

「だから面接するのは佳子先生と約束したけれども、待ち合わせが帝国ホテルってだけで沖縄への移動中にでも幾らでも話す機会あるじゃない。それに、アキラ君は鑑定師で

しよ？ 私のこと良く知っているのならば、私が琉球王国へ行くと言いだすことくらい想像ついたはずでしょ」星崎詩音はもっともらしいことを言って僕を黙らせることに成功した。確かに星崎詩音の鑑定書を眺めているうちに何を言いだすか検討もつかないと佳子先生と電話で話していたのだ。だから、佳子先生が冗談っぽく「その日のうちに琉球王国へ旅立つって言いだしたら私でも予測不可能だからよろしくね」と言われていた。星崎詩音はもはや経済的な自由を生まれながらにして獲得している。彼女が欲しい未来など見当もつかない。

「アキラ君、いきなりのお願いで悪いけれど、琉球王国では私たち婚約者って設定にしたいの。だから、私のこと詩音って呼び捨てにして。私はアキラって呼び捨てにさせて貰うからさ。ねえちょっと試しに詩音って呼んでみて。」星崎詩音は不思議な子だ。有名私立大学を卒業した後、就活もせずにアルバイトをしながら自由気ままに生活してきたと言うがまるで漫画やアニメの世界に生きているような不思議ちゃんだ。

「じゃあ、遠慮なく。詩音、沖縄の海のような透き通った君の瞳を見ていると魂まで吸い込まれてしまいそうだ。あの太平洋の海の底、まだ謎だらけの深海の世界に飛び込んで、静寂の中、二人きりで愛を語り合いたい。愛しているよ」僕はてっきり星崎詩音はアニメのような世界観に浸りたくておままごとをしたかったのだと勘違いしていた。

「いやだ。アキラとは生まれ変わったとしても永遠に一緒だよ」詩音は僕の言葉を間を受けたか甘くとろけるマンゴージュースを口にしたように頬に手を当てて顔を赤らめた。何がどうなって大財閥の御令嬢とおままごとをする羽目になってしまったのかは謎のままだ。

その時、ハイヤーの運転手が耐えきれないと言った様子で咳払いをしてから高速を使っても良いですか、と尋ねてきたので詩音があまり時間がないので飛ばして下さいねと言った。

星崎は先程から掌サイズのクマのぬいぐるみを手にしてもうすぐ琉球王国へ旅立ちますからね、赤たんはママといつでも一緒だから心配いらないよと声をかけながらクマの頭を撫でていた。僕はスマホで佳子先生に沖縄入りすることを報告したが忙しいのかなかなか既読にならずにスルーされたまま、今度はサヨナラも言わずに離れ離れになった絢香のことを思い出して身震いをしていた。絢香はマジカルカラーが緑でパッと見は癒やし系に見えるが、僕と KAKO のデートの約束に嫉妬した時には信じられないくらいに暴

れた。詩音が勝手に決めた婚約者である設定のままに絢香と KAKO の前に現れたら、どんなドタバタが待っているだろうか。僕は急に頭が痛くなってカバンの中から頭痛薬を探した。詩音にバレないようにペットボトルの水で流し込むと心なしか安心してふうと軽く深呼吸をした。

羽田空港の国内線ターミナルまで辿りつくとは出発までまだ時間があるというので、詩音がアキラの服を買いにユニクロにいこうと言ってマジカルカラー緑の洋服を適当に見繕って買ってくれた。詩音は見たこともないようなクレジットカードを提示して、もしかしてこの黒いクレジットカードは一部の成功者だけが持つブラックカードではないかと思ひ畏怖の念を抱いた。

「アキラ、食事は琉球王国に着いてからとろうね。
今は、お菓子で我慢して。今のうちにトイレ行っておきなさい。」すっかり母親気分でもなった詩音のセリフがおかしく思えてきて、僕は少しだけニヤケ笑いをしてしまった。トイレから帰ってくると詩音は修学旅行のようにたくさんのビニール袋を抱えていて、お菓子やおつまみやお土産で手荷物はいっぱいになった。出発ロビーを抜けて手荷物検査を終えるとタバコが吸いたくなかったのだが、それとなく詩音にタバコが吸いたいと言うと、身体に悪いから吸いすぎないようにしてよね、と怒られながらも一本だけだよと言われて僕は喫煙所に向かった。

灰皿が置かれたテーブルの向かい側。何やら見覚えのある顔。またしても芸能人と遭遇してしまった。星崎詩音は不思議な子だ。引き寄せの法則とはよく言ったものだが、詩音のように運の強い人と行動を共にしていると必ず旬な人物を引き寄せてしまう。果たして、彼女ほどの生まれながらの成功者が求める未来とは一体どんな素敵な未来なのだろうか。

詩音が予約してくれた席はファーストクラスだった。先程からスチュワーデスの方から挨拶に来たりして、かなりのVIP扱いを受けていた。飛行機が無事に離陸すると詩音は羽田空港で買ったクッキーを食べながら、自身の夢を語り出した。

「私ね、ミュージシャンになるのが夢なの。
幼い頃から親は過保護だったけれども習い事はなんでも自由にやらせてくれた。ピアノを習ってたんだけどあまり好きになれなくてね。それでも発表会に出たくて必死になって練習した。私、深層心理に星を持つじゃない？ だから子供の頃から目立ちたいという意識は人一倍あったの。ピアノをやっているうちに飽きてきちゃって今度はボイスレック

スンを習い始めたんだ。

それがまあ面白くてね。ピアノってどちらかと言えば内に秘めた思いを抑えながら譜面通りに弾く練習ばかりするからもっと目立ちたいって欲求が募るばかりでさ。でも、ボーカルだったらその内に秘めた思いを爆発させることができる。とは言え、別に有名になりたい訳じゃないの。クラブハウスみたいな観客の息遣いを感じれるような場所で歌って、私のように不自由に生きてきたこの人生を少しでもわかって欲しいってね、風が吹かれるままに自由に生きていきたいの。」

詩音は胸ねつかえがとれたかのようなさっぱりとした表情を浮かべた。

「詩音ちゃんが不自由？ 経済的な心配が要らない人生だからむしろ自由なんじゃない。」
僕は詩音が不自由に感じる意味がわからなかった。

「不自由だよ。結婚する相手も選べずに、恋愛すらままならない。そんな親の都合で生きていく人生なんてまっぴらごめんだわ。だから、占術を学んでいるのも、本当の自由を手にしたくてはじめたの。」

はじめてインターネットでアキラ君のような自由に生きている人と出逢って正直、ジェラシーを感じた。」

「まあお金はないけれど小説書いたり占術学んだり行きたい場所に行けるのは一般人に比べれば自由に見えるかもしれない。」

「アキラ君だって経済的に自由になったらギターやりたいでしょ？ その夢を応援したいの。」

詩音は真剣な眼差しでそう言うとコーヒーを口にした。

「まあ、ギターはもう趣味でいいかなと思っている。」

所詮はさ、一万時間の法則で長くやればプロにはなっていく。けれども、僕は物書きとしての才能を伸ばしていきたいと思ってるんだ。」

「小説家になる夢？」

詩音はインターネットで全てチェックしているといった具合で僕のことならばなんでも知っているかのように思えた。

「そう。まだまだ、小説家としては無名だからね。」

けれども、作家というのはとても精神性が高く崇高（すうこう）な職業だと思ってるよ。僕は高校生の時にさ、不登校になって家に引きこもっていた過去があるんだ。その

時に、周囲からどんどん差をつけられていく焦りみたいなものを感じていた時に、たった一冊の本が勇気を与えてくれた。その本は宮沢賢治の銀河鉄道の夜なんだけれどもね。なぜかわからないけれども実家にある本の中から銀河鉄道の夜に興味をそそられて、それまで漫画ばかり読んでいたのに、銀河鉄道の夜を読んでから本当の楽しさを知った。人には未来を創造する力がある。例えそれが妄想だったとしても人に迷惑をかけるわけじゃない幸せな妄想だったら世の中のためになると思うんだ。詩音ちゃんの夢とも被るけれども、内に秘めた思いを爆発させるのは、小説家も同じだと思う。今は数少ない読書さんかもしれない。けれども、確実にその人の人生において橋本アキラという作家の生き方や考え方を通して幸福な笑顔を浮かべながら読んでくれている、そんな気がするんだ。それって凄いことじゃない？」

僕は詩音には正直な気持ちを打ち明けることができた。飾り気のない素直な自分の気持ち。それを雲の上で語れるなんて神秘的で美しい夜なんだ。

「アキラ君には占術のことをたくさん教えてもらうからね。そのことを小説に書いて欲しいな。私だってね、趣味で占いはじめて運命の人がいることを知ったの。アキラ君とは運命の人って鑑定結果が出たから試したいの、この先の未来を」

詩音は少し顔を赤らめながらそう言った。

星崎詩音と那覇に到着する頃には、新しい物語がスタートする。新宿店の店長を任されていた僕はまさか、リアル店舗が新宿に構えられるなど夢のまた夢の話だった。東京都大田区蒲田の通り名である新宿村（しんしゅくむら）と副都心である新宿区の架け橋になればそれはそれで幸せなことだ。愛車であるレビンの助手席に詩音を乗せて、不思議なる事象について社会心理学の父であるクルト・レヴィンの理論に当てはめながら解決していく。13歳も歳の離れた詩音のことは妹のようにしか見れないのだが、ふとした瞬間に、この世の物とは思えないほどの色気を感じさせる詩音のこと実際の夫婦以上に大切に思っている。例え、この身体が牢獄に捉えられ自由を失ったとしても、この心の自由だけは誰にも奪えやしない。幾つもの眠れない夜を超えて、僕たちは無実の十字架にかけられながら生きるとはどういうことか？ 本当の自由とは一体なんなのか？ 幾つもの神様からの問いかけに立ち止まりながらも、力強く生き抜いていくことだろう。占術を世界平和のために使いたい、そう強く決意した僕の物語は、始まりもなければ終わりもない、この宇宙の成り立ちのように様々な試練に立ち向かいながら、それでも、未だに懲りず、運命の行く先を見つめていた。

あの世界一美しいサンセットの記憶と共に。

新宿占術師アキラとレヴィン

著 橋本 昂祈

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
